
地上の王者、ISの世界へ

損ねん 試験は赤点

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地上の王者、ISの世界へ

【Zコード】

Z6496V

【作者名】

損ねん 試験は赤点

【あらすじ】

地上評価試験における戦闘で、一人の男は命を落とした・・・。はずだつたが！？

この作品は作者がはじめて書く小説なので、誤字、脱字、内容が酷いかもしれません、小説の書き方を勉強しながら書いていくので、どうか暖かい目で見守ってください

プロローグ

「一発あれば十分だ」

「ヒルドルブ・・・俺は・・・まだ・・・戦えるんだ」

モビルタンク・ヒルドルブ、最高時速110キロ、主砲口径3

0サンチを誇る巨大戦車

その「ロックピット」のなかで、時代に取り残された悲しき狼はその一生を終える・・・はずだった。

しかし、その時は来なかつた・・・その巨大な戦車を光が覆い、この世界から文字通り『消えた』のである。

この事実は、ヒルドルブが使い捨ての駒として送られたこともあり、その後一部の人間が知るのみとなつたという

別の世界、そこでは一人の兵士が果て無き砂漠の中、逃げ惑つている。

その後ろでは、世界最高水準と『言っていた』『エイブラムス戦車』が、まるで紙切れのように切り裂かれていた。

「ば、化けものがあーー！」

兵士は自分に降りかかる死から逃れようとその手に持つ小銃を乱射した

その先には、一昔前なら口ボット少女と言っていたような格好の女性がいた。

それがただのコスプレイヤーならジャパニーズ・オタクなら喜ぶやつもいたかも知れない。

しかし、田の前に居るそれは《兵器》なのである。

数年前、一人の天才が開発し、とある事件を引き起こしてから、この世界のパワー・バランスはおかしくなつてしまつた。

少し前まで兵士の周りには、たくさんの友軍がいたはずだったのだ。先ほどのエイブラムス、それにアパッチもいた。

彼らは皆、作戦はただのゲリラの掃討と聞かされていた。

しかし、今日の前に居る兵器によつて友軍は壊滅してしまつた。

まるで何事も無いよつて田の前にいる、《最強の兵器》はその手にありえない口径の突撃銃を構え、兵士に照準を合わせていた

弾も切れ、成すすべの無くなつた兵士は自分の死を覚悟したが、その時轟音が響き《最強の兵器》は吹つ飛んで機能を停止していた

辺りを見回して、攻撃の主を探した兵士が見たのは、地上の王者だつた・・・・・

プロローグ2

俺は、デメジエール・ソンネン少佐だ

俺はヒルドルブの評価試験・・・その時に起きた戦闘で命を落としたはずだった。

だが、今の状況はどうだ？ヒルドルブは出撃前と同じ、俺も怪我ひとつない。

それに何より辺りを見回しても倒したザクやコムサイも見当たらぬいし通信も繋がらない

「こつたいどうしたつていうんだるうな

そつ啖きながら俺はドロップを一粒口に入る

「ちゅうじゅの時、センサーが音を拾つ

「近いな・・・連邦の残存兵力か？」

おそらく次は61式程度だろうと思つた。

しかしモニターを覗き込むと予想外のものが目にに入った

「なんだよ・・・旧式の戦車じゃねえか」

目に入ってきたのは旧式の戦車、あんなものがいまだに運用されていることが不思議でならなかつた。

とりあえず友軍はあんな物は使わないだろ？から、使うとしたらゲリラぐらいだろ？

「APFSDSを装填、次弾もおなじ！」

とりあえず「イツを倒してから、近くを探索してみよつと想つたその時、旧式がいきなり爆発した

「なんだ、あいつは？」

しかし、旧式を倒したと思われる兵器は実に非現実的なものだつた
「これは、映画かなにかの撮影か？」

無理も無い、戦車やMSを見てきたソンネンにとつて、HSは兵器
には見えなかつたからだ

しかし、そんな考えはすぐに消えた

なぜなら、ソイツはとんでもない機動をしながら大火力を使い、ヘ
リや戦車を次々と破壊していたからである

「おいおい、できるなら冗談であつて欲しかつた」

そんな時モニター越しに一人の兵士の姿が見えた。
あの兵器（？）との距離は300といったところだらうか
当たるはずもないのに小銃を乱射している。

仕方ない、とにかくこじがどこか知る必要があるし、無視しても奴
に発見されるのがオチだらう

「先手を打つ、ちょうど奴は動きを止めた、照準も合わせた」
そして・・・・・ヒルドルブの主砲は火を噴いた

そして、今に至る。

あの後兵士に話を聞いたところ、もしかしたら俺は別の世界に来て
いるのでは？

という説が浮上した。

なぜなら、この世界には地球連邦もジオンもないし、宇宙進出すら
まともに出来ていない。

そして・・・さつきのHSといつ兵器のことだ

さつきの奴は機能停止し、この兵士の援軍が回収している。

そして、俺はビリヤードの軍とともに一度本部へ行き、事情聴取が行われるようだ

別の世界なら俺が一人で出歩くのは危険だし、どこかで保護してもらつたほうがいいだろ。身の安全を確保してもらつてからこの後のことはやつくじと考える

とじめつ

「異世界から来たとは……」の機体を見たら言はずこないからませんな」

事情聴取の後、俺は軍に配属されたことになつた、条件付だが・・・

その条件というのはまず、核融合炉の技術の提供である。

この世界ではまだ機動兵器に積めるほどの小型核融合炉は完成していない

そのため、この圧倒的出力を誇る動力は軍としても手に入れたかつたのであつた

2つ目は、ヒルドルブを軍のイベントに出すのを許可して欲しいとのことだつた。

これは、軍の力が弱まつてゐる今だからこそ、この圧倒的な兵器を宣伝して、地位を上げようと思つてゐるといふことだひつ。

俺もヒルドルブがこの世界で正式採用されるチャンスだと思い、それを許可した。

この2つの条件と引き換えに、俺はこの世界での戸籍と、軍の階級（少佐）を手に入れ、ひとまずこの世界でもやつていけるようになつた。

「この世界でヒルドルブの過去の評価が間違つていたことを証明してやる・・・・・」

俺はヒルドルブのモノアイにそつ語りかける

俺がいた世界ではモビルスーツが主役になつて俺もヒルドルブも実

力を認めてもらえたかった

この世界で実力を認めてもらえれば…………

「 I S か・・・・・」

ヒルドルブから降り、この世界の自宅へと向かいながら俺はそう呟いた

街頭テレビには I S についての番組が流れている

そのためにはまず俺たちがあの《最強の兵器》よりも優れていることを証明しなくてはならない

しかし、前に機能停止まで追いやつたのは単なる偶然で、まともにやりあつたら勝てないことは俺もわかっている

まず、相手はとにかく速い、動いていたらヒルドルブでは攻撃を当てる事すら無理だうつ

2つ目は大きさの問題だ、ヒルドルブと I S だと大きさが違います、速さの事もありだいぶこちらが不利だ

3つ目は火力と防御力である、正直ヒルドルブのウリはこの部分なのだが、ここでも I S に分があるかもしない

突撃銃程度ならヒルドルブの装甲には効果はないと思うが、ビーム兵器は別だ、ヒルドルブには対ビーム用の武装はない

防御でも I S にはシールドとかいうバリアみたいなもんがあるらしい

しかし、それは今までやれば勝ち目がないというだけである
軍の研究者たちはこの機体に改造をしてくれるらしい、それだけで
も今よりだいぶ良くなるに違いない

俺はそう思っていた

そのとき女性の声と複数の男の声が聞こえたので考え方をやめて、
声の聞こえた方向へと向かつ

そこでは、複数の男が一人の少女を無理やりにナンパしようとして
いた
女尊男卑といわれている世の中であつても、エスがなければ複数の
男にかなうわけがない

「おい、お前らなにやつてるんだ？」

俺がそう声をかけると、相手は俺のことが軍人だと分かった瞬間すぐ
に逃げていく

少女もすぐにどこかへ去つていった

自宅に着き、ベッドに寝転がりながら俺は軍からもらつた携帯端末
を開く

「明日は忙しくなりそうだな・・・・・」

『ドロップ』を口に入れてから俺は眠りについた

端末の画面には、演習という文字があつた

1話 交渉（後書き）

書かれた感想がこんなにも早くこ来るとは思こませんでした

これからもがんばって更新していきます

プロローグで使った砲弾の種類を質問されたので答えます

APFSDS (Armor Piercing Fin Stabilized Discarding Sabot) といづ砲弾
なのですが、装甲を貫くことに特化しているようです

イグルーの本編でヒルドルブはこの弾を最初に使い、何キロも離れた場所にいたザクの上半身を吹き飛ばしていました

IS効果はあるかわからないのですが、不意打ちと弾の口径で、直撃したら機能停止どころかはするんじゃないかと思い、あの描写にしました

ねらいへ今日中こもつて一話投稿できると思こます

2話 模擬戦（前書き）

感想にヒカルドルフの主砲を受けたらマジックになれるのでは？
とありました

今のところこの小説では一発当たれば機能停止はしても、絶対防御
までは貫かないといふことにしておきます

初心者の書く小説ですが、これからもどうぞよろしくお願ひします

「へつへつへ・・・技術屋もいい仕事してんじゃねえか・・・」

俺はヒルドルブのコックピットでそう呟く

昨日改修を受けたヒルドルブは、《俺から見れば》別物になつていた
まず機体の周りにシールドバリアが展開されるようになつた、ただ
これはとつてつけたようなもので、エネルギーは装甲内部にあつた
空間に付けたバッテリーから供給しており、使用回数はビームを2、
3回弾く程度らしい

俺にとつてはビームを弾くことができる時点で大きなポイントなん
だが・・・

あとは、チャフが取り付けられた、これはE.Sのセンサーを狂わす
といつ秘密兵器らしい

ただ、これも試作品らしく効果は5分も持たない

あとは前の世界で問題になつていた砲身の冷却システムなどの改善
が図られ、砲弾の命中率も上がつた

見かけ上は何も変わつてないが実際のところは違う、こいつは別
物だ

寝る間も惜しんだ技術屋たちにはあとで礼を言わんとな・・・

とりあえず模擬戦の相手のデータに目を通す・・・・・「ラファール・
リヴァイブ・・・第2世代と呼ばれる区分に入るものらしい、ビー
ム兵器は本格的には実用化に至つていない機体であるが、新しくな

つたヒルドルブの初めての相手としては妥当だらつ

今回の模擬戦は大規模演習のための特殊な訓練場で行われる。

訓練場にあるものは・・・・・まず遮蔽物はコンクリートで作られた厚い壁がある、ヒルドルブでも隠れるほどだが身を隠す程度にしか使えないし、センサーですぐにばれるだらう

地面は・・・・舗装はされていないが段差と呼べるものはない

このただつ広い演習場を見回す・・・どうやら相手が来たようだ

『えええ！？これが私の相手なの？旧式の《雑魚》じゃない！？』

俺はその言葉を聞いて・・・この世界で初めて怒りの感情がこみ上げた
モビルスーツが登場して・・・・教え子たちがみんなザクのパイロットになっていき、俺が時代遅れと馬鹿にされたときとおなじ怒りだ

『こんなやつが私の相手なんて・・・私を侮辱しているのー！』

こいつを倒して・・・・ヒルドルブの実力を知つてもう必要がある、この世界では俺たちに間違った評価など絶対にさせむわけにはいかん！

そのとき通信が入った

『両者配置につきましたか？では・・・・開始！』

ただのでかい戦車など的大らう・・・・そうエリのパイロットは思つていた・・が

『何なのよー！？コイツ！？』

巨体に似合わずアレはすばしっこい

『うるちゅうるとー！』

その手に持つ突撃銃を戦車に撃つた・・・がすべてその分厚い装甲に弾かれる

「へつ、その程度じゃ・・・な?」

ヒルドルブのコックピットで俺はそう呟く

「よし、コンクリートの壁を盾にする」

ISのパイロットはかまわず壁に突っ込んでいた、壁!」とその手に持つ剣で斬るつもりなのだろう

「焼夷榴弾、込め! 次APFSDS!」

俺はヒルドルブをとっさに後退させた、するとそのまま壁にしていた壁が真っ二つになっていた

「威力は馬鹿にならんか!?、でもな!」

ISのパイロットは壁を斬つたとき勝利を確信していた、どうせコイツも他の雑魚と同じだ、ISこそが最強なのだと、しかし、壁を斬つても奴は居なかつた

そして何かがこちらに向かって来るのが分かつた

それは目の前で爆発してISのセンサーから警報が聞こえた

『なにこれ! ? 機外1200-! ?』

そして・・・そこに飛んできた高速の砲弾によつてこの戦いの勝敗は決まるのであつた

なお、絶対防御により、パイロットの安全は確保されているのでそこは安心して良い・・・・と思つ

この模擬戦を放送していた基地ではひとつの騒ぎが起きた
皆がI-Sが最強だと思っていたため、この試合の結果は多くの人に
衝撃を与えた

そして・・・・その光景を一人の天才がモニター越しに見ている
ことに、誰も気づかなかつた

2話 模擬戦（後書き）

戦闘描写は難しいですね

そして予想よりあっさりと終わってしまいました

今回の結果はIISのパイロットの油断によるところが大きい・・・
ということにしておきます

あの模擬戦のあと、俺は基地でたくさんの人間に話しかけられた
ヒルドルブがE.Sを倒したことがやはり信じられなかつたらしい

そして、今この模擬戦の結果から、ヒルドルブの試験的な量産が決
まるかも知れないという朗報が入ってきた

実は、核融合炉を動かすには、ミノフスキー物理学やヘリウム3が
必要なのだが、驚くべきことにミノフスキー粒子は研究者たちの手
によつてすでに発見されていたのである

それを応用させたのがE.Sのセンサーを狂わせる粒子なのだそつだ

そしてヘリウム3は、ひらの世界の地球では普通に取れるものだと
聞かされた

最初は驚いたが、世界がちがければこんなこともあるのかと一人納
得した。

「ところで、ソンネン少佐、君に上から命令が来たよ

その場に居た上官から急にそんなことを言われた

「ヒルドルブと共に日本に行つてもらいたいとのことだ」

俺はその言葉から状況を察した、日本にはE.S学園といつ機関があ
る。

そういう機関を持つ国でヒルドルブのお披露目をじみつとい
うことなのだろう

「了解しました」

俺はそう言つて調整を受けている愛機を見る

ヒルドルブ・・・・・俺たちが、認められたんだ

その後廊下を歩いていると、休憩所のベンチで少女が泣いていた
よく見ると前にナンパされていた少女ではないか

「おい、どうした？ なにがあつたのか？」

とりあえず軍の関係者の家族かもしれない、そう思い、俺は少女に
声をかけた

「え？ ・・・・あ、アンタは・・・アンタが私を！-！」

少女はいきなりつかみかかってきた、鍛えられているようすで、力も
かなり強い

前に助ける必要なかつたのではと思えるほどだ

しかし、軍人である俺は体もそれなりに鍛えている、そうなるとやはり体格の違いといふのは出てくるもので、暴れる少女を突き放して、ちかくにいた奴と協力して取り押さえた

どうやら少女・・・いや、この女性は俺が模擬戦した相手だったようだ
偶然つてあるものだな・・・

とりあえずその少・・・女性は他の奴にまかして俺は日本へと行く準備を始めた

かなりの長期滞在になるらしいので、日本にも家は用意してくれる
との事だ

やつとこの家に慣れてきたといふのと、また荷物をまとめて他のところにいかなければならぬ・・・

この家の設備は整つていて、割と好きだったのと少し残念に思つた

俺は荷物の少し整理をしてから、何気なくテレビのチャンネルを回していた

すると、俺が日本に行つてから用があるといつHS学園が映つた学園といつレベルではないだろと思いつながら、俺はその番組を見るすると、画面に一人だけ男子生徒が映つた、確か・・・オリムラといつたか？
彼はHSを操縦できるただ一人の男性であり、今回はその取材・・・らしいのだがなにやらスーツを着た女性が来て取材が打ち切りになつていた
真相を掘めていないところがなんか昔のツチノ〇とかネッ〇ーを探す番組みたいである

俺はテレビの電源を切り、眠りについた

2日後、俺は日本にやつてきた
イベントは1週間後に行われるようだ、その前にHS学園にも立ち寄つて欲しいとのこと
どうやらヒルドルブの戦闘記録をHSの関係者が学園に流出させたようだ（その関係者は厳罰を受けた）その記録に衝撃を受けた学園の人間が、ぜひそのパイロットである俺を特別に招待したいとの事だ
空港からは専用の車が来て、俺をHS学園まで送つてくれるらしい学園に向かう途中、俺は窓の外をみながら、初めて見る日本文化に内心興奮したりしていた

記念に漢字の書いてあるTシャツを買おう・・・・

日本に旅行に来ているよつたな氣分だ

そして、そんなことを考えているうちに、目的地に着いた
「あなたがデメジエール・ソンネン少佐ですね？」
そこで待っていたのは・・・・・なんともいえぬ気迫のあるテレ
ビで見たスース姿の女性だった

3話 出会い（後書き）

千冬さんの口調が丁寧です

一応相手が戦車でISを倒した人物ということで、こういった態度にしてみました

がオーラは変わりません（笑）

漢字のTシャツは「たわけ者」と書いてある奴なら修学旅行で買った記憶が・・・

4話 HSの戦闘（前書き）

学校の補習で受けたテストの結果が・・・・

「マイッのはやばいぞ（点数が低い意味で）

「織斑千冬……恐ろしいオーラの持ち主だつたな」

俺はそのため息混じりに呟く

先ほどのスーシ姿の女性は、相当有名な人物らしく、あのオーラにも納得できる

また、オリムラ……織斑一夏の姉でもあるようだ

口調はたぶんつくつたものだらうが雰囲気でただ者ではないと思つていたが……

ちなみに話というのはかなり短かつた。なんでもイベントにIIS学園の敷地を使わないかのこと

おそらく、IISを倒したヒルドルブのイベントにあわせて、なにかをしよう企んでいるのかもしれない

軍に連絡すると意外なことに、その案に賛成との事だ

IIS学園で軍の絡んだイベントを行うなど前代未聞なのが……

逆にそれで軍の宣伝になると考えたのである

それに……確かにこの学園には我が軍の特殊部隊の人間も通う予定のことなので、そこも関係していると思う

そして、俺は今ドームのような施設に案内された

どうやら帰る前にIIS同士の戦いを見せてくれるようだ

「ほう、あれが専用機つてやつか……」

織斑一夏のIISが出てきた、真っ白い機体で、白式といふ名だと聞

いた

もう一方は青龍刀を持つた奴で、中国から来た生徒が使っているそ
うだ、格闘戦が得意なのだろうか？

戦う前に何か話しているようだ。たぶんあの2人にはなにがあつた
のだろう

そして、戦いがはじまつたときに驚いたのが、格闘戦が得意かと思
つていた中国のISが一夏に見えない何かで攻撃し始めたことだ
あんな兵器までISは積んでいるとは・・・・やはり最強の兵器
というのは飾りではない・・・・か

もうひとつ別の意味で驚いたことがある、あろうことかISに乗つ
ている人間の声が聞こえてくる
つまり回線をオープンにしたまま戦っているのである

実戦でそんなことをするのは相当頭のおかしい奴だろう

そんな考え方をしていたら、先ほどまで不利だつた一夏が俺から見
れば凄い機動をして徐々に距離をつめて、刀で逆転勝利をしていた

やはりISの性能は凄いものだ、機動性も使用する武器も・・・・
ただ、ひとつ感じたことがある
こいつらは本当の戦いを知らないということだ

まえにISと模擬戦をしたときにも感じたのだが、戦いを勘違いし
ているのだ

ISはスポーツみたいなものだといわれれば仕方ない気もするのだ
が、この世界で始めて見たISのことも考えると、全く実戦に出て

いないわけではないかもしない

なぜなら、国際条約といえども、守らない奴はいるのだから・・・・・

・

脳裏には歎獲され、味方を装つて集積所を襲つていたザクが浮かぶ

俺はエス学園まで迎えに来た車に乗り、外の景色を見ながらイベントのことを考えていた

「イベントに向けて準備をしないとな・・・・これから忙しくなるぞ・・・」

「うわー・・・、でかいなあこの戦車」

「一夏ー！そんなものを見ている暇はないぞー！急いで集合しなければ、また・・・」

しまった！今日はこんな大切なイベントの日だし、遅刻したら出席簿で頭をたたかれるぐらー！じゅすまないかもしれない！

今俺が見ていた戦車はホントにでかかった、30メートル以上の長さがあるなんて・・・

今日E.S学園で行われているイベントには、各国の政府や、軍関係の人間がたくさん来ている

なんでも、E.Sの宣伝と、どつかの軍の最新鋭機の発表をするみたいなんだ

さつきの戦車もその中の一機だつて聞いた
でもE.Sが有名になつていてるのに何で今最新式の戦車なんか発表するんだろう？

あつー？やばい、早く走らなきゃ出席簿がー！

「おい！ヒルドルブに積んでいたマシンガンの予備のマガジンはどこにやつた？」

「すいませんー！あのマシンガンは今回のイベントには使わないので、マガジンは基地のほうに置いてきたのですが・・・」

俺は今、イベントでの学園のグラウンドを走らせるヒルドルブの最終チェックを行つてゐる

本番まであと10分、何もなればいいのだが・・・・

10分後、グラウンドではISによるアクロバット飛行が行われていた

「一夏ーもう少し左を飛べ！」

「おう、わかった！」

その時通信が入った

『ISのパイロット全員へ、俺はヒルドルブを任せている、デメジエール・ソンネン少佐だ』

この人があのでっかい戦車を操縦してるのはか・・なんか口ワソウな人だなあ

『これよりヒルドルブの走行を始める』

ふう、やっと終わった、アクロバットって戦いとは違うから疲れるんだよなあ

おっ、出てきた、やっぱりでかいなあ・・・あの戦車

しかも、でかさのわりに速いし・・・!?

その時、グラウンドの一角に穴が開いた

「うわっ、なんだ!?

「一夏さん!あれを!」

そこには真っ黒い、全身装甲のISが3機いた

そしてすぐに千冬ね・・・織斑先生から通信が入った

『織斑！お前たちはすぐに退避しろ！教員部隊がすぐに向かう！』

「でも、ここで逃げたら他の人たちが！」

『ふん、こいつはちょうどいい・・・エリとの実戦でのヒルブルブの性能を証明する機会ができた！』

「え！？」

「EJのヒルブルブの性能、見せてやる！じゃねえか！シールドバリア展開！TYPE3装填！」

ヒルブルブが暴れまわるには少しグラウンドは小さい、がここにはISがいる

「まずは編隊を解かせる！敵が散開したらEJが各個攻撃をしてくれ！」

『わ、分かりました！』

ほう、織斑一夏、なかなか判断が早いじゃねえか・・・だが

「TYPE3、てえ！」

よし、うまく散開したな・・・EJに本当の戦争を教えてやる

『焼夷榴弾装填、次、APFSDS！』

まずは1機こっちに向かってきたが、なかなかすばやいな、しかし、

俺の勘ではこいつらは・・・

「スモーク散布！焼夷榴弾、てえ！」

黒いEISの一機は外部からの情報が途絶し、正常に動作しなくなつていた

やはり無人か！こいつらはセンサーからの情報でしか動けていない！

「APFSDS、てえ！」

まず一機、とりあえず織斑一夏のほうを見てみた・・・が何も問題は無さそうだ、EISのことは良く分からんがあいつはなかなかいいパイロットになるんじゃないだろうか？

しかし、EJの学園の訓練機である打鉄に乗っている女子生徒たちは、苦戦しているようだ

「うつ、シールドエネルギーが！」

「夏葉ー、こいつめえー！」

なんのよこいつらは！すごい威力のビームを撃つてくるし、パワーだつて半端じゃな・・・あつー？

「し、しまつた！」

あのEISのビームにかすつてしまい、エネルギーがかなり持つていかれ、地上へと落下してしまった

「 まざい！」

黒い I.S が私に銃口を向けてきた、このままだと私・・・

その時、緑色の巨体が、地上に降りてビーム砲を構えていた I.S を吹っ飛ばした

その巨体は先ほどまでとは違い、車体の上には人型の上半身がついていた

「 危なかつたな・・・」

俺は打鉄が追い詰められているのを見てから、即座に変形させてからヒルドルブを加速させ、車体を黒い I.S にぶつけた

主砲を撃つと打鉄も巻き込むかも知れなかつたから格闘戦に持ち込むことにしたのだ

「 おい、 そこの打鉄！ すぐに動けるか？」

見たところ推進器がイカれているみたいだが・・・

『 は、 はい！ なんとか・・・』

丈夫にできるな、 I.S は・・・しかし損傷しているのは確かだ、小さな損傷でも死につながることがある

「 早く退避をするんだ、 こいつは俺が何とかする！」

そういうしているうちに黒い I.S が起き上がり、 ヒルドルブの頭の前まで接近してきた

「 つぶしてやる！ シールドバリア出力最大に！」

俺はクレーンアームを操作してEHSを殴りつけた
「これでも喰らえ！」

そして混乱しているところに携帯しているザク・マシンガンを撃ち込み、EHSの機能を停止させた

向こうも終わったようだな、EHSが白式の刀に切り裂かれているところがモニターに映った

これで一件落着

『ソソンネン少佐、あとでお話があります』

とほこかなさそうだ

6話 処罰（前書き）

まとめて2話投稿をします。

7話のほうは前後編となっています

原作崩壊が・・・・

オリキャラが出来ます。設定などはまとめて投稿する予定です

これからガンダムからもキャラ、兵器等出していく予定もありますので、希望がありましたら是非！

「そりゃ……」

俺はあの戦闘のあと、今回のイベントに来ていた軍の関係者とHS学園の人間に呼び出された。

防衛のためとはいえ、無断で戦闘行為をしたのだから、処罰は受けることになる

なにせヒルドルブの主砲、30サンチ砲の威力は絶大である。ISのシールドエネルギーを一撃でダウンさせるほどだ

今回の戦闘においても、グラウンドにもしものためにと張つてあつたシールドが流れ弾を一発受けただけで一部エネルギーがダウンしてしまつたのだ

見に来ていた人間に被害がでなかつただけ良かつたかも知れない

「今回の件は、条件付きで不問にする……とのことです。」

「なんだつて？・・・」

しかし、俺が考へてもいなかつたことが起きた。今回の戦闘を見た各国の代表たちが今回の件の処罰を無しにするより、はたらきかけてくれた・・・・条件付きで

ヒルドルブと搭載されている核融合炉、あれを本格的に量産して、各国へ輸出して欲しいとの事だ。

このようなはたらきかけがあり、今回の件の処置は無しとなつたのである

IS学園にある会議室から出た俺は、窓からグラウンドを見る

「 もう、こんな時間か・・・・・・」

グラウンドは夕焼けに照らされている・・・会議室はカーテンが閉められていたため外の様子は分からなかつた

今日はすいぶんと疲れのたまる一日だった・・・・・・ そう思い廊下を歩いていると、一人の少女が話しかけてきた

「あ、あのっ…さつきの戦車に乗つっていた人ですよね?」

「ああ・・・・・何が用か?」

「さきほどはありがとうございました、おかげで友達も軽い怪我をするだけで済みましたし」

「あの時のISのパイロットか・・・礼には及ばん・・・・・おい、その怪我は?」

「ああ、これですか?…さつきの戦闘のときこうよつと地面に吊きつけられちゃつて・・・・・」

少女の右腕は赤く腫れ上がつていた、ISが衝撃を吸収しきれなか

つたようだ

「少しじつとしてこいろ・・・・・」少しひつ座我はまつておへと危ないからな

「えー?あ・・・・・その・・・」

俺はポーチから携帶用の治療器具を取り出す、持つておへとこわと
いつときに役に立つ

怪我をそのままにしておくと戦場で命取りになる事だつてある、念には念をつてやつだ。

「いとなもんだらう、しまはりへは安静にするんだな。まあ、明日の
イベントはたぶん・・・」

イベントは3日間続く予定だつたのだが、1日目はこんな襲撃を受
けてしまつたのだから中止になるだらう

「あ・・・の、ありがとついでこます、明日もしイベントが続いて
たら、案内しますよ。これ、連絡先ですつ!そ、それじゃ、また!」
そういつて走り出す少女、安静について言つたばかりだらうが・・・

「ふん・・・まあ、明田はヒルドルブは動けないだらうし・・・」
ヒルドルブは戦闘でシールドエネルギー発生装置がオーバーロード
してしまつたため、応急修理中である

その巨体ゆえに運搬は特殊な輸送機などを使わなくてはならないの
で、今は学園内で修理するしかない

それにしてあるの少女・・・顔を赤くしながら走つていたが、まさ
か!?

ひとつつの可能性にたどり着いた俺は少し困つた

・・・が、俺は大人だ、返事ぐらいはするつもりだ、あいまいな態度をとるつもりはない

「全く・・・今日は忙しいな」

そうつぶやきながら夕焼けに染まる空を見た

前編です

ガンダムからの兵器は、モビルスーツに限らず、モビルアーマーとか戦艦、61式とかボールみたいなのもかまいません。

人物も結構マイナーな人でも。私はクワランとバムロ（バロムでもアムロでもないです）が結構好きです

「約束の時間になつたな・・・」ここで待ち合わせのはずだが・・・

俺はIS学園内にある食堂・・・をイベント用に改装したカフェに来ている

「すいません、待ちましたか?」

待ち合わせに来た少女は、昨日とは少し雰囲気が違う。よく見るとうつすらと化粧をしているのが分かった。

「いや・・・今来たところだ」

まるでデートの待ち合わせをしていたカップルのような会話だが、それは気のせいだ

「そうですか。あ、まずはどこに行きますか?行きたい場所とかは?」

どうやら俺に気を遣つてくれているようだ。おそらく昨日一通りは見て回ったのだろう

「ああ、まずはここに行つてみたい、同僚がおススメだと言つていた」

同僚とはイベントに来たヒルドルブの整備兵である。ソイツはこの世界に来てからの俺の知り合いの中でもっとも日本文化に詳しい。たしかシュヴァルツェ・ハーゼの・・・クラリッサ大尉とよく日本文化について話し合っていると聞いたことがある。ISとの模擬戦のあとに数回交流があつたため、あの部隊には俺も知り合いがいる。

「え？ これですか？ いや、でもこれは……」

「そりか？ 面白そりじやないか

俺が指差したのは『メイド喫茶』、EVA学園の教師がウホイトレスをやつしているらしい

アイツはママヤがどいつとかなんとか言っていた。それについて質問したら同僚はメイド喫茶は日本の代表的な文化だとなんとか熱く語ってくれた。…………正直俺はあまり理解できなかつたが・

・

「俺、なんか噂されてる気が……」

いかんいかん、今日中にヒルドルブの修理を終わらせて明日はまたマヤマヤに会いに行くんだ

「おい、ミハエル！ ちゃんと作業しろーそこのがケーブルが接続先間違つてるぞー！」

「す、すみません班長！ 今すぐ！ ！」

こりや、本気でやらないとな……がんばれば明日には……

「ほっ、EVAがメイド喫茶か……ん？ ビリした？ 入らないのか？

「い、いえ……それじゃ、入りましょっ」

「「お帰りなさいませ、」」主人様」

「ほう・・・・・」

入るとメイド服を着た美しい女性が迎えてくれた、なんだ？隣に居る少女の機嫌が悪いな・・・・・

「うう・・・・・」

まず席に座り、注文をした。俺は同僚のミハエルがイチオシしていきたオムライス、少女は・・・なぜか何も頼んでいない

「ふん・・・なかなか立派な喫茶店じゃねえか。そういうや自己紹介、していなかつたな・・・・俺はデメジエール・ソンネン少佐だ、ヒルドルブのテストパイロットをしている」

「私は、桐岡柚、この学園の一年です。」」う見えて一応HSの操縦は得意なほうなんですよ」

「よろしく頼むぞ。とにかくで・・・なにも頼まないのか？」

「はい、私はあんまりお腹空いてないんで・・・・・ やはりどこか機嫌が悪そうだ、まあいろいろ難しい年頃だから仕方ないのかもしねない

「お待たせしました！」しゅ・・・・ソンネン少佐！？」
眼鏡をかけていて、背が低いわりに出でているといふは出でているメイドが俺を見て驚いていた

「あなたはたしか・・・・山田先生・・・だつたかな？」

俺はすこし丁寧な口調でそう言つ。

「ど、どうしてソンネン少佐が、」」んなどうか？」

かなり動搖して居るようだ。これがミハエルの言つていた萌え?とかいうやつなのか?俺にはよく分からない

「ああ、今日はちょっとこの生徒とこっしょにイベントをまわる」とになつていてね・・・」

「ええ!?せ、生徒となんてそんな!?・・・・・いけませんよーああ、でも人の恋愛に口出しさは・・・」
とてつもない勘違いをされているようだ。ここは少し弁解を・・・

「どうしました?山田先生?」
山田先生の異変に気づき、やつてきたメイド、かなりシンシンして
いて・・・おや?

「織斑先生、なかなか似合つて居ると思いますよ」
俺は素直に感想を言った。・・・・・その時、なぜか空氣が凍つた
ような感覚がした

「ソ、ソンネン少佐だと!?なぜこんな感じに!?・・・まさか、一夏
もここに来ているのか?」

いきなり慌てはじめた。まわりのテーブルで会話をしていた生徒たちが、ありえないものを見るような目をして居

「落ち着いて、織斑先生!・・・・・ソンネンさんのせいですよ?」
柚がなぜか俺のせいにしてきた。よく考えると織斑千冬は世界でも有名なI.Sの搭乗者だが、それゆえにあまり男と関わったことがなかったのかもしれない。もつと言えばI.S学園は女子校みたいなものだから、I.S学園の教師や生徒にも同じだ

騒ぎが収まつたところで俺たちはメイド喫茶を後にした。織斑千冬が落ち着いたあとに、ほかのメイドが来てオムライスにケチャップで文字を書いてくれた。なかなかおもしろいとは思つたが……

「次はどこに行きますか？ソンネンさん。私はここなんかいとと思うんですけど」

パンフレットの地図を見ながら柚は学園の軽音楽部のコンサート会場を指さす。とても不機嫌だが、これは俺のミスだな。正直二人でまわつてしているときに他の女性をほめたりするのはあまりよくなかった……と反省している。

「軽音楽部か……いいと思つた。そこに行くか……ん、あそこにはいるのは……」

コンサート会場に向かつとき、俺は世界でただ一人のIRSが使える男に出あつ

今日まとめて何話か投稿します。

機体のアンケートですが、EGL-00から出すならヅダがやはり一番現実的とのことで、ヅダを出すことを決定しました。

ヅダだけでなく、一年戦争の他の機体も出していく予定です。

アンケートをぐださつた皆様、本当にありがとうございました。

初心者の書く小説ですが、これからもどうぞよろしくお願いします。

「全く、なんで俺が鈴に殴られなきゃならないんだよ・・・」
ただ俺は酢豚を奢つてもらおうと思つていただけなのに・・・
鈴だけじゃなくて簫もだ。いきなり馬に蹴られただのなんだの・・・
・簫は木刀振り回してきたり・
アレ、痛いどこのじや済まないんだぜ？

そう思つていたら、一人の男がこっちに歩いてきた

「「ひんなどこりでひとつ言か？少年」

この人は確か昨日の・・・

なるほど・・・織斑一夏は相当苦労しているようだ・・・頬に平手打ちを喰らつたあとがある。
この学園で男一人でやつていくといふのはとても大変なんだりつ・
・

「ソンネンさん、早く行かないとコンサート始まっちゃいますよ？」
柚が俺にそう伝えた。織斑一夏とはもう少し話をしたかったが・・・

仕方ない、またいつか機会があれば・・・だな

「じゃあな、がんばれよ少年」

そう言って俺はコンサート会場に向かった

コンサート会場に着いた俺は柚に引っぱられて列の最前列に来ていた

「ほう、なかなか本格的なバンドだな」

「うちの学園は部活動の設備も良いんですよ

「ほう・・・柚、お前も何か部活動に入っているのか?」

「いや、私は特に何もやってないです。」

「そりか・・・」

そんな会話をしながら、改めてEVS学園の設備を実感していく

「今日は楽しかった。久しぶりに学生の頃を思い出した・・・」

「そうですか、それは良かったです。あの・・・ソンネンさん・・・

「

「桐岡やーんー山田先生が呼んでるよーー！」

「えーーすぐ行くよー・・・ソソンネンさん、じゃあ、また今度・・・」

また今度・・・か・・・

俺は今一人でヒュ学園のグラウンドを見ている

「楽しい時間というのは早く過ぎていくものだな・・・」

メイド喫茶に軽音楽部のコンサート・・・どれも楽しかった。だが・・・あと2日後には、また日本にある軍の基地に戻つて模擬戦の毎日だ

前は模擬戦で俺とヒルドルブの評価を上げることしか考えていない

つた。

俺は今日、そんな日常の中で忘れていたことを思い出した・・あの少女と出会つて、変われたのかもしけんな・

「あの、すいません!」

そんなことを考えていたら、後ろから声をかけられた

「さつきの少年か、どうした?」

振り返つてみると織斑一夏がいた

「実は俺、昨日の事で言いたいことがあつて・・・・・・昨日は、助けてくれてありがとうございました」

なるほど、昨日の戦闘の礼か・・・・確かに俺の顔は『戦車でEISを倒した人間』として有名だつてミハエルが言つてたな・・・・

「ふん・・・お前もよくがんばつていた。EISのことは良くわからんが、いい動きしてたと思つた。といひで少年、お前はさつき何をぶつぶつ言つていたんだ?」

「え!? それは・・・・俺がこの学園に来てから・・・まあ、いろいろ大変で」

「女のことが?」

「!?」

図星か・・・・・

「話してみろ・・・なにかアドバイスできることがあるかもしけんぞ?」

「実は・・・この学園に来てから、一人の幼馴染と再会して・・・すごく嬉しかった、でも毎日なんか暴力を振るつてきたり・・・木刀振り回してきたり・・・」

「ふむ・・・お前が何か変なことをしたわけじゃないんだな？その年なら若さゆえの過ちも・・・」

「違いますよ！！少し約束を間違えたり、風呂上がりのところを見ちゃつたり・・・」

後ろの方は確実にこいつのせいじゃねえか・・・ん？約束？

「違わないだろ？それは・・・で、約束つてのは・・・なにか大切なことだったのか？」

「いや・・・ただ昔、酢豚を毎日齧つてくれるつていう約束をしたんですけど、それを言つたら急に怒りだしちゃつて・・・」
なんだそれ？待てよ・・・確かミハエルが・・・

「ソンネン少佐、日本では男は女性に味噌汁を毎日作つてくれつて言つてプロポーズするんですよ。」

「ほう・・・なかなか面白いプロポーズのしかただな」

酢豚を毎日作る＝味噌汁毎日作る＝プロポーズ

「おい、お前……それ、プロポーズの言葉だぞ」

「ええ！……そんな、鈴がまさか俺に？そんなわけないです上」

「こいつ……とんでもない鈍感だな。

「まあいいお前は、どうなんだ？ソイツのことはどう思つている？」

「！？……鈴たちはただの仲間で、そんな風には……思つてないですよ……ハハハ」

ん？今のソイツ少し目を泳がせていたぞ……まさか……

「ふん、まあいい。後悔しないようにがんばれよ。

それから……もし、お前が誰かに好意を持っているのなら、あいまいな態度をとるな。そつやつて自分に嘘ついてると、お前自身も……相手も傷つけるぞ……これが、人生の先輩としてのアドバイスだ。」

「…………」

俺は一枚の紙を渡す

「困ったときは連絡してくれ、じゃあな・・・がんばれよ・・・」

その後、3日目も特になにがあつたわけでもなく、イベントは終了した。

織班一夏はアドバイスをどう受け取ったか知らんが・・・おそらくうまくやつてるだろう・・・

「鈴、もしかして俺のこと……好きなのか？」

ソンネンさんが言つてたこと、ホントなのか?これで勘違いとかだつたら、俺、粗筋めざいことになる気が・・・・、気軽に聞こへ

「ア、アンタいきなりなんだ」と詰つたよ！——夏…………
「あつー悪い、やつぱり……「それ……どうしても聞きたい
？」

え？なんか変だ・・・・・鈴が真剣な目で俺を・・・・・鈴つてこんなに綺麗だつたか？あれ？こうこう展開、弾の家で読んだ漫画でみたぞ、まさか・・・

「見つけましたわよ！抜け駆けするなんて・・・卑怯ですわ！」

「少し話を聞かせてもらひおつか？・・・一夏」

なに!? セシリ亞、こんな時に! それに笄、本物の刀とか洒落にな

らないぞ！？ビームから持ってきたんだよ！？

「鈴！助けてくれ！俺の命の危険が！…つてもう逃げて…・・・算なんで刀を振り上げてるの？それ喰らつたら本当に」

「問答無用！！」

「理不尽すぎるだろ、コレ！…」

「ん？着信か・・・・・織斑一夏・・・・・よつ、少年、上手くいったのか？」

「あ、ソンネンさん！助けてください！…俺の命が危険にさらされ・・・・・今は上手く倉庫に隠れ『一夏！…もう逃がさんぞ！』『なにを話していたのかきつちり教えてもらいますわ！』大丈夫だ織斑一夏・・・・こここの扉は鋼鉄製・・・しかも鍵とバリゲードだつてしまか・・・え？なんで扉が真つ一つになッ！？』『もう、逃げ場はないぞ？』『覚悟はでけてます？』『ウオオオオオツ！…！…スタアアアアアアズ！…！』おいおい嘘だろ？』

「・・・・・・・・・・・・」

どうやら上手くいかなかつたようだ・・・・・・・鋼鉄製の扉を真つ二つって何事だ？ISを装備していたんだと信じたい。最後らへんは良く聞こえなかつたが、ミハエルがやつていた日本のゲーム的な声の敵がいた気がする。

織斑一夏・・・・・お前よくそんな環境で毎日生活してるな・・・・

これからも織斑一夏の苦労は続きつつある

どちらかといつといの話は一夏と関わらせるための話みたいなもの
です。

なので内容が酷い・・・作者の技量不足です。

オリジナルのキャラはこれからもっと動かしていきたいと思つてい
ます

8 話 楽しい（^_^）ショッピング（前書き）

臨海学校の前の話です

鈴ルートですね・・・なぜ鈴がヒロインかと思いつつ・・・
作者の好物が酢豚だからです

アニメ見たときに一夏ひらやましいなあ・・・と思つていたり

8話 楽しい(?) ショッピング

あのイベントから時間は経つた。IIS学園には我が軍のボーデヴィツヒ少佐が転入した。

織斑一夏と同じクラスのようだ。

俺は書類を片付ける。最近は模擬戦をやることも少ない・・・・

・正直退屈だ・・・・

あのイベントの後、量産型ヒルドルブは少數生産され、輸出もされた。

輸出用のものはオリジナルのものとは異なり、操縦性の追及のため
にパイロットは3名、変形機構も削除されている。ただ、変形機構
をなくした分のスペースをシールドエネルギー発生装置に置き換え、
ジェネレーターと直結させて出力を向上させたため防御力は上がつ
ている。装甲材がチタン合金に変わっていることも変更点としては大
きい。

現在ドイツ軍はオリジナルと装甲材質とシールドエネルギー発生装
置の増設がされている以外はほぼ同じ設計のものを7機運用してい
る。

暇を持て余していると、携帯にメールが来た、差出人は織斑一夏だふむ・・・・外出許可が取れたため、外で食事でもどうですか？・・・

か

織斑一夏とはあの後メールでやり取りをしている。相談を持ちかけられることのがほとんどだが・・・・・
今日は模擬戦もないことだし、外に出るのも悪くないな・・・

俺は織斑一夏との待ち合わせの場所、ショッピングモールに来ていた。

「よう、早かつたな。少年、最近はどうだ？・・・・例のプロポーズの件も含めてな」

「最悪ですよ、刀振り回されたり、ネ シスが追いかけてきたり・・・・・

後ろのほうにはノーロメントだな・・・・・

「大変だな、お前も。今日は確か臨海学校に持つていく道具を揃えるんだつたな？」

「結構あつたり流しましたね・・・・・はい、とりあえずシユノーケ

リングの道具と水中カメラを・・・

水中カメラとは・・・本格的過ぎるだらつ・・・
確か昨日テレビで熱帯魚特集なんてのをやつてたが・・・ブームなのか?

「まあいい、まずはその店に行くか・・・」
「で話していくもアレだしな」

そのとき俺は、何者かに尾行されていることに気づいた。人数からして5・6人、中にはプロもいるようだが・・・あとの数人はおそらく素人だ。この様子だと、俺やコイツの命を狙っているわけではないようだ。

・・・あの銀色の髪は・・・なるほど、じぱんく泳がせとくか・・・

「ソンネンさん、入りましょう」

「あ?ああ、そうだな・・・」

コイツはなぜ気づかないのだろうか?さつきからアフロのカツラにサングラスをかけた不審な奴が後ろ20メートル付近をついてくるのだが・・・こここの警備員しつかり仕事してるのだろうか?俺だったら即、警察につきだすレベルだぞ。

「これと・・・・」これでよし・・・と

「水中カメラってソレか？思つたよか安そうだな・・・」

「ソンネンさん、知らなかつたんですか？今は使い捨ての水中カメラもあるんですよ」

「ほう・・・・便利なもんだな・・・俺もひとつ買つてくか・・・

・使う機会があるかは分からんが・・・」

次に来た店は、なにやらアクセサリーが並んだような店だった。

「ほう・・・・お前から誰かにプレゼントか？」

「まあ、そんなところです・・・・・あ、誰にも言わないでくださいよ」

「分かつてゐ・・・・そのネックレスよりロッチのほうがいいんじやねえか？」

「これは・・・・・ブレスレットですか？」

俺が選んだのは、何の変哲もないブレスレットだ

「いきなりネックレスつてのも重いだろ・・・・ブレスレットぐらいなら相手に気を遣わせることもないだろ」

「なるほど・・・・・やつぱつこいつこののはソンネンさんがあんが一番頼りになるな」

「まあな・・・・・人生の経験と、勘つてやつだ。お前もやのうひ身につくだらうよ・・・・」

「一夏、あのプレゼント誰に渡すんだろう……
「まさかあのプレゼントはわたしに……」

そんな会話を隣で指輪を見ているアフロ一人組みがしている。これでも気づかないとは……まったくコイツは……

「俺たちは今、近くにあった中華料理屋に来ている。あいつら……
・ここに来てもバレバレな尾行を……
店の人が困ってるぞ

「いや、今日はソンネンさんが来てくれて助かりました。おかげで
プレゼントもちゃんとしたもの用意できましたし」

「礼はいらん。あとは渡すときにお前がミスをしなければ大丈夫だ
な。」

俺たちの前に料理が運ばれてくる、ラーメンと酢豚だ。今どこから「あたしの作る酢豚のほうが……！」と聞こえた気がする。

「この酢豚メチャクチャうまいですよ、ソンネンさん」

「ほう・・・・浮氣か？」

「なにがですか？」

ヤバイぞ……お前の後ろの席から発せられている殺氣に気づいていないのか!? わきのは空耳ではなかつたか! 酢豚で反応するといふことは……アイツが例の……

「ふむ……お前は、未来の彼女の作る酢豚とこの店の酢豚、どっちがうまいと思つ?」

この選択肢で、選択を誤ればコイツに未来はないだろ。いろんな意味でな……

親しい女性の前で他人の作った料理を褒めると口クな事はないのである……作者もそれで痛い目に……

「? なにか電波が……み、未来の彼女つて……鈴とはまだそんなんぢやないですよ。確かに、最近すゞく可愛くなつてドキッとしたり……まあ、なんというか……」

「まあ、要は……好きなんだろ? その話は何回も聞かされているんだが……」

最近その鈴といふ少女がどうだのといふ話をしてくれることが多いし、これは確實だろ。う。

そして、その少女が今コイツの後ろで顔を赤らめている。

なるほど……これがミハエルの言つ『フラグ建築』か……・これが日本の文化なのだと聞いたことがある。

そろそろいいだろ? 尾行してきてるのは分かつてたんだぞ、ラウラ

「もういいだろ? 尾行してきてるのは分かつてたんだぞ、ラウラ

少佐

「むへ、バレていたのか。流石はソンネン少佐……」

「ラウラーー？ それにみんなもーなんでこんなとこにいるんだよー？」

？

「ふん・・・・そここの五人組はまだまだだな。IS学園で習つてないのか？ どうして尾行なんてしようと思つたんだ？ ・・もしかして、『コイツが気になつてたのか？』

「それは・・・・一夏は私の嫁だからだ！」

「え？」

その後も意味の分からぬ説明をし始める6人・・・・

なるほど・・・・・・『コイツはこの6人の少女全員から好かれていたわけか・・・・・・』ハエルが知つたら何と言つだらうか？

「飯の代金は置いてくぞ・・・・・あとはお前が何とかするんだな・・・・

・

「ええ！ ？ そんなん！ ？」

・・・・・・ミハエルはもづ準備はできているらしいしな・・・・

その後、一夏からのメールによるとショッピングモールの水着売り場に行つた後、無事にブレスレットを渡すことができたらしい。அஇசுもなかなかやるじゃねえか・・・・・・ただ、俺の予想だとこの後・・・

電話の着信だ・・・・・・やはりか！

「ソンネンさん・・・・・・助けてください」・・・さつきからあいつらの様子がおかしくて・・・・今ちょっとトイレに行くつて言つて離れてるんですけど・・・・このままじゃ俺『ビリリリリリリリリ』あれ？なんで店に置いてあるラジオが鳴り始めてんだ？『一夏！逃げてっ！』鈴！？お前なんでそんなにボロボロなんだ？とりあえず俺が手当てを『ほう、一夏・・・・やはり貴様・・・・』『ダメですわよ鈴さん？抜け駆けどこりかそんなことまで・・・・』『一夏は私の嫁なのだぞ！』『本当に一夏はえっちだね・・・・僕が直してあげなきや・・・・』なんか来た！？あの表情アウトだろ！これが、これでラジオが鳴つたんだな！？もう籌そつくりの人形が歩いててもビックリしない？？・・・・ザザザザザザザザザザザザザザザザ

「聞いただろミハエル・・・・

「はい、しつかり聞きました。なんかもう怖いです・・・・

この話は日本で本当にあつた怪奇現象としてドイツ軍の中で永遠に語り継がれることになる。

8話 楽しい（？）ショッピング（後書き）

女性の前で他の人の料理を褒めるのはやめましょ（笑）……いや、本当にこれは大事です。

作者の体験なのですが……

所属している同じ部活の女子が大会のときにクッキーを作つて來ました。

その時は特になんともなかつたのですが、その後が……

その数日後、他の女子からバレンタインデーの……いわゆる友クッキー（？）というものをもらつたときに、すぐへつまいね！本命は誰にあげるの？……そう言いました。

すると、なんとこうことじょう一同じ部活の女子たちが怒り始めたのです！

それが引き金で、部活内で女子から冷たい視線……という状態が一週間ほど……

本人に何故怒っているのか聞いてみると、他の人のクッキーを褒めてたのがむかついた……とのこと

女心って、作者はよく分からないですがあんまり気をつけ
てくださいね。

バイオ ザードとサ レント・ヒ ネタは、最近友人がソフトを貸
してくれたので、ちょっと入れてみようかなと・・・・

8・5話 幻影は光に消える（前書き）

これは、連邦軍のオデッサ作戦中に起きた話です

宇宙世紀に舞台が戻っているので、IISは出ません

オリジナルのキャラが四人登場します

「黒い三連星がやられたらしいぞ」

「本當か？ いつたい何が・・・・・」

「例の木馬だ・・・・・連邦の白い奴にやられたらしい」

「オデッサはもう陥落したとか聞いたぞ・・・・・この基地にもいつ攻撃が来るかわからねえ・・・・・俺たちはどうすりゃいいんだ・・・・・」

「全くだ・・・・・補給で回ってきたのがあんな機体じゃあなあ・・・・・」

「確かに・・・・ただの試験機のポンコツじゃねえか、お偉いさんから見たらここの基地ビリでもいいんだろつよ」

「リチャード中尉、アッグガイの整備、終わりましたよ！」

「そ、うか、ちょっと遅かったんじゃねえのか？ あとで例の女の子、紹介してくれよー！」

俺の名はリチャード・フォード、この基地に今日配属されたジオンのスーパーイース部隊の隊長だ

そして俺の前にあるイカした機体が俺の愛機、アッグガイ

前に乗つてたアッガイがマシントラブルでお积迦になつちまつたから、取り寄せてもらった新型機だ

何がすごいって、そりゃあこの高性能なメインカメラ、四本あるヒ

一トロッドにバルカン砲・・・まさに格闘戦が得意な俺にピッタリだぜ！

新型機という表現は、正しくもあり、間違いもある。

この機体は地球連邦軍本部ジャブローを攻略するために開発されたアッグシリーズの一機である。

しかし、その計画自体が中止され、その際に残っていた試作機がこうして配備されているのだ。

こうした試作機まで投入しなければならないほど、ジオンは追い詰められていたのである。

余談だが、アッグシリーズは見た目と武装が奇妙であることが知られている。

アッグガイは、複眼のような大型メインカメラと四本のヒートロッド、ジュアッグはゾウの鼻のような排気ダクトと指のような三連装ロケット砲を装備。ゾゴックはブーメランのような装備ワイドカッター。アッグは大きなドリルを一つ装備している。まるで怪獣のような見た目であるが、マニアの中ではレプリカを所持する人物がいたりと人気がある機体・・・なのかも知れない

「いやあ・・・やつぱりスーパーエースにもなると専用機ももらえるんだな、ハツハツハ！」

「隊長！ こんなとこにいたんすか？ 通信の女の子たち、待ちくたび
れでますよ？ 早く行きましょうよ」

走ってきた3人組、俺の部隊のエースたちだ

「おお、ルイス。行くか、スーパーエースの俺たちは美人も待たせ
ないからな！ 今日は張り切つてこいぜーー！」

「ヤツホオオオオオオウ！」

彼らは知らない、自分達が『エース部隊』としては軍に認識されて
いないということを・・・

『敵大部隊接近！ 総員配置につけ！ 繰り返す・・・』

「マジかよ・・・ま、俺たちにかかれば楽勝だよな！ 行くぜえ
！！俺たちの『デート』の邪魔したツケを払つて貰おうぜえ！！」

「オオオオオオツ！！」

彼らにもまた、奇妙な運命が待つていてることを、このとき知る人は
いなかつた

「誰か来てくれ！ マゼラだけじゃくい止められねえ！」

「救護班、早・・・・・ウオオオオツ！」

「モビルスーツ！？連邦の白い奴！？たくさんいるぞー。」

「ドムはどうした！？最新鋭機ならなんとかなるだろー。」

「ダメですー！反応、全機ロストしますー！」

「へつへつへ・・・・最高だぜこりや！」

今まで俺たちはジオンの奴らに好き勝手やられていた。あれもこれもジオンのせいだ。アイツらがこなければ俺は恋人を失うことも、妹が怪我で植物状態になることもなかった。俺たちは、ジオンのザクにはなすすべがなかつた・・・・目の前のすべてを奪われて絶望していた・・・・・あいつらは悪魔のようだつた。それがどうだ！今、このジムが実戦投入されてからは！ジオンの奴ら俺たちを見ておびえてる！新型機だつてビームを何発か撃つてやつたらすぐに動かなくなつた。ざまあない・・・・・ざまあないゼ・・・・・！？

それがその連邦兵の最後の思考だつた。なぜなら次の瞬間にはコックピットはバルカンで粉みじんになつていたのだから。

RGM-79 GMは、かの有名なRX-78ガンダムを基に、設計・武装の簡易化が図られ量産化に成功した機体である。

その特長は、量産機でありながら初めてビーム兵器を標準装備として搭載したこと。（陸戦型ガンダム、陸戦型ジムと呼ばれる機種を

除く)

主兵装である、ビームスプレーガンは、ビームライフルより威力は落ちるものとのジオン公国軍の兵器に対してとても有効であった。ほかにも、簡易化の際に本体の装甲材質が何ランクか下げられており、耐久性はガンダムに劣るという点があげられるが、完全にデメリットではなく推力比の問題などで機動性など、一部の性能は基であるガンダムを超えている。（細かいところで言えば頭部バルカン砲の装弾数も上がっている。）

ただ、パイロットの腕の問題でその機動性が活かしきれていなかつたとも記録に残っている。

最終的には数多くのバリエーションや後継機が生まれ、連邦軍の戦力の中核を担つていく傑作機である。

「おらおら、エース様のお通りだあ！」

連邦の似非モビルスーツにバルカンを撃ちこんだら動かなくなつた、コックピットに直撃したようだ

「ルイス、キヤノン砲での虫どもを吹き飛ばしちまえ！」

「もう準備できてますよ隊長！喰らいやがれ！」

ジュアッグの砲撃で前方にいる61式戦車6両が吹き飛ぶ、全弾命中だ！

「へへっ、アイツら大したことないつすよ！動きがなつちやいねえ！」

そう言いながらゾックに乗る、ケビンがワイドカッターで似非モ

ビルスースを切り刻む

「俺の獲物、ちゃんと残していくんだよーおーおードリルは漢のロマンなんだよ！」

最後に残つた一機に攻撃したのはアッグに乗るジロウ、いつもは冷静なんだが・・・

機体性能自体はそれほど良好ともいえない4機なのだが、パイロットの腕でカバーされている。

機体のデザインが奇妙なこともあり、連邦軍はその姿を見て恐怖したといつ。

「す、い・・・連邦が後退していく・・・」

「ガウを準備しろ」

「え？ 司令、まだ彼らが・・・「基地に残っている者を集めろ。ガウを使って離脱、この基地を放棄する！」」

「彼らは駒のひとつにすぎんのだよ・・・」

「隊長！ガウガ！」

「あいつら・・・・・！俺たちを囮にしゃがつたな！」

「あの、ハゲ親父！やりやがつたな！」

「隊長！囮されました！」

「な！？・・・・・」

「隊長！！」

似非モビルスーツがビームを撃つてきた時、俺たちは光に包まれた

「モビルスーツが・・・・・消えた！？」

衛星軌道上

「中尉、そしてヨーツンヘイム、聞こえるか?」

「モビルスーツ・ヅダはもはや『ゴーストファイター』ではない。この重大な戦局で確かに戦っている……この独立戦争で厳然と存在しているのだよ。」

「この歴史の真実は……何人たりとも消せない……」

「これは……?」

……軌道上で幻影は光の中へと消えていった……

8・5話 幻影は光に消える（後書き）

アツグシリーズ登場です。

この機体たちは、作者がプラモデルを買いに行つた時に偶然見つけたことで、お気に入りになつた機体です。

本当は、ガンダム〇〇のティエレンというMSのプラモデルを買う予定だったのですが、アツグシリーズに魅せられて、その予算で店にあつた四種類をひとつずつ購入しました。

アツグファンの皆様、申し訳ありませんでした。

アツグですが・・・この話ではあまりスボットライトは当たませんでした、その機動性をI-Sの世界で活かして行く予定です。

オリジナルキャラ 設定（前書き）

オリジナルキャラの設定です

機体の説明は別にして投稿します

オリジナルキャラ 設定

名前：桐岡柚

性別：女

IS学園の一年生。クラスは3組。成績優秀であり、明るい性格もあり教師からの評判も良い

元々は男嫌いだが、イベントでソンネンに助けられたときに、好意を抱くようになる。

専用機は持っていないがISの操縦技術は高い。

趣味はお菓子作り

名前：ミハエル・ジェンキンス

性別：男

ヒルドルブの整備兵。ソンネンの親友の一人

日本文化を誤って解釈しており、いろいろ間違った知識を広める
シュヴァルツェ・ハーゼのクラリッサ大尉とは仲がよく、日本の漫
画やアニメについてよく会話している

気があるのかと思いきや、本人いわく、マヤマヤが一番！だそうだ

名前：リチャード・ハンクマン

性別：男

ジオン公国軍のパイロット、階級は中尉。愛機はアッグガイ。少し前はアッガイに乗っていたらしい。

お調子者であり、女癖も悪い・・・自称スーパーエース。本人いわく格闘戦が得意らしい。

名前：ルイス・カーター

性別：男

ジオン公国軍のパイロット、階級は少尉。搭乗機はジュアッグ。元はジオニックのテストパイロットをしていた。モビルスーツの技術に詳しい

お調子者だが、実は戦況を常に把握している。

名前：ケビン・レイサス

性別：男

ジオン公国軍のパイロット、階級は軍曹。搭乗機はゾゴック
隊の中では最年少である・・・が、実は精神年齢は一番高い（本人談）

説明するほど特徴がないのが特徴

名前：ジロウ・サトナカ

性別：漢（男ではない漢なんだ！と主張している）

ジオン公国軍のパイロット、階級は准尉

隊の中で唯一無口で、女性にも興味がなさそうである・・・が戦闘になると周りが引くほどにやかましくなる。

本人曰く、女性に興味がないのではなく、パソコンの中に嫁がいる為、もう足りているとのこと。

彼にはグフが支給される予定だったのだが、本人が断り、アッグを支給してもらつたらしい。

ドリルは漢のロマンなんだとか・・・・・

オリジナルキャラ 設定（後書き）

人物設定は難しいですね

なかなか魅力のあるキャラにならないです（汗）

9話 異世界の巨人達 前編（前書き）

臨海学校の話です

前後編に分けて投稿します

前編は戦闘はあまりせず、後編は戦闘シーンが主体になります

「隊長・・・うまくやつてますね。アドバイスした甲斐がありました！」

「おお！萌えるね～、あれなら男は誰でもイチゴロツすよー同志クラリッサ！」

「ソンネン少佐！アレなら織斑一夏でも一発でしょー！」

「あ、ああ・・・そうだな・・・」

双眼鏡の先には、かなりはりきつた水着のラウラ少佐がいる。織斑一夏にアプローチをかけるためだ。

水着というのは女性が、想いを寄せる男性にアプローチをかける手段のひとつである。

いわゆる勝負水着というのだ。水着の色だけでも印象はかなり変わる・・・らしい

俺たちは今、臨海学校の近くにいる。もちろんEIS学園に許可は取つた。この前の無人EISを警戒したことだ。

「あああ！？お、織斑一夏が！？」

「どうした！？無人EISか？」

見ると、織斑一夏が・・・前にショッピングモールで見た、セシリアという生徒にサンオイルを塗つっていた

『クラリッサ。こういう時はどうすればいいのだ？やはり・・・胸がないとダメなのだろうか・・・？』

「ラウラ少佐からの無線だ

「「ふむ・・・・・」」

俺とクラリッサは考え込む・・・・・どうするべきか・・・・・
「こういつ時」や、日本の伝統文化、萌えの力を使つべきでしょう
！」

突然ミハエルがそう言つた。

「あの年頃の日本男児に効果的なのは、メイド服、ネコミミ、姉、
妹キャラ！この中でもラウラ少佐は妹キャラとネコミミパンツタリ
！織斑一夏も一撃で轟沈します！」

『本当か！？』

「なるほど、流石は同志ミハエル・・・・・ネコミミ妹キャラとは・・

・・・・・・・・・・

最近こいつらの日本の知識は間違ってるんじゃないかと思つんだが・
・・・・・氣のせいいか？

ソンネン少佐は自分も間違つた知識を持つていて気に気がづいてい
ない。

人間、案外他人の変なところはすぐに分かっても、自分のことに気
づかないものなのだ。

「今からこの、ネコミミカチューシャを送ります！作戦は簡単、ネ
コミミを装備した後、織斑一夏に「ら、ラウラにも塗つて欲しいニ
ヤン・・・・一夏お兄ちゃん」と言つだけです！それだけで轟沈しま
す！」

ネコミミカチューシャをカバンから取り出し、ダンボールをかぶつ

てからラウラ少佐に渡しにこべハエル

「これで、OKですよ……あとほ、織斑一夏がどう出すか……」

戻ってきたミハエルがそう言つた。なにがOKなのかさっぱり分からん……

俺の勘だと……」の作戦……

「一夏！次はあたしも！」

「わかつた、わかつたよ鈴。次は鈴の番な」

なんなんだよみんな、サンオイルぐらい自分で塗ればいいのに……

・

鈍感な少年は、今日もその力をフルに發揮している。

「い、一夏……少し頼みが……あるのだが……」

「なんだラウラ？……え？」

なんだ？……俺の知ってるラウラはネコミミなんて生えてなかつたぞ？

「い、一夏……お兄ちゃん……ラウラにも……」

「「「「「「……」」」」」

「なにをしている？貴様ら」

「ふ、不潔ですわ！一夏さん！」

— 1 —

なんだらう、これは非常にまずい気がする・・・・・シャル・・・・無言でにらんでくるのメチャクチャ怖いからやめてほしい・・・・

「一夏……アンタ……あたしはあんた「」とキ「」んた「」とをしたのにラウラとも……」

「誤解だ鈴！？それとその危ない言い回しやめてくれ！周りからの視線が大変だから！」

「一夏は私の嫁だ！一夏は私のような妹が大好きなのだ！証拠もあ
る！」

冷たい・・・・・みんなからの視線が・・・・冷たい・・・・・

85

「あれ、ソンネンさん？ こんなところで何をやつてるんですか？」
イベントのときの少女、柚が話しかけてきた。

「今は任務中でな……前の無人ISのこともある。警戒はして
おいたほうがいいからな……」

「そうですか……あまりみんなの水着姿見ないでくださいよ？
じゃあ、任務、がんばってください！」

すぐに柚はビーチバレーをしている生徒たちのもとに行つた。任務
の邪魔をしないように気遣つてくれたのだろうか？ 水着は……
一応確認したが……

「なんでこんなところにソンネンさんが……勝負水着着てくれ
ばよかつた……」

一人の少女はそう思いながら、自分へのいらつきをボールにぶつけ
ていた……

2日目、ISを作った天才、篠ノ之束が織斑一夏に接触、篠ノ之束
に新型機を渡しに来たようだ

その後、アメリカの軍用ISが暴走、この近辺を通過するとの連絡
が入つた

ISの対処は軍がすることになつたのだが……

「そうですか、今回の作戦には我々、シユヴァルツェ・ハーゼが参加する予定なのですが……」

「ふむ……ラウラ少佐が出ると知つたら……あつとあいつらも……」

「ソンネン少佐！緊急連絡！IS学園の生徒が無断で出撃をしたとのことです！」

「なんだと……？」

「あれが福音か……でももう何かと戦っているみたいだぞ？」「ハイパー・センサーで攻撃先を見る。何かに向かつて攻撃をしているようだ……攻撃の先は……海？」

「あ、あれ？ センサーが……」

「どうした？ シャル？」

「なんかセンサーが不調みたいなんだけど……」

「ん？ 僕もだ……なんでだ？」

センサーがエラーを出している。不調かもしれないけど……他のみんなもそうみたいだし……なにかおかしい。福音も混乱しているようだ。

それがミノフスキーパーティーの影響であることは一夏たちは知らない

「とにかく、福音に攻撃を仕掛けよう！」

俺は白式を加速させる。

俺が攻撃範囲に入るためにシャルと篝、セシリ亞が援護する形をとつていい。

福音の動きが止まった。いける！

「うおおおおおおおおおッ！！」

零落白夜を発動させた俺は福音に斬りかかるうとする・・・がその時、福音が爆発した

これは明らかにセシリ亞たちの攻撃じゃない。驚いていると、上から何かが接近して来ていることに気づいた。

「みんな気をつけろ！福音以外にも何かがいる！速いぞ！」
ハイパー・センサーが上手く機能しないが、巨大なにかが近づいてきているのは分かる。かなりの速度だ

そいつは福音がいる場所に銃撃を浴びせる。マシンガンか？それにしては弾が大きすぎる

『まさか、人が空を飛んでいるとはな！私は幻覚を見ているのか？・
・・・君たち、ここは一体どこなのかね？』

現れたのは、青い色をした巨人だった・・・

9話 異世界の巨人達 前編（後書き）

技量不足がそのまま出てきてる感じが・・・
こんな調子で戦闘シーン・・・ちゃんと書けるのか？

小説はヒルドルブがメインなので、モビルスーツたちがこの世界に
どう影響するか・・・そろそろ、あの人があれ動き始めます

9話 異世界の巨人達 後編（前書き）

投稿が遅くなり、本当に申し訳ないです。

時間がかかったわりに、文才の無さで戦闘描写も上手く書けなかつたと思います。

本当に、申し訳ありませんでした

「デュバル少佐・・・デュバル少佐！」

アーネスト・ヘミングウェイ著「死の瞬間」

目の前のモニターには、部下であったフランスのEMSO4が映っている。

彼はもうこの世にない存在なのだ・・・・・・と云ふことは私も

「フランツ……私は……ジダが、確かに存在していたことを証明できた……もう悔いはない……」

「何を言っているのですか！ テュバル少佐！ 少佐は・・・ ジタはまだ戦えます！ まだ、ジダの性能を証明することができるんです！」

しかし、ツタに、……、緑葉が、一々黙れた、……、これが、

「ジダの性能を必要としている場所があるんです！・・・・もつ

フランスの乗るEMS04は、光の粒子となつて消えていった。そして、デュバル少佐の乗るヅダもまた、光の中へと急加速を始めた
「な、なんなのだ・・・・・これは・・・・・この光は・・・・・・」

光を抜けるとそこには、空が広がっていた。見たところ海上のよう
で、陸地は見当たらない。

「ここが……フランスの言つて、ヅダを必要とした場所なのだろ
うか？む！？武装がすべて揃つている上に、エンジンの出力も上が
つているようだな……フランス、感謝するぞ」

ヅダの装備は、手持ちの武器に120ミリマシンガンと、腰にマウ
ントされた240ミリバズーカ、予備のマガジンと
135ミリ対艦ライフル、ヒートホーク、シールドにマウントされ
たシートウルム・ファウストと、本来運用方法としては想定されて
いない重装備である。

それ以上に驚くべきところが、これほどの重量の装備を持ちながら
も、大気圏内で単機での飛行能力があるところだ。

もともとヅダは宇宙空間での高機動戦闘を想定した設計の機体であ
り、大気圏内での飛行能力などは持つていなかつた。

そもそもモビルスース単体での飛行は、一年戦争中ではグフフライ
トタイプなどの一部の特殊な機体しか実現しておらず、その全てが
試験的なものにとどまっている。

「まずはここがどこなのかを知る必要がある……ヅダよ、もう
一度その力を借りることになつたな……」

私は、再び共に戦うことになつた愛機の操縦桿を強く握り締めた。

「おーおー、ijiはどこだ？」

アシグガイのコックピットで田見めた俺は、機体が居る場所が海中である事に気づいた。

「隊長！目が覚めましたか？・・・どうやら我々は知らない場所に居るようです・・・」

「ルイス、無事だったか！他の奴らは？」

「現在、周辺の偵察に出ています！いつたいijiはどこなんでしょうか？」

「俺に聞くなよ。大体、陸に居たのに、海なんかで目が覚めること自体おかしいだろ！連邦の雑魚はどこにいたんだ！」

「隊長！偵察に出てみましたが、陸地は見つけたもののijiには我々の居たオーテッサ周辺とは違う場所のようです！見知らぬ建造物を撮影してきました。」

そう報告するケビンとジロウ、その写真の建物はオーテッサにあるものとは外観が全く違う。

「とりあえず俺たちは良く分からんとこに来ちましたみたいだが・・・
・・俺たちの実力があれば切り抜けられるだろ？まずは陸地に向かつて拠点の確保だ！その後、友軍と連絡を取るぞ！」

「隊長！海上に何か居る！？」

ジロウがそう言つたその時、上からとんでもない数の攻撃が降り注いだ

俺達はそれを全部回避する

「敵影、確認！鎧を着た人間見たいな奴が空飛んでる！」

「馬鹿ヤロウ！こんなときに冗談言つんじゃねえ！」

俺はそう言つた後、メインカメラで上を見る、すると空中にはジロウが言つたとおりのようないつも居る連邦の新型か？

「ルイス、あんなハエ撃ち落としちまえ！攻撃しろ！」

「よし、悪く思うなよ！発射！」

ジュアッグからロケット砲弾が発射される・・・しかし、それをあいつは簡単に撃ち落とした。

「なんて野郎だ！全員で一斉射撃をかけるぞ！」

突然水中から撃ち出されたバルカン砲に対処できなかつたのか、別方向からのジュアッグの砲弾が直撃した。

目立つた損傷もないようだが、突然アンノウンは動きを止めた。駆動系がイカれたのかもしぬ。

「やつたか！・・・・・・上空に友軍反応？ジロウ！確認で

きるか？」

「EMS10ジダ・・・・・最近発表された新型機だ！助かつたぞ！」

「そう言つたジロウ、その機体は基地の放送で見たことがある

「おお、ラッキーだな！すげえな・・・ジダだつけ？アレ空飛べんのか！？」

部隊でただ一人、ケビンだけ考えていた。いくら新型でも単機で飛行しているのはおかしいと・・・・・

「友軍の反応・・・私以外にもここに来ている人間が居たのか！友

軍機、聞こえるか！』

まさか他にも来ていたとは……反応からして試作型の水陸両用モビルスーツのようだ

『助かつたぜ！……つてそんな場合じゃねえ！アンノウンが攻撃を仕掛けってきた！気をつけろ！』

モニターを見ると、人間より少し大きい鎧のようなものが飛んでいた。

『目標確認！別方向より接近する機影あり！』

目標に向け、攻撃を仕掛けようとした時、友軍のアッグから別方向から新たにアンノウンが4機向かってきているとの通信があった。新たに現れた4機はアンノウンに攻撃を仕掛け始めた。こちらの存在には気がついていないようだ。

おそらく、最初からいたアンノウンとは別の勢力なのだろう。

もうひとつ、その四機は頭部と胴体が人間そのものであることが分かる。それも、10代後半ぐらいの少年少女だ。

うまく言えば協力してこの場を切り抜けることができるかもしだい。

「人間だと！？……新たに現れた4機は、アンノウンとは別の勢力のようだな……これから接触を試みる！水中の部隊は万が一の場合に援護を！」

『分かつたぜ！しくじるなよ！新型機』

シールドにマウントされているシートウルムファウストを発射し、120ミリマシンガンで追撃をかける

うまく動けないのか、アンノウンは動きを止めた……反撃をしてくる様子もないようだ。

私は驚いた様子の少女たちの前に降下する。

「まさか、人が空を飛んでいるとはなー私は幻覚を見ているのか?・
・・・・君たち、ここは一体どこなのかね?」

接触を試みながらも、警戒は忘れない。相手が少年少女でも兵器を持つているのだから油断はできない。

田の前の少女たちは、なにかを相談し始めた。協力できればいいのだが・・・

(なんなんだよ、ここのでかいロボットはー?)

一夏の田の前には、昔前のアニメに出てきたやつを見た田のロボットが居る。

驚くのがその大きさと推力だ。

20メートルはあるうかという大きさのロボットが作られていると
いう話は聞いたことがない。

小型高性能のロボットが主流の今はそんな大型兵器は作る必要がないからだ。

ISの前ではそのような大型兵器は最近現れた一部の例外を除いてマトになってしまつ。

そして、田の前にいるロボットは田体からは想像できないほどの推力を持つている。

20メートルもあるロボットが空を飛び、自由に空中戦をこなすといつのは一夏たちから見れば異常である。

目の前のロボットは人が操縦しているようで、敵意があるようにも見えない。

「敵意は、ないみたいだな。俺、ちょっと話ををしてみる」

「一夏！それ本気！？あんな威力の攻撃を受けたら……」

「大丈夫だ！シャル、俺を信じろ！必ず鈴のもとに戻るつて約束したからな！」

「一夏……」

「あの、ロボットさん！あなたは、俺たちの味方ですか？」

『おお……言葉が通じる相手だつたか！我々には敵対の意思はない。……また動き出したか！』

動きを止めていた福音が再び動き始めた。その場に居た全員が、福音からの攻撃をあわてて回避する。

「問題はない！あの4機には我々と敵対する意思はない！ターゲットはあのアンノウン一機だ」

『了解！よし、あの一機に集中攻撃だ！』

まずは水中の部隊による射撃でアンノウンに回避行動を強制させた。アッグガイのバルカンとジュアッグのロケット砲の弾幕をすり抜けるように動くアンノウン。

アンノウンはかなり大げさな回避行動をとるが、圧倒的な機動力を持つており、攻撃が当たるような隙がない。

「うむ、先ほどよりもアンノウンの動きが良くなっている…だが、このヅダの速さについてこられるかな？」

『なにをするんですか！？そんなロボットじゃI-Sの機動性には…』マシンガンで攻撃をかけている少女がそう叫んでいる…たしかにアンノウンの火力、機動性、装甲…すべてにおいてヅダを上回っている。しかし！

「貴様の動きは読めた！」

マシンガンの空になつたドラム式マガジンをアンノウンに投げつける。

するとアンノウンは向かってくるマガジンを回避するために右に大きくロールした。

マガジンに240ミリのバズーカを発射し、煙でアンノウンの視界を奪つた。

センサーには飛んでくるマガジンが映っている。

素早く軌道を割り出し、回避行動に移る。

次の瞬間、マガジンが粉々になり、煙と破片で視界がさえぎられた。そして、高威力の射撃を受け、エネルギーが大きく削られた。

135ミリ対艦ライフルを受けたアンノウンは動きを止めている
「うむ、対艦ライフルの威力は絶大だな。『ああっ！福音が！？』
なんだと・・・・・」

見ると、アンノウンの外見が変わっている。

『一夏さん！下がつて！・・・・・あああっ！？』
『セシリア！』

4機のうちの一機がアンノウンから発射された羽に当たり、落下していった。

先ほどの攻撃とは速さと威力がケタ違いだ。

もう一機がそれを受け止めようと加速をかけているが、それをアンノウンが狙っていることに気がつかない。

『攻撃が、間に合わん！』

私が今から攻撃しても間に合わないだろう。しかし、ほんの少しの可能性にかけて、対艦ライフルをアンノウンに向けて発射した。落下していく機体を受け止めたところにアンノウンの攻撃が迫る。としたとき、突然アンノウンが爆発した。

人が操縦していたようで、爆発の中から女性が放り出されていた。それを、べつの2機の 空飛ぶ少女 が受け止める。

『これは・・・奇跡・・・・というべきだらうか・・・・？』

目の前の現象、そして・・・近くの陸地からの友軍反応・・・ YM

TO5と表示されている光景に、私は奇跡と言つものを感じたくなつた。

「おいおい、これは冗談か？・・・まつたく・・・厄介なことになりそうだな。」

福音に狙撃をしたヒルドルブのモニターに映し出されているのは、この世界に存在するはずのないジオンのモビルスース。先ほど福音を狙撃する時に突然現れたが・・・まさか、アイツも俺と同じように・・・とにかく、厄介なことになるのは確定だつたな・・・これからも忙しい毎日が続くか

そう思いながら俺はため息をついた。

今回は、戦闘描写も上手く書けず、投稿も遅くなり本当に申し訳ありませんでした

今回、登場したゾダとアッグシリーズは、ISと戦闘できるぐらいに性能をいじっています。ヒルドルブのように、一撃必殺の火力を持つているわけでもなく、戦わせる上でゾダは特にISと同じ士気。・・空中戦をさせる必要があつたので・・・それよりもミノフスキー粒子が反則過ぎるのですが・・・

これからモビルスーツとモビルタンク、ISがどう絡んでいくか・・・

さて、後書きで書くよくなつてきただの失敗談（？）

- ・ 今回は2日前にあつた文化祭・・・そこで体験した怖い話です・・・
- ・ 私のクラスは、文化祭で喫茶店をやっていました。
- メイド喫茶とかそういうものではなく、何人かグループを作つて出し物をして、それをお客様がジュースを飲んだり、おしゃべりしたり、P Pでゲームをしたり（笑）しながら見るというものでした。

私のグループは、順番にアニメキャラのモノマネをするところとになつていました。

グラム・エーカー や 海馬瀬 のモノマネが好評の中、ついに私の番になりました

この日まで練習に練習を重ね、親友には本物と見分けが付かないとまで言われたこのモノマネ……これなら……勝てる！

そう思いながら私は必殺のモノマネをしました。

「てめえなんぞーーー発あれば十分だああ！」 191002話のフェ
デリコ・ツアリアーノさんのモノマネ

ウケたな・・・・・「これで勝てる……そう思っていた時期が私
にもありました

しかし現実は甘くはなかつた・・・観客はシラけ「なんのモノマネ
？」 「気合入れすぎでしょwww」 「なんか怖い」と心に突き刺さ
る言葉の数々・・・・・

みなさんもモノマネには気をつけましょーーーあの突き刺さる言
葉のダメージときたら洒落にならないほどのです。連邦軍が首
と足があるモビルスーツを開発したこと以上の衝撃を受けること間
違ひなしです。

こんなダメな作者ですが、次回の投稿が遅くならないよう、精一杯
努力していきますので、これからもよろしくお願ひします。

10話 疑問（前書き）

お待たせしました。
遅くなり、申し訳ないです。

今回はかなり核心に迫りそうで迫つていらない（汗）なんだか最後の部分も微妙な仕上がりになってしましました。

今回は戦闘は無しですが、あと4話のうちに急展開と因縁のアイツが出てきます。
文も下手で更新も遅いダメな作者ですが、これからもどうぞよろしくお願いします。

突然福音との戦闘に介入してきたモビルスーツ。

そのモビルスーツのパイロットはテントで事情聴取を受けている。

目の前にいるパイロットは5名、青いモビルスーツ【EMS10ヅダ】のパイロット1名と、まるで怪獣のような外見のモビルスーツのパイロット4名。

あの戦闘の後、シュヴァルツェ・ハーゼの隊員たちの指示に従つてもらい、事情を説明してもらおうということになった。

素直に指示に従つてもらひことができ、トラブルを回避できたのは幸いだった。

上層部に、彼らも俺と同じ【訳あり】であると報告したところ、外部に情報が漏れないようにと配慮してくれとの事であった。

今回の事情聴取はもともと彼らと同じ世界の人間である俺が行つている。

元ジオン軍人の俺なら、彼らとコミュニケーションもとりやすいだろう。

外部へ情報が漏れることのないように、このテントにはモビルスーツのパイロット達と俺、そして俺の境遇を知っているミハエルしかない。

「ISの関係者に知られるといろいろとまずいのだ。

未知の兵器の出現だけでも混乱しているといつのこと、それが異世界のものだと判明したらどうなるか・・・・・・

なお、普段は内緒にしているが、目の前のパイロット達には俺がこの世界の人間ではないと伝えてある。

ジオンの階級章を見せると信じてもらえたようで、情報を交換するのも簡単だった。

「しかし、驚いたものですな・・・まさか、ソンネン少佐も同じ境遇だったとは。この世界はISという兵器によって女尊男卑の風潮が出来上がっていることに世界の違いを感じさせられる。」

俺とヒルドルブが消えたあの日・・・・コムサイの戦闘記録にその瞬間が記録されていたらしく、その記録を見たとあるお調子者の中尉が話を広めたらしい。

それを603で偶然聞いたのが、蒼いモビルスーツ・・・・ヅダのパイロットである、ジャン・リュック・デュバル少佐

どうやら、デュバル少佐はSFのようなその出来事に興味を持ったらしく、情報を集めていたとの事。

「俺も最初は信じることができなかつた・・・・だが、あんな兵器（IS）を見たら信じないわけにはいかんだろう?」

「あの兵器を見たときは驚きを隠せなかつた。あの大きさでの火力と装甲、機動性を実現するとは・・・・この世界の技術は相当進んでいる。しかし・・・あのよつな子どもが戦闘を行うとは・・・・

「デュバル少佐は少年少女まで戦闘を行つていたことに胸を痛めているようだ。

一年戦争にも少年兵は存在した。地球連邦軍はルウム戦役などで正規の軍人のほとんどが戦死してしまったため、戦力不足を補うために、各地で10代半ばの少年少女が戦場へとかりだされていたのだ。ISはあくまでスポーツ。

少年兵とは違うと主張されているのだが・・・・・・・
確かにISはスポーツ感覚でやるものなのかもしれないが・・・・・
俺もあいつらが戦闘を行うことが良いことだとは微塵も思っていい。ISも兵器だ・・・・・いつ何があつてもおかしくはないんだからな・・・・・

「そうだな・・・・・スポーツ感覚で兵器を扱つてれば、いずれあいつらも・・・・・それより、デュバル少佐も俺と同じように光に包まれてこっちに来たと聞いたが・・・・・」

「ああ、戦闘中に光に包まれて、気づいたら海上にいた。状況はリチャード中尉たちも同じようだが・・・・・私が調べていた限りだと、あの戦闘記録を見て、光に包まるる前にヒルドルブがプラスマのようなものに覆われていたことがわかつたのだ。これは、我々が引き起こした問題かもしれないのだよ。」

「・・・・・どういうことだ？」

「なにか強力な磁場が発生して、我々を機体ごと空間の歪みに巻き込んだのではないかというのが私の見解だ。その磁場を発生させる原因として調べていたものがあつたのだが・・・・・それが、我々の世界に存在するミノフスキーパーティクルだ。あの粒子の効果は未だに解明されていない部分がある。レーダーを無効化する以外にも、ミノフスキーパーティクルで物体を浮かせることも可能・・・・・ならば、空間を歪ませるほどの強大な力を発生させていてもおかしくないだろ」と私は考えた。

「ほう・・・・・」

これは説得力のある説かもしれない。

ミノフスキーパーティーは確かに強大なエネルギーを生み出す。

それを応用したミノフスキーフラフトが、ジオン公国軍が開発した

【アプサラス】にも搭載されている。

普通なら浮くはずのない巨大な機体を浮かせるほど力を持つているのだ。空間を歪ませてもおかしくはないのだ。

しかし・・・・・

「なら、どうして俺たちの機体は新品同様のピッカピカ。おまけに性能が底上げされてんだ? ちょっとおかしくないか?」

今までミハエルとメイドの話をしていたリチャード中尉がそう発言する。

確かにおかしい。ヒルドルブも新品同様になつていたし、ヅダは性能が別物なのだ。

空間の歪みが原因なら、そんなことはないはずだ。

「ますます分からなくなつたな・・・・・」

俺はため息をつきながら、リチャード中尉の部下であるジロウ准尉の私物のマンガを手に取る。

向こうの世界・・・俺がもといた世界のマンガだ。俺はあまりそういうものを向こうであまり読んだことがなかつた。そういう意

味で興味があつたのだが・・・・・

『萌えもえ魔法少女』黙示録』

よくもまあ戦争中にこんな本を・・・案外ジオンは資源が有り余つてたんじゃないのか?

ストーリーは、普通の女子大生の父親、ボビー。彼は転生者で、もといた世界では軍人だつた。彼が、自分の娘が魔法少女だつたり、妻が悪の組織の親玉だつたりするのに気づきながら普通のサラリーマンとして暮らすほのぼのアクションストーリー・・・・・らしい。

「ジロウ准尉・・・このマンガは・・・・・

あまり面白くない・・・・・俺はそう言おつとした。

「これだ!!」

「 「 「 「 「 なにが！？」 「 」 」 」

いきなり大声をあげたミハエルに全員が反応する。

「 いきなり大声をあげるとは・・・いつたい何があつたのだろうか？
「 なにがって・・・・・ 転生ですよ、転生！このボビーさんみたいに
ソンネン少佐たちは転生してきたんじゃないんですか？転生ならチ
ー・トスペックにも説明がつきますよ！」

「 確かに・・・・・ チートオリ主・・・・・俺の夢・・・・・
意味の分からないことを言うミハエル・・・・・ジロウ准尉、お前は
その説を信じるのか！？」

「 オリ主と転生者は今はデフォルト・・・・・この前同志がリ カ
ルな世界に転生したつて書き込んでた・・・・・

「 それは冗談だよな！？」

ツツコむケビン軍曹・・・・・ 確かに・・・ 本当に「冗談だよな？

「 む？待てよ・・・・・ 我が同志ジロウよ。」

「 なんだ？・・・ 戦友ミハエル・・・・・」

いつのまに仲良くなつた？といいたいところなのだが・・・・・ミ
ハエルがなにか気づいたらしい。

「 リ カルな はは向こうの世界にもあるのかい？」

「 ある・・・・・！？・・・・・ そういうことか・・・・・」

よく分からんが、驚くジロウ准尉・・・・・ そうか！

「 向こうの世界とこちらの世界に、同じ作品が存在しているという
ことか！」

俺は思わず大声をあげてしまった。デュバル少佐やリチャード中尉
も気づいたようだ。

「 これは大きな発見だな。もしかしたら他にもあるかもしません
ぞ。」

「 よし！他にもなにか共通点がないか探そぞぜ！」

その後、インターネットなどを参照して全員で共通点を探した結果・
・・・

・アニメやマンガ、小説が同じものがある（ただし女性キャラが主人公になっている物のみ）

・歴史上の人物（戦国武将など）

・歴史上の事件や出来事

など、共通点がかなりあった。

その結果、あるひとつの一結論に至った。

「パラレルワールドという奴か・・・・本当に存在するんだな。ソンネン少佐、これは大発見ですよ・・・・でも、みんなに知られるわけにはいきませんね。ママヤや同志クラリッサにも、本当のことを知らせることはできない。」

普段女性には絶対に？をつかないと張るミハエルも、今回ばかりは隠し通してくれるようだ。

いつもとは違い、真剣な表情をしている。

「ミハエル殿。我々をドイツ軍の所属にすることは可能なのかね？」

「え？」

デュバル少佐の突然の発言に驚くミハエル。少し考え込んでから、なにやら上層部へと書類を送っていた。

「我々には行く宛てもない。そちらとしてもモビルスーツをほうつておくわけにもいかないだろう。そこで、我々がドイツ軍に入れば、モビルスーツはドイツ軍の新型として発表でき、技術が手に入る。我々は衣食住の確保ができる。いい取引だと思わないかね？」

俺とミハエルは互いにうなづき合つた。答えはもう決まっている。

「ようこそドイツ軍へ。あなた方を歓迎します。」

ミハエルがデュバル少佐へそう返答する。

「ありがとう。感謝する。」

デュバル少佐とミハエルが固く握手を交わす。

「記念にパーティーでもやるつぜーこれからは仲間だし！」

ルイス少尉がそう提案する。

「ああ、そうすると「少し、話を聞かせてもらおうか？」織斑・・・

・千冬？」

突然テントの入り口から入つて来た織斑千冬。警備の兵が倒れいるところを見ると、何があつたのかは容易に想像ができる。

「申し訳ありません。ソンネン少佐」

織斑千冬に続いてテントへと入つてきたクラリッサ大尉。

まさか・・・ISの機能を使って遠くから盗聴していたのか！

「どうして・・・どうして黙つていたんです！ソンネン少佐までいなくなつたら・・・私は・・・」

いつもなら百戦錬磨の戦士を思わせる織斑千冬・・・いつもの威圧感はなく、その力強い瞳には涙が浮かんでいた。

クラリッサ大尉が俺に小さな声で【ある事】を伝えた。そうか・・・

・織斑千冬は・・・

俺がこれからするべきことは・・・いつたい何なのだろうか？

1-0話 疑問（後書き）

最後、千尋さんがとんでもないキャラ崩壊をしてしまいました。
千尋さんと一夏の過去がこれから展開に関係していきます。

この小説の展開はどうなっていくのか…

とこの感じで次回予告・・・できればいいなと想っています。

1-1話 変化（前書き）

本当に申し訳あつませんでした！

早く投稿すると書いておきながら相変わらずの遅い投稿です。

遅い投稿のわりに文章も下手ですし・・・・

こんなダメ作者の書く駄文なのですが、次話へのアンケートをあと
がきに書いておきます。

読者の皆様の感想や「」意見・「」感想等ありましたらお願いします。

「どうして……どうして黙っていたんです！ソンネン少佐までいなくなつたら……私は……」

織斑千冬と一夏は両親に捨てられ、家族がいなかつたことは、以前一夏から聞いた。

クラリッサ大尉が言つには、おそらく織斑千冬は皆が思つてゐるほど強い人間ではないということ。

世界最強といわれる織斑千冬……普段は強い人間を演じてゐる。両親がいない状況で一夏の面倒を見ていた彼女は、幼い一夏に心配をかけないように強く振る舞つていた。

しかし、本当はどうか？

本当は家族にもつと甘えたかったのではなかつたのだろうか？自分を受け止める存在を求めていたのではないだろうか？

周りの人間が離れてゆく悲しみ……頼る人間もいない状況を見て、ただ自堕落に過ごして弱さを誤魔化した俺……俺が今できることは……

「ソンネン……少佐？」

そつと織斑千冬を抱きしめる。

「俺はお前をおいてどこかにいつたりはしない。それと……もう、仮面を被らなくていい。一人で抱え込まずに、他人を頼つても……いいんだぞ？」

織斑千冬は少女のように泣きはじめた……誰にも見せたこと

のなかつた素顔。

俺はそれをただ優しく抱きしめていた。

ここまでが昨日の事である。今は臨海学校3日目……デュバル少佐達や福音の件もあり、臨海学校は中止になるかと思つたのだが……あの織斑千冬がなぜか責任者に頼みこみ（齧しの間違いでは？）3日目も臨海学校は続けられることとなつた。

あの後、デュバル少佐たちはドイツ軍本部へと向かつた。俺のこともあるし、彼らなら心配ないだろう。

ILS学園の生徒達は喜んでいたりとしていたようだが……俺はとこうと……

「いやー、ソンネン少佐。見直しましたよ！ まさか『お前をあいていつたりはしない……』なんて愛の告白をするなんて！」

昨日の発言をいつものコンビ（ミハエル＆クラリッサ大尉）にからかわれていた。

「ミハエル……だから、それはだな……」

昨日、織斑千冬に言つた言葉……思い返すと、とんでもないことを言つていたことが分かる。

本当に告白のようなことを言つてしまつたのだからどうもなさい。

そのことがネタにされて今もミハエルにからかわれているのだ。

「男らしい告白だと思いましたよ。今時珍しい……私もそんな告白をされたいのです。」

クラリッサ大尉がため息をつきながらそつと口づく。

確かにそうだ。IJの世界では男性が少し消極的なところがある。

女尊男卑とは言つが、本当のところは女性はやはり頼りがいのある男性を求めているのだ。（ミハエル談）

「確かに告白のようなことを言つてしまつたのは認める。言い訳してもどうしようもねえからな。だが・・・・・」

「おお、ソンネン少佐！ 噂のお姫様ですよ！」

あの行動の本当の意味を説明しようとしたところ、ミハエルが大声を出した。何事だ？

見ると、ビーチから黒ビキニを着たスタイルの良い女性が笑顔でこちらに手を振つている。

・・・・・見なかつたことにしようではないか。日頃の疲れが

出でているのだろう。アレは幻覚だ。

ビーチにいる一夏たちも田をそらしている。アレは幻覚だ。こちらに猛スピードでその女性が接近してきている。ミハエルたちはもう退避していた。現実を見た。

「どうして無視したの？」

コレは幻聴だ。そうだ、あの織斑千冬がこんなしゃべり方をするはず・・・・・いや、現実のようだ。

目の前の女性の強力なオーラは織斑千冬のものだ。一步間違えたらあの世行きだろ？

どうすれば、この状況を打破できるか・・・・・草むらから見えるあれはカンペか！？

ミハエルか・・・・・あいつには今度礼を言わんとな・・・

「ああ・・・いや、そうだ！ お前が可愛いから、照れちまつたんだ。・・・・・（汗）」

言い終わつてから気づいた。最初から助かる選択肢なんてなかつた。

ミハエル・・・・・・帰つたら覚えてろよ！

「ホントにー?うれしい!」
織玲千冬は震えながらこちらを睨んでいる。そして。。。

いきなり抱きつかれた。当たっている・・・何がとは言わんが。
そこへ變かう心地よい香りがする。

草むらを見ると、ミハエルが親指をグッと立てていた。これは、助かつたのか？

人間の心理とは難しいものだ。しかし、案外単純な部分もある。一見ふざけているような人間でも、本当は相手の心理を見抜いた上で行動なのかも知れない。

しかし、空氣を讀んでいるふざけた人間もいれば、讀んでいないふざけた人間もいる。

抱きつかれてから5分後ほどして、少し離れたところに二エンジン型（？）ロケットが着陸してきた。

その中から出てきたのはウサミミをつけ、ヘンな服を着た人間。ISの開発者・・・この世界を変えた天才、篠ノ之束・・・まさか、ヒルドルブのデータを盗みに来たか？

織斑千冬を離し、ホルスターから拳銃を抜いた。

「ち～ちや～ん！助けに來たよ！そんな汚いオッサンなんか・・・

「貴様、マニエリニ言つニ
痛い！イタイイタイツ！」

天才が世界最強にアイアンクラウド

も取り出していた。

俺が出る幕はなかつたようだが・・・汚いオツサンと言われたの

今現在俺は34歳なのだが、30代はやはりオッサンに入るのだろう

うか。

しかし恐ろしい・・・先ほどのしゃべり方は幻聴かと思えるほど
の豹変ぶりだ。

「織斑千冬・・・それ以上はだな・・・」

さすがに危ないので止めようと思つ。

天才は泡を吹きはじめている。//シミシと音を立てているのだが、
大丈夫だらうか？

「千冬と呼んで。」

幻聴じやなかつた。

「ちーちゃん・・・そのオッサンに何か悪いことでも・・・あ

れー！」

星になつた天才。地平の彼方へと飛んでいった。

あいつは一体何をしに来たんだろうか？

軍人としての勘が、なにかを伝えている。

突如暴走した福音・・・従来のISを凌駕する篠ノ之瀬への新
型機・・・そして、モビルスーツの出現。

これは一体何を意味するのだろうか？ゆづくり考えたいといふの
だが、今は目の前の恐怖から撤退するチャンスだ。この機を逃すわ
けにはいかん。

「ねえ？どこに行くの？」

チャンスなどなかつた。

無理やり海のほうへと連れて行かれながら思つことがあつた。
ほんの数ヶ月・・・この世界に来て、俺は変わつたな・・・と。

「ソソンネンさん、大変そつだなあ。」

「あの千冬さんがあんなになっちゃうなんて……ねえ。恋の力は絶大ね。」

視線の先には、海で楽しそうにボールで遊んでいる千冬姉とソンネンさんがいる。

ソンネンさんもなんだかんだうれしいんじゃないのか？

「まあ、ソンネンさんなら安心できるな。……なあ、鈴。」

「ううね。あんまり話したことないけど……良い人だよね。」

鈴も、ソンネンさんは何度も会う機会があり、いろいろアドバイスを受けたようだ。

おかげで鈴もずいぶんと可愛らしくなった。もともと可愛らしかったが。

そんなことを考えていると、横から話しかけられた。

「織斑君。ちょっとといい？」

「え、と、桐岡さん……だっけ？」

長い黒髪の美人、桐岡さんだ。以前少し話したことがある。ISのイベントの時にはアクロバット飛行にも出ていて、ISの操縦技術は高いと評判だ。

「うう。あの状況について、ちょっと聞きたいことがあるんだけど……」

そういえば、桐岡さんはソンネンさんに片思いをしていたんだつな。

イベントのときに助けられて一目ぼれしたらしく。

「……けど……俺じゃあの状況をどうにかしたりはできないぞ？」

何か言おつものなら千冬姉に何をされるか分からぬ。

「そうだよね……やっぱり、私なんかじゃ……ダメだつたんだよね。千冬さんは美人だし……それに、私なんてまだ子供だし。」

「そんなことは……」

「何馬鹿なこと言つてんのよ！ あんた、ソンネンさんのこと好きな

んでしょう？だつたら千冬さんと真正面から戦つてきなさいよーなに
もしていなにダメだとか言わないでよねー。」

「鈴・・・・・」

桐岡さんは何かを決心したような顔をした後、千冬姉のほうへと向
かつていつた。

「なあ、鈴。」

「ん？」

「いろいろあつたけど・・・臨海学校、楽しかつたな！」

「うん！」

「今度の休みに弾の家にでも行こうぜ。俺たちが付き合つ始めたこ
とも報告しなきゃならないし。」

ソンネンさんも誘おうかな。弾も会いたいって言つてたし・・・

「桐岡、貴様は私に勝てると思つてているのか？」

「正直織斑先生に勝てるとは思つていません。ですが、この戦い・
・逃げるわけにはいきません！」

目の前で繰り広げられる争い。

恋する乙女というものは怖い。田の前の一人は、すさまじいオーラ
を出している。

「そして、今回の勝負はコレです！」

「なんだと・・・！？ソレは、じ、人生ゲームではないか！

そんなものでなにをしようといつんだ？

「貴様は、何を考えているんだ？」

「勝負は簡単です。人生ゲームで、より良い人生をおくれたほうが

勝ち。ソンネンさんとの「これからを考えて、やはり人生設計がうまくできる人のほうがふさわしいと思うので・・・」

「なるほど。・・・いい条件だ。」

はあ・・・・・・「これからも苦労は絶えないだらうな・・・」

「私が、ドイツ軍特別試験隊に?」

ドイツ軍本部に来た我々は、すぐに配属先が決まった。リチャード中尉たちはドイツ軍の特殊部隊として編成された。そして、私はソンネン少佐と同じ部隊に配属されるため、これから日本へ向かう。

「フランス・・・ジダの本領をこの世界に見せるときが来たぞ・・・」

・

「あひやー、まいっただなあ・・・ちーちやんがあんなになつちやうなんて・・・」

薄暗い研究室、モニターには何かの計算式のようなものと、映像が

流れている。

「それにしても危ないよねえ。束さんでも解析できない粒子がありて、それがI.Sの機能と共に鳴ってるなんて・・・・・・・・」
画面に現れる異形のI.Sの姿。以前I.S学園のイベントに介入した機体によく似ている。

「邪魔なイレギュラーには消えてもらわないとね。…………計画とは違うけど、このままだと危ないし……」

『研究所付近に侵入者発見！これより交戦に・・・サササササササ』突如研究所付近を警備させてている高性能無人ＩＳからの通信が入った。そして、すぐにそれはノイズに変わる。

最後に送られた映像データを常人にはできないほどのスピードで解析する。

すると、そこには緑色をした巨人が巨大な斧を振りかぶっている映像が映っていた。

11話 変化（後書き）

最後に、ゾダとヒルドルブ・・・そのどちらともに関係のある機体が登場しました。

千冬さんファンには本当に申し訳ないです。適度に動かしていったり、キャラを目立たせないと空氣になつてしまつと思つたので・・・

・

あれ？白騎士とかそこいら辺にいるの？雪羅どここつた？白い服着た少女は？

もつとひどいのは、鈴以外のヒロインはどこへ？？？

作者から見てもシッコリ決つかないような状況になつてしまいました。

雪羅と鈴以外のヒロインについては、これから展開は決めてあるのですが、あの厳しかった千冬さんをどうやって復活させるか・・・

・

ソンネン少佐の歳は公式設定です。デュバル少佐は35歳との事。

さて、ここでアンケートです。

最後に登場した某縁のモビルスーツ、そのパイロットについてです。それぞれ、陣営が違うのでソンネン少佐のライバルになるか、それとも戦友になるか・・・

1、フェデリコ・シアリアーノ少佐（MSIGLOO2話の連邦軍

パイロット（原作では敵役、この人を選ぶとやはり敵役になるかと思ひます。

2、オリジナルの名もなき兵士（一年戦争で確かに存在していたと思ひ兵士）

この人を選ぶ時の要注意点、希望があれば陣営（ジオン公国〇一地球連邦軍）とパイロットのタイプ（熟練とか新兵とか）も記入してもらえると助かります。

3、バーナード・ワイスマン（ポケットの中の戦争に登場）
史上初（？）の、ザクが主人公ポジションの作品に登場した人物。
うそが下手であり、やさしい性格。

ゲームでは、ステータスが青い巨星並みになつたり、爆弾を投げまくつて最近の羽が生えたりしてガンドムを爆殺してたりする。
そのせいであと一機でエース（自称）も笑えない冗談になつた。
この人物を選ぶと、原作の欄にポケットの中の戦争が増えます。
基本的にソンネン少佐の味方になつてくれると思いますが、作者は
バーニィにはもう戦つて欲しくないと思つていたり・・・

と、このような感じです。

正直、自分でも書いてて大丈夫か？と思つていますが・・・。
3の人物は思い入れのあるキャラですが、某ゲームでトラウマになりました。

更新も遅く、駄文ですがこれからもよろしくお願ひいたします。

12話 ザク、大地に墜ちる（前書き）

アンケート結果で、圧倒的な票の数をだつた彼の登場です！

アンケートを答えてくださつた皆様、本当にありがとうございます。話の展開まで考えてくれた方もいて、今回の話は感想ページの「」要望などを参考に使わせていただきました。

作者の技量不足で、良さとキャラを出し切れていないかもしません。

ファンの方には申し訳ないです。

これからも技量を磨く努力をしていきますので、どうぞよろしくお願いします。

「」要望・「」意見、感想等ありましたらどうぞ送つてください！

12話 ザク、大地に墜ちる

サイド6・・・」で今、連邦軍の新型モビルスーツを巡る小さな戦いに終止符が打たれていた。

「バーニィ・・・・ああつ！？」

一人の少年が見た光景は、ガンダムの頭部を切り落としながらも、自身のコックピットにビームサーベルを刺されていたザクの姿。少年と楽しい日々を過ごした青年が、そのザクに乗っていた。

墜落したザクを見に行つたとき、コックピットから出てきた金髪の青年。

拳銃を向けられたけど、そのあとに近くで拳銃を見せてもらつた。本物の階級章もくれたし、いっしょにサイクロプス隊の一員としてガンダムの情報収集もやつた。

いろんなところから集めたパーツで修理したザク。

少年にとって、そのザクは特別なものに見えていた。

しかし、そのザクと青年はもう見ることができない。一緒に話したり、コックピットの中を見てわくわくしたりすることもできない。戦争に憧れを抱いていた少年は、身近にいた青年の死を見て、戦いの悲惨さを知つた。

結局、命を懸けて戦つた男たちの行動は無駄にしかならなかつた。そんな光景を目の当たりにして、少年は声も出なかつた。ただ、目の前の光景に呆然とするしかなかつたのだ。

突然、コックピットを刺されたザクが光に包まれ始めた。

次の瞬間、少年の目の前にいたはずの緑の巨人は、その姿を跡形もなく消していた。

連邦軍の調査でも原因は分からずじまい、この事実は歴史の闇に葬られた。

後に、少年はこの出来事をポケットの中の戦争といつ著書の中に書き記している。

突然、激しい衝撃が体を襲った。どうやら氣絶していたようだ。目を開けてみると、ザクのコックピット内にいることが分かる。

「いて・・・・・ガ、ガンダムは！？核はどうなったんだ！？」サイド6でガンダムと戦つて、コックピットにビームサーベルが向かってきていたことを鮮明に覚えている。

だが、目の前の光景は戦っていたコロニーの中ではないようだ。近くにモビルスーツがいる気配もないし、建物も見当たらぬ。しかも、妙なことにザクはアルと修理したときと同じ。ガトリング砲による損傷はないが、武装はヒートホーク一本・・・・その他も新品同様とはいえない。

こんな状況で連邦のジム一個小隊にでも出くわしたらひとたまりもない。

とにかく、機体を隠したうえで現状の確認をするために、周囲の確認をしようと思う。

「少し、偵察してみるか。……はあ、何で俺こんなことになつてるんだよ……」

なぜ、こんな意味の分からぬことになつていいんだろうかと考えながらも、敵がないか慎重に周りを見ていく。

驚くほどに何もない。森林のような場所なのだが、あのサイド6の斜面とは違つて人の手が入つていない。

暗くて、草木がうつそうと生い茂つているため、何かが出てきそうな不気味さがある。

「アル・・・クリス・・・・元気にしてるかな？」

モニターに映る草木を見ながら頭に浮かんだのは、赤毛の女性と人の小さな少年。

少年と初めてあつた時も、林のような場所に不時着したことを思い出した。ガンダムと戦つて、サイド6が無事ならいいのだが……。

「ん？ なんだ？ 小さな機械だ・・・・人型をしてる・・・・」

目の前に、プチモビルスースとは違う人型の小さな機械がいた。もしかしたら、森林事業をやっている人間かもしれない。

ということは、案外近くに町もあるのかも・・・・と考えた。

「ははっ・・・・なんだ、驚かすなよ。民間人かな？まあ、人がいるなら安心だ。」

目の前の小さな機械相手に、勝手に安心してしまつていた。あとでそれを後悔することになるとは知らずに・・・・

「ふう・・・・日本まであと5時間か・・・」

私は今、ゾダと共に日本へと向かうため、ドイツの超大型輸送機に乗り込んでいる。

どことなくこの輸送機は、ガウ攻撃空母に似ている気がする。

今は、暇つぶしに携帯端末を使ってこの世界について調べている。

「あれが例の・・・?」

「そうそう、いまどき巨大兵器なんて・・・時代遅れよね・・・」

「そもそも男が私たちの部隊の上官?・・・上層部はなに考えてんだか・・・」

ふと、聞こえてきた会話。

ソンネン少佐のところへ共に配属される女性兵士たちだ。

言っておくと、彼女たちはISの搭乗者ではない。

しかし、世の中の女尊男卑の風潮とは恐ろしいものである。ISに乗れない女性も、男性を見下すことがある世の中になってしまったのだ。

気にせず携帯端末に視線を戻したそのとき・・・・・・

『デュバル少佐！至急出撃の準備を！』

どうやら近くの無人地帯で小規模戦闘が起きていたようだ。

私は、これからその鎮圧をすることになった。

ちょうどいいではないか。先ほどゾダを侮辱した女性兵士に、ゾダの本領を見せるチャンスだ。

そう思いながら、私はゾダの格納スペースへと向かう。

「なんなんだよ、こいつら！」

小さな人型は、ビームを放つて攻撃をしてきたのだ。

見かけによらず、威力は馬鹿にならない。ジムのビームガンぐらい・

・・・いや、それ以上か？

最初の一機はヒートホークで真つ一つにした。

だが、数が多くすぎる。

「くそあつ！ ザクの機動性じゃ逃げ切れない！」

実際は、カタログスペック上ザク？ の最終生産型はドムと同程度の機動性を持つていたといわれている。

決して機体の機動性が悪いわけではない。今もホバリング走行をしてビームを避けていることからも性能の高さが伺える。

そして、操縦系統が統合整備計画によつて簡素化、他のモビルスーツとの互換性を意識した設計になつている。

この青年の操縦技術自体はお世辞にも高いとはいえないが、一度【向こう】の世界では性能で圧倒的に差があるガンダムタイプを行動不能にしている。

つまり、機体のポテンシャルは高いのだ。

それを凌駕する性能を持つヤツらは相当な化け物といつことだ。

「ん？ あれは、シェルターか何かか？」

見ると、非常に分かりにくいところにシェルターの入り口のようなものが見える。

扉は大きく、頑丈そうだ。うまく隠れれば逃げ切れるかもしれない。

「あそこに隠れられるな！ よおおし・・・・・」

背部にあるスラスターを吹かし、距離を離そうとする・・・・が小さな奴らはそれを遙かに凌駕する機動性でこちらに追いついてくる。このままでは打ち落とされる・・・・！

そう思った時、突然背後にいた奴らが次々と撃墜されていった。

『大丈夫かね？』

何事かと思っているところに通信が来た、友軍のものだ。直後、目の前に青い機体が降りてきた。すごい機動性だ。

「は、はい！ 援護、ありがとうございます！ ……それより！」

・・・

『『 I S はもういないよだな。ふむ、話すと長くなる。あの正体不明のシェルターの調査が終わり次第、付いてきてもらおう。それでいいかね？』』

「はい・・・・うわっ！ 左です！」

『『 む！？』』

目の前の青い機体は、左から突然現れた奴に大砲のようなものを撃たれた。

しかし、うまくシールドに角度をつけて兆弾させてから、シールドにマウントされていたシユツルムファウストを発射してそいつを撃破した。

『『 危なかつたな・・・・感謝する。先ほど、うまく撃墜できていなかつたようだ。』』

『『 いえ、危ないところを助けてもらつたのは自分ですしちゃ・・・』』

『『 そうか・・・・・！？ あれは！？』』

シェルターの扉のようなものから出てきたでかいロケット。変なニンジン型をしているそれが出てくると同時に、扉の中から爆発が起こる。

『『 逃げられたか・・・・・まあいい、後は別の隊に任せる。君は私についてきたまえ。』』

青いモビルスーツについていくことになった。

識別には EMS 10 とある。珍しい機体なのだろうか？ 見たことがないデザインだ。

そして、青いモビルスーツというと・・・・・ガンダムとの戦いで無残に死んだミーシャと、その乗機である強襲用モビルスーツ・ケンプファーを思い出した。

『『 本当に・・・・・どうなつてんだろうな・・・・・？』』

「君も、この世界に飛ばされてきたのか……」
驚いた……目の前にいるこのザクのパイロット。今、輸送機に床
つてから事情聴取をしているのだが、彼もまた同じような状況でこ
の世界に流れ着いていたらしい。

「そうですか……ここが別の世界だなんて……俺、これから
どうすればいいんだ……」

悩むザクのパイロット。バーナード・ワイズマン伍長……ルビ
コン作戦という作戦の中、連邦軍の新型モビルスース【ガンダム】
を撃破する任務の際にこちらに飛ばされたらしい。

「君の遭遇については、上層部もすぐに出してくれた。……
私の部隊に入らないか？」

「え？」

「まあ、君が嫌というならいい。君のよくな青年は、平和に暮らし
たほうが……」

目の前の青年は、学徒動員兵。なにも、この世界でも戦うこととはな
い。

「やります。……この世界で職業見つけられるとも限らないし、
あいつを手放したくないんです。」

ザクか……私はザクと、それを作ったジオーネクを憎んでいた。
だが、この青年にとつては元の世界での思い出が詰まつた大切なも
のらしい。

私の考えを他人に押し付けようとは思わない。……以前と
は変わったなど自分でも思つ。

「なら、話は早い。これから我々は日本へ向かう。この世界については、この情報端末で調べておくのだな。」

ワイズマン伍長に携帯端末を渡す。

「ありがとうございます！これから、よろしくお願ひします。デュバル少佐！」

私は、ワイズマン伍長と別れ、輸送機内の自室に入る。ベッドに倒れこみながら、私は疲れを取るためにゆっくりと目を閉じた。

「おこ、ミハエル。明日にはデュバル少佐が配属されるらしいぞ。」

「えうですか？」

「反応が薄いミハエル。どうしたのだろうか？」

「どうしたんだ？ミハエル、お前らしくもねえ……何かあったのか？」

「これを……見てください……」

携帯に表示されるメール。ミハエルさんのこと、絶対に許しませんよ……と書かれている。EHS学園教員である山田先生からだ。あんなに仲が良かつたのに……どうしたのだろう？

「いつたい何が？」

「それがですね……ソンネン少佐。パソコンをママヤに貸したときにその……偽装してたフォルダを見られましてね……」
そういうことか！予想していたことよりスケールが小さかった。
「仕方ない……俺から少し話しておこう……だがミハエル、
そういうのは見つからぬよう厳重に保管しない。いいな？」

「ソソネン少佐！ ありがと「J」ねこます！ ……あれ？ メール、来てますよ」

本當だ、俺の携帯にも着信が来ている。千冬からだ。
なになに・・・・・

内容を読んだ俺は凍りついた。

「なんですか？ 見せてくださいよ・・・・・ヒツ！ ？」

本文には、なにこれ？ どうこう」と？ と書かれている。画像の添付ファイルを開くと、以前俺が雑誌の取材で出たときの記事が写っている。

そこに、マークを引いてある文字。女性の趣味は、金髪の・・・
以下略。

・・・・・・・・詰んだな。

「まあいい。ミハエル、明日は『デュバル少佐たちの歓迎会』を行つ。場所は一夏から教えてもらつた五反田食堂だ。」

「・・・・・明日は確か一夏も来るんですよね？」

「そうだ。店を紹介してくれたんだから、あいつも招待しなきやならんだろ？」

「なら、いつしょに千冬さんがついてきただけやつんじやないですか？」

「・・・・・

恐ろしことに気づいてしまった。これからミハエルと対策を練ろう。

そのあと、ミハエルと部屋でずっと対策を考えていた。

それとこつしょに、俺は考えていることがある。

この楽しい日々がいつまで続くか？

俺やデュバル少佐、リチャード中尉たちがこの世界に飛ばされてきた。

今はジオンの人間しかこちらに来ていないが、連邦の連中がいつ来たつておかしくない。

奴らが来れば、また戦場に身を投じることになるだろ？

いままではそれが当たり前のことだったが・・・・・大切な親友、恋

人（？）、弟子（一夏）ができるから死ぬのが怖くなつたのかもしれない。

戦場ではいつ死ぬか分からぬ。

分かつてはいたはずなのに、それがたまらなく怖い。

「どこにもいかない・・・・・か・・・・・」

「ソソネン少佐？」

「いや、なんでもない。では、対策の案を発表してくれ。」

平和なこの日常が、これからも続いて欲しいと思つた。

「なんだと！全滅したスカーレット隊の残骸が消えた！？貴様は「冗談を言つてはいるのか？」

「い、いえ！なんでも、市街地に墜落した量産型ガンキヤノン等モビルスーシ数機の残骸が光と共に消えていつたと・・・・・映像をご覧になりますか？」

こんな馬鹿な話があるか？NT-1と交戦したザクの件といい、この件といい。

こんなおどぎ話のよつなことが・・・・・

「なんだこれは・・・・？」

モニターの中で、市街地のあちこちから光が出ている。

そして、それが収まると・・・光の出た場所にあつたはずの残骸が最初からなかつたかのように消えていたのだ。

「そんな馬鹿な・・・！？」

こんな馬鹿な話を上層部に連絡するわけにはいかないため、この事実を表に出すことはしなかつた。

12話 ザク、大地に墜ちる（後書き）

今までのキャラたちと違った感じであるバーニーを書くのは難しかつたです。

これから奥さと特徴を出させていければいいのですが・・・

最近、ジダの出番が多くなってきました（汗）

やはり汎用性と使い勝手ではモビルスーツのほうが・・・

しかし、これからヒルドルブの大規模な戦闘シーンを予定していますので・・・戦闘シーンの迫力は表現しきれるか分かりませんが、精一杯がんばっていきますのでお楽しみに！

とまあ、ここまで言つていいのですが、次話は戦闘シーンはあります！

次話では、バーニーとある人物の出会いを書いていきます。

それでは、また次話でお会いしましょう！

1-3話 悲劇への序章（前書き）

更新が遅くなりました。

申し訳ありません。

今回、戦闘は無いです。そしてとんでもなく駄文・・・

次話が戦闘のある話になる予定です。

戦闘シーンの描写がうまく描けるようがんばっていきまくので、これからもよろしくお願いします。

13話 悲劇への序章

今日は、デュバル少佐の歓迎会を行つ口だ。

集まつたのは、我が隊のメンバーと一夏、そしてEIS学園の一部の生徒（篠ノ之等以下5名）だ。

ラウラ少佐のサポートにクラリッサ大尉も来ている。口には出さないが、クラリッサ大尉が最近仕事をしつかりやつているのか心配になる。

千冬と山田先生は学園が忙しくて遅くなるらしいが、絶対に来るとの事。

「では、我が隊に来たデュバル少佐の歓迎会を始めます！デュバル少佐、どうぞ！」

合図をするミハエル。すると、デュバル少佐が席から立ち上がり拍手がおきた。

「今日は、私の為にこのよつた会を開いてくれてありがとうございます。今日は私から重大な発表がある。・・・ワイスマン伍長。」

重大な発表？なんのことだらうか・・・そう思つていると、デュバル少佐の隣に座つっていた金髪の青年が立ち上がつた。誰だらうか？今回配属される兵にはいなかつたはずだが。

「バーナード・ワイスマン伍長です。ザクのパイロットとしてこの部隊に配属されることになりました。これからよろしくお願いします。」

「ザクだつて！？一体何故・・・

「私がここにくる途中、いろいろあつてね。私のこともあつてか、ワイスマン伍長もこの部隊に配属されることになつたのだよ。」

「そうか・・・また同じような状況で・・・

「まあ、紹介はここまでにして・・・今日はバーナードとこきましよう！」

！」

ミハエルがそう言い、皆も会話をしたりしながら料理を食べている。一夏に五反田食堂には五反田厳さんというとても厳しい人がいると聞いていたが、今日は急用ができたためいんないとか。

俺もデュバル少佐と話し始める。

「ソンネン少佐、今日はどうもありがとうございます。」

「いや、気にするな・・・・それより、ザクの青年のことなんだが・・・・」

気になることがあつたので、デュバル少佐に聞いてみることにした。
「ワイスマン伍長がどうかしましたか？」

「ああ、ここ最近世界を越えてくる人間が増えているからな・・・。
そのうち連邦のヤツらも・・・」

あいつらが来たらどうなるか？一機二機ならまだしも、大隊規模や
艦隊が飛ばされきたら？

戦争になつて、もしかしたらエリも戦場に狩り出される」ともある
かもしれない。

「そうですな・・・・それも現実味を帯びてきたかも知れませんぞ。
この資料を見てください。」

デュバル少佐から渡される資料・・・・そこには、ここ最近ドイツ
の国土内に現れた謎の残骸が映つている。

「この残骸、政府は廃棄されて大気圏突入した人工衛星と発表して
いるが・・・・」

よく見ると、この世界のものとは規格が違うことがわかる。デュバル少佐が入手した別の写真には装甲に書かれたマーキングのような
ものもある。

「こいつは、もしかしたら連邦の戦艦じゃねえのか？・・・なんで
こんなもんが？」

「それはまだ分かつていらないのだが、連邦の戦艦だとしたら・・・
これからこのような兵器が来てもおかしくはないでしょう。」

俺は、一夏たちのほうを見る。一夏は楽しそうに少女たちと会話を
していた。

「やつなれば、あいつらをやるのが俺たちのやるべき事なんだろつ
な。」

「やつですな・・・・・」

大人たちはみんな飲んでわいわいやつてこる。

ミーシャも酒が好きだつたなあ・・・・・・・

「はあ・・・話しだ相手もいなか・・・・・」

デュバル少佐はソンネン少佐と話しているし、他に話せるような相
手もない。

「あのー、ワイスマンさんでしたつけ? こっちで話しませんか?」

一人の少年が話しかけてくれた。気遣つてくれたのだろうか?
しかし・・・・・

「まあ、気軽に話しましようよ?」

気軽にと言われても・・・なんだよ、その両手に華状態ならぬ全方位
位華状態!

左に背が小さめで髪を二つに結んだ美少女。右には髪をひとつに結
つた美少女。後ろには金髪をロールさせている美少女と、金髪を後
ろでひとつ結びにした美少女。そして、少し離れたところから様子
を伺つている銀髪に眼帯の美少女。・・・そんな漫画みたいな光景、
現実で見るとは思わなかつた。

「俺は、織斑一夏つていいます。よろしくお願ひします。」

ああ・・・俺のためにここまでしてくれているんだ。その厚意を無
駄にはできないな。

「俺は・・・バーナード・ワイスマンだ。バーニーつて呼んでくれ。

・・・年近いと思つし、敬語使わなくていいぞ一夏。」

「わかった。よろしくな、バーニー！」

簡単な自己紹介をしてから、たわいもない話で盛り上がる。

一夏はハーレムを作つてゐるわけではなく、左側にいる一いつ結びの少女、鈴と付き合つてゐるらしい。

ただあの二人がいちやつと他の美少女たちがムツとしているんだけど・・・気のせいかな？

・・・それとも・・・いや、今は考えなくてもいいか。

そんな一夏の横にいる美少女たちを見て、俺はある人物を思い出した。

クリス・・・・・・・赤毛の女性のことを考えてゐると、一人の少女から声をかけられた。

「バーニーさんは、どこの出身なんですか？」

金髪ロールの子、セシリ亞からの質問だ。

サイド3つて答えたいけど、じつちの世界じゃ分からんのだよな・・・。

「シドニー生まれの、シドニー育ちさ。今、向いにはサーファーだらけかな。」

前とは同じ失敗はしないぞ。今回ばかりは嘘だと見抜かれて・・・ないよな？

「今、オーストラリアは冬だと思つんだけど・・・」

シャルという子からそう指摘された。しまつた！前と逆に答えたけど、世界が違うから季節が違うのか！

「そうだよな、バーニー・・・・本当にシドニー生まれなのかな？」一夏からそう追い討ちをかけられる。どうじよつ・・・本当のこと話をしていいのか？

他の世界の人間だつて知られたら、間違いなく大問題になるよなあ・・・

そう思つてゐると、一人の少女がさらに何かを言おうとしているのが分かつた。

これ以上、追い討ちをかけられたらどうしようか・・・・・そう考えて

いたが・・・

「バーニィは、軍隊のことでドイツ暮らしが長かったそりだから季節が分からなくなっていたのではないか？」

黒髪の少女、篝からの助け舟。すると、みんな納得したようで別の話題へと移つていいく。

今、微妙に篝が目線をこちらに向けってきたのは気のせいだろうか？もしかして、本当は俺を助けようとしてくれたのか？？？と一瞬思つたが、やっぱりそれはないだろうな。

2時間ほど話していたら、ミハエルさんが歓迎会の終了の合図をした。

一夏たちは未成年だから歓迎会はあまり遅くまではできない。だから早めに終わらせて、一夏たちを送つてから俺たちは基地に向かう。

店から出る前、先ほど店の手伝いをしていた青年が一夏に話しかけているのを見た。

よほど仲の良い友人なのだろう。話している一人はとても楽しそうだ。

その光景を見て、なんとなく俺は学生していたときの友人を思い出した。

学生のときはなんとも思わなかつたが、今思い出すと急に寂しくなつたような気がする。

あいつら・・・ちゃんと生き残つてゐるのかな？

学徒動員で兵士になつて戦場に行つたやつはたくさんいる。

補給基地にまわされた奴もいれば、ジオンの重要な拠点であるア・バオアバーの守備隊になつたと自慢してきたやつもいた。

戦争だといつ死んでしまうか分からぬ。サイクロプス隊の仲間たちが死んでいくのを見て、それが分かつたのだ。

俺にとつては、平和に暮らして普通に友人と笑つて話せる一夏たちが、とても幸せそうに見えた。

『なんで私を待つてくれなかつたの?』

「そ、それはだな・・・一夏たちはまだ未成年だから、あまり遅くまでやるわけにはいかんだろ?」

『それなら仕方ないね。今度、埋め合わせしてよね。じゃあね』
俺は携帯電話を閉じる。結局千冬たちは仕事が忙しくて来れなかつた。

電話越しに聞いた声はとても不機嫌そうで、今間違いなく山田先生は理不尽なことをされて困っているに違いない。そうだな・・・たとえば塩入りのコーヒーを飲まされるとか・・・
そんな馬鹿なことを考えながら、ミハエルの運転する車で基地へと向かう。

「はあ・・・ふられちやつたな・・・・。」

私が片思いしていたソンネンさんは、織斑先生と付き合つて始めてしまつた・・・らしい。

私の初恋は簡単に終わつてしまつた。
いや、初恋だつたのだろうか?

もしかしたら、顔も見たことのない父親に重ね合わせていただけかもしれない。

そう思つて歩いていふと、なにかにぶつかつた。

「おい。」

低い声が聞こえる。

「おい。人にぶつかつといて謝りも無しかあ？嬢ちゃん。」

外出するときにはこういうことがあるから困る。

今はもう暗いし、人通りも少ない。

いくら女尊男卑とはいっても、EISを展開しなければ生身の女性は男3人の集団には勝てない。

「ごめんなさい。」

一言言つて、その場を去ろうとしたら右腕をつかまれた。

「おい、そんなんで済むとは思つていないよなあ？謝り方つてのがあるだろ？」

「へへへ、嬢ちゃん美人だしこれから俺たちと一緒に来たら許してやるぜ？ヒヤハハ！」

怖い・・・誰か助けて・・・

「だれ・・・か・・・たすけて」

恐怖で声がかすれてしまつ。それが聞こえているのか聞こえていいのか分からぬが、やはり誰も助けてくれない。

「じゃあ、行こうか。グヘヘ・・・・ゴバアツ！」

「何だお前、グハツ！」

鈍い音が聞こえて、右腕が解放された。顔を上げると、2人の男は倒れていて、もう一人は逃げていった。

「大丈夫かい？」

目の前にいるのは20代前半ぐらいの若い男の人。

服装はなんか古臭いというか、流行にはのつてい感じ。髪はきれいな銀髪をしている。

顔も、美形の部類に入ると思つ。あとは、特徴的な銃弾を模したネットクレスをしている。

「はい、大丈夫です。助けてくれてありがとうございます。」

「気にしないで。こんな時間に歩くのは危ないから、早めに帰つた

ほうがいいよ。」

優しい人もいるんだな・・・と思いながら、急ぎ足で寮へと帰った。

ISH学園から少しはなれたところにある工業地帯。そこにある倉庫に、一人の男が入つていく。

「ベン。偵察はどうだつた？」

「ああ、ここはもしかしたら日本じゃないのか？写真もある。見てくれ。」

見ると、見慣れない服装の男女や建物が写っている。写真に写る雑誌を指差す。その雑誌の表紙には日本語が書かれている。

「奇妙な事態だが、受け入れるしかない。・・・だが・・・「隊長！ジオンの攻撃空母です！」なに！？」

まだ残存していたガウがあつたのか！？ここは日本、中立地帯だ。もしかしたら、ジオンの残存勢力が中立地帯を襲い始めているのかもしれない。

「全員、出撃だ！早くしないと手遅れになっちゃうー。」

それぞれが自分の機体へと向かつた。

それが悲劇になるとは誰も思つていなかつた。

13話 悲劇への序章（後書き）

ああ・・・相変わらずの駄文だ・・・

更新が遅いのに駄文つて・・・

次回はうまく書ければ・・・いいなあ。

14話 戦場（前書き）

更新が遅くなり、申し訳ないです。

もつと文才があれば・・・といふのと、いい加減小説の書き方を覚えたらどうだ（怒）と自分に言い聞かせていたり・・・。

今回は戦闘シーンに力を入れた14話です。
力を入れた・・・はずなのですが・・・。
なんか迫力不足だったり、意味が分からん！といふいつも通りの駄文に・・・。
なんでこうなつてしまふんだろ？・・・。

「敵機確認した。あれがデュバル少佐とワイズマン伍長の言つていた連邦軍のモビルスーツか？」

歓迎会の後、工業地帯周辺で我が軍の輸送機が撃墜されたと報告が入つた。

ちょうど基地に戻つていた俺たちは、基地に戻つてすぐに緊急の出撃準備をした。

報告によれば工業地帯にある倉庫から輸送機が狙撃されて、輸送機は海上に墜落したようだ。

一般人に被害が出なかつただけまだマシ……といったところか。

そして、同時にある問題が浮かび上がる。

我が軍の輸送機は、I-Sの攻撃に耐えられるほどの耐久力を目指して開発、生産されている。

ラファール・リヴィアイヴ等の第2世代I-Sの持つ実弾兵器なら耐えうるほどの重装甲を持つ。

そして、意外なことに俺がこの世界に来る前からあつた輸送機のようだ。

一番の特徴は大型兵器の運用ができる構造であること。その特徴を生かしてデュバル少佐のゾダを運ぶのにも使われた。

以前、俺はこの世界においてのこのような時代錯誤とも言える輸送機の存在に疑問を持つたことがあつたが、今はMSやヒルドルブを運搬できる数少ない輸送機として信頼している。

さて、話を戻すがそこで浮かび上がる問題とは一般的なISの攻撃に耐えうる輸送機を簡単に撃墜するほどの威力を持った敵がいると云ふことである。

少なくとも、第3世代のISであるブルー・ティアーズが持つレーザーライフル以上の威力を持つ兵器を相手は保有しているということになる。

ISの軍事利用は条約で禁止されているため、今回はモビルスーツとヒルドルブの新型3機、それと戦闘車両やヘリなどの旧式兵器による作戦になつた。

「間違いないです。コロニーで見た奴と一緒にだ！」

ワイズマン伍長の確認が取れた。間違いない、相手は連邦軍だ。

前から予想はしていたが、これほど早くにこんな事態が来るとは・

・・・

見たところ連邦軍の開発したモビルスーツが6機もいる。

軽装の奴、砲戦用の奴、狙撃用と見られる奴が各2機ずつだ。

「よし、デュバル少佐とワイズマン少佐が陽動をかけてくれ。まずはこちらの士俵におびき寄せる。」

「了解した。ワイズマン伍長のザクは完全じゃなかつたな？私はヴィダで正面から接近する。ワイズマン伍長は工場の陰に隠れながら左から回り込んでくれ。」

指示とともに敵のほうへと向かう2機。

「始まつたな・・・・・戦争を教えてやる・・・・」

そう呟きながら照準合わせを始める。

「先ほどのガウは墜ちたでしょつか？」

量産型ガンキャノンに乗る、配属されたばかりの新兵であるマイクから通信が来る。

「追撃が必要なら我々の出番だが……」「これは様子を見るのが

「隊長！ジオンのモビルスーツです！」「なに……」
見ると、正面から高速で移動してくる青いモビルスーツが一機。

コロニーの時の奴とは違つ機体のようだ。くそ……工場地帯でも

やみにモビルスーツ戦は……。

正面まで来たところで青いモビルスーツがマシンガンを向けてきた。

「あのモビルスーツ、こんなところで発砲する気か！ジオンの奴め

！」

「こんなところで発砲するなど正氣の沙汰ではない。ジオンの奴らは人道にも背いたか！」

そう思い、全機に発砲命令を出そうとしたところ、青いモビルスーツはザク・マシンガンを見たあとに、こちらに背中を向けて逃げていった。

「弾詰まりか？整備もろくにしてないからそんなことになるんだよ！あいつを追うぞ！逃がすな！」

スラスターを吹かせて距離を詰めようとする。

このジムコマンドはスペック上、あのRX-78ガンダムに追いつくものがある。

先ほどデータ照合したがあの青いモビルスーツはジオンの欠陥機だ。それに追いつけないはずがない……。

「隊長！右からザクが！……なんだこれは！？煙か！？」

右を見ると、熟練のパイロットであるエリックのジムコマンドが煙

に覆われていた。

そして、もうひとつ煙の中うごめく影がある。

「くつ・・・・舐めた真似を・・・。エリックとジョージとベンの3人はザクを追え！俺たちは青い奴を追う！」

そう言いながら、一一手に分かれて敵を追い始める。

「異にかかったか・・・・ワイズマン伍長、そちらはどうかね？」

『は・・はい、順調です！5分で目的地に着くと思いますー。』

我々の作戦はこうだ。

まず、私のジダとワイズマン伍長のザク？改で陽動をかけ、敵部隊を分断させる。

そして、周囲への被害のないニコータウンの建設予定地へとおびきよせて、そこで待機している戦闘車両とヒルドルブの砲撃で敵部隊を壊滅させる。

「こうも簡単に成功するとはな・・・だが、連邦のモビルスーツの性能もなかなかのようだ。油断はできんな。」

後部を映すモニターに映る3機のモビルスーツを見ながらそう呟いた。

どれも軌道上で見たものよりも性能は上で、推力ひとつ見ても相当のパワーだ。

ザク？F型などではまともにやり合つたらすぐに撃墜されるだろ？。もつひとつ、ワイズマン伍長のザクにも驚きを隠せない。

ホバー移動で軽やかに移動している様子を見ると、私の知るザクとは似て非なるものようだ。

「まるで恐竜のようだな・・・。」

モビルスーシの実戦投入から一年もたたない内に、たくさんの新型機が現れている様子はまるで恐竜のようだと思った。

「目的地確認。ソンネン少佐、よろしく頼む。」

「へへっ、よしやくヒルドルブの出番か・・・。ワイスマン伍長、よく見ている。戦争を教えてやる。」

久しぶりの実戦だ。最近演習続きだつたため、入念に計器のチェックをしておいた。

モニターを見ていると、ザク？改ビザクが来るのが見えた。
敵の数は6、性能は以前戦ったザクなどとは段違いだ。

「全員、気を引き締める。作戦通りに車両部隊はミサイルの水平発射、ヘリは上空から後ろに回りこめ。あいつらを逃がすなよ。」

「こいつ、チヨロチヨロしゃがつて！」

『隊長、ここは空き地のようです！ここなら発砲をしても・・・』
確かに・・・ここなら周りに何もない。流れ弾の危険もないだろう。
しかし、妙ではないか？まるで最初から仕組まれたかのような・・・

・
『隊長！ザクと青い奴が合流しました！』

見ると、青い奴とザクが合流したあとに一瞬で暗闇に消えた。
その後、モニターに映る【ソレ】を見つけた瞬間、無線で全員に呼びかけた。

「全員、防御隊形をとれ！その後・・・！」

最後に見たものは、無数の光がこちらに向かってくる光景だった。

「初弾命中。撃破！」

無線で報告をする。敵は作戦につまく引っかかった。

車両部隊からの報告もあつたが、車両部隊のミサイルは命中したものの大破ならずとのことだ。

連邦軍のモビルスーツは予想より重装甲のようだ。

「車両部隊は後退！モビルスーツとヒルドルブで接近してケリをつける！」

『う、うわっ！？た、隊長がっ！』

『マイク、落ち着け！・・・畜生！・・・敵は有線ミサイルを使つてきやがる！』

『おい、ここは一度体勢を整え直すぞ！・・・・・ガンキヤノンは砲撃で敵車両部隊を吹き飛ばせ！・・・・・ジョニーと俺はポジションを確保して敵モビルスーツを狙撃するぞ！』

相手は煙幕で視界を奪つているつもりだろうが、それは逆に自分たちの視界も奪つているということ。

相手は車両とモビルスーツ2機のみ、こちらはモビルスーツ5機だ。常識的に考えて勝機はこちらにある。

『惜しかつたな。車両でモビルスーツに勝てるわけねえだろうが！』
量産型ガンキヤノン2機の肩のキヤノン砲が轟音を上げる。

『よし、車両部隊からの反撃はない。突つ込むぞ！』

『！？ぐわっ・・・・』

「！？」

突然無線から聞こえた声の主の方を見た。すると、突然煙の中から現れたのであるう青いモビルスーツが、シールドピックで量産型ガンキヤノンのコクピットを突き刺しているのが見えた。

『青い奴が突つ込んできやがった！マイクがやられた！』

馬鹿な・・・・！2機の新鋭モビルスーツがこんなにあつさりと倒されるなど・・・・！

敵のモビルスーツ一機がビームサーベルを抜いてこちらに向かってきた。

「ほう、来るか！いいだろう！」

シールドピックで突き刺していた敵モビルスーツを押しのける。そして、脚にマウントされているヒートホークを左手に持ち、身構える。

相手のモビルスーツが上段から斬つてくる。それを受け流し、ヒートホークで斬りつけようとする。

「なに！この攻撃をシールドで防ぐか…………よほど腕があると見た！」

相手のモビルスーツは、シールドでヒートホークを受け止めながら腰にあるマシンガンに手を伸ばしていた。

この距離でマシンガンの銃撃を浴びたらひとたまりもない。急いでスラスターを吹かし、距離をとる。

それを逃がすまいと相手もこちらに突進しながらマシンガンを撃つてくる。

ゾダの武装は近距離に対応できるものがザク・マシンガンとヒートホークしかないのだ。

それを相手は知っているかのように、こちらのマシンガンの銃撃を避けてビームサーベルで斬りかかるようとする。

ヒートホークで何回かビームサーベルと鍔迫り合いができるも、一瞬でこちらが押し負けてしまう。

もともと高機動戦闘用のゾダは、このような戦い方は得意ではない。しかも、かつてのザク？との正式採用争いから基本設計が全く変わつていないのだ。

ザク？にパワーで勝ても、本当の新鋭機には勝てるはずがない。

私は切り札を出すためにコンソールを打つ。

そこに相手はどどめを刺そうとドームサーベルで突きを繰り出して來た。

「少々油断したのではないかね？ジダの武装はまだあるのだよ！」

シールドにマウントされた照明弾を撃つ。

すると、対光フィルターをはつていなかつた相手は動きを止めた。

そこにヒートホークで斬撃を加える。

コクピットに食い込んだヒートホークは、一瞬でパイロットを蒸発させただろう。

操縦者を失つた敵モビルスーツは、ゆっくりと倒れていった。

「デュバル少佐、うまくやつてるかな・・・？」

煙幕でうまく周りの状況が見えない中、俺は敵のモビルスーツの側面に回りこんでいた。

無線は傍受されないよう切り替つてている。作戦がばれたらこちらの勝機はなくなる。

モニターに映つたのは砲撃戦用のモビルスーツ。

「さつきの砲撃は当たつたらひとたまりもないな・・・・・・」
から倒そう！」

先ほどの砲撃で車両部隊に被害が出なかつたのが奇跡だ。
地面に穴をあけるほどの砲撃だったのだから、モビルスーツでも当たればひとたまりもない。

ソンネン少佐が合図を出していなければ危なかつた。

「こいつ……おとなしく喰らつてくれよ！」

充分に灼熱化させたヒートホークで斬りかかる。

対応が遅れたのか、避けきれずに右手を切り落とされる敵モビルスーツ。

こんな近距離ではキャノン砲も撃てないだろ？

「こ、これで……とじめだつ！」

ヒートホークでもう一度斬りかかる。しかし・・・・・

「受け止めた！？グワッ！」

敵のモビルスーツは、マニピュレーターを失った右腕でヒートホークを受け止め、残っている左腕でパンチを繰り出した後にキックをしてきた。

衝撃がすさまじく、体勢を崩したためにザクが転倒してしまつた。敵は倒れているザクにキャノン砲を当てようとする。

「ま、まだ・・・まだ終わっちゃいない！」

脚部と背部のスラスターを一気に吹かして、砲撃をすべるよつに避ける。

「これで、どうだつ！」

そして、そのまま体勢を立て直して、相手にハンドグレネイドを3つ投げる。

キャノン砲を避けられて困惑している相手は避けることができずに左肩のキャノンが吹き飛び、頭部も左側が損傷してメインカメラがむき出しになつている。

しかし、驚くのはこれだけの攻撃を「えても大破しない重装甲である事だ。

「そんな武装じゃ口クに戦えないはずだ。今度こそ、とじめだ！」
満身創痍の敵に斬りかかるとすると、モニターの左端をピンク色の光が過ぎ去つていた。

それとともにアラートが鳴り、ザクの右腕が付け根から吹き飛んで

いることが分かつた。

「ビーム兵器！？他の奴が気づいたのか！……うつ！？」

目の前の奴が頭部の右側に残った60mmバルカンで攻撃をしてくる。

右腕がない今……もう、ザクの特徴的な武装であるアレに賭けるしか……

「う、うわあああーっつー！」

バルカンを気にせず敵に突進をかける。

迎撃ができない敵のモビルスーツの胴体に、ザクのショルダースパイクが当たり、装甲が大きく凹む。

そのまま後ろに吹き飛ばされた敵モビルスーツは、そのまま動かなくなつた。

「はあ・・・はあ・・・あとは・・・ソンネン少佐とデュバル少佐が！」

「ビーム兵器……そうか、あれが輸送機を落とした奴だな。」
モニターに映るモビルスーツは、その手に持つ大型ライフルで狙撃をしていた。

「気づかれないうちにこちらから狙撃をする－APFSDS装填－」
照準をしつかり合わせ、砲撃する。

狙撃に集中している敵モビルスーツは、おそらくこちらの砲撃に気づかなかつたのだろう。

回避行動もとらぎにAPFSDSを受けて爆散した。

「お、俺以外全滅！？・・・・くつ・・・・」
煙の中に転がっているのは、ついせつせつまで仲間のモビルスーシだつたもの。

どれも無残な姿になつてやられている。

「ど、どうすりやいいんだ！」

俺は、まだ死にたくない。

ゆつくりと迫る、死の恐怖に操縦幹を握る手が震える。

ふと、先ほど偵察をしに行つたときに暴漢から助けた少女を思い出す。

年は16、7ぐらいだろうか？

夜でも分かる綺麗な黒髪、そして大きな瞳・・・細すぎないようなスタイルの・・美少女と呼ばれる部類に入るだらう少女だった。俺は、まだ女性と付き合つたこともなかつた。

「そのまま部隊から逃げ出してれば・・・・なあ・・・・。」

あの時逃げていればこんなことにならなかつたのかもしれない。しかし、仲間を裏切る気にはなれないし、後悔先に立たずという言葉もあるとおり、今後悔しても何も変わらない。
もう、死を覚悟するしかない。そう思つていた。

しかし、脳裏にある言葉が浮かんだ。

『ジム・スナイパー？は大出力を生かして敵から一気に距離を離すことも可能です。』

機体を受領したときに聞いた説明だ。あの時はいい加減に聞いていたからあまり覚えていなかつたが。

もし本当にそんなことができるなら、助かるかもしれない。そんな希望を抱きながら、スラスター出力を全開にした。

「残り1機、どこに行つた？」

ヒルドルブのモニターには連邦のモビルスーツの残骸が映っているが、1機足りないのだ。

撃墜報告もない。最初にワイスマン伍長とデュバル少佐からあつた報告では、敵モビルスーツは6機との事だった。しかし、映る残骸は5機分。

どこに隠れたのだろうか・・・・そう思つていると・・・

『敵モビルスーツ発見！・・・・IS学園の方向に逃げているぞ！』急いで確認すると、IS学園の方角にモビルスーツが1機飛行して向かっているのが見えた。

「敵モビルスーツ発見、しかし住宅街への被害を考えるとヒルドルブでの砲撃はできない。・・・デュバル少佐！」

『了解した！』

すぐに敵モビルスーツを追いかけるデュバル少佐のヅダ。

それを見ていると、急に強い衝撃が来た。

その衝撃で頭を打つたのか、そのまま俺は意識を手放した。

「ソ、ソンネン少佐！」

ヒルドルブのコクピットがある胴体の側面装甲が大きく歪んでいる。砲撃の主は、先ほど倒したと思っていた砲撃戦用のモビルスーツだ。右肩に残っているキャノン砲から煙が出ていた。

キャノン砲の衝撃に耐えられなかつたのか、そのモビルスーツは胴体のあちこちから煙が出て、完全に動かなくなつた。

「救護班！急いでくれ！」

ヒルドルブのもとに向かう救急車両。そのサイレンの音が、やたら耳に鳴り響いていた。

「JJJまで来れば安心だな・・・。」

そう思い、着陸しようと思つていて、急にアラートが鳴り響いた。エンジントラブルだ。

「おい、嘘だろ！どこか着陸できるといはばー。」

ちょうど、前方になにかの競技場かもしない大きさの、広いグラウンドのようなものが見えた。

高度を下げていったところで急に何かが爆発したような音が聞こえ、俺は意識を失った。

IS学園では、突如聞こえた轟音で眠っていた教師・生徒が一斉に飛び起きた。

そして、教師はすぐにISを装備してグラウンドに集まれという放送が流れ、何事かとグラウンドへ人が殺到する。

「なんだこれは・・・。」

世界最強と言われる女性、織斑千冬。

彼女は目の前に映る、臨海学校で見たような人型兵器がグラウンドに墜落し、炎を上げている光景を見て絶句している。

私も野次馬にまぎれて驚いていると、ISを装備している教師たちが、その人型兵器の胴体にあるハッチをこじ開けた。その中から運び出されたのは、一人の若い男。

見間違えようがない。首に銃弾を模したネックレスをしているその男は、間違いなく町で私を助けてくれた人だ。

言葉が出なかつた。周りにいる生徒も悲鳴を上げたり、泣き出してもしまつたりしている。

まだ思春期で、戦場など見たことのない少女たちに、その光景は刺激が強すぎた。

あの優しい青年が、今は血塗れで煤だらけになつてしまつたという事実を受け入れることが出来なかつた。

そんな中、平常を装つていた織斑先生が携帯電話で何かを聞いて驚

いていた。

そして、世界最強の女性はその場に泣き崩れたあと、学園中に聞こえるような悲鳴を上げた。

まさか・・・・！？ そう思い、何があったのか聞いた私は、その話を聞いて田の前が真っ暗になる。

デメジエール・ソンネン少佐が、戦闘中の負傷によって意識不明の重体になった。助かるか分からない。
それが、倒れる前に聞いた言葉だった。

14話 戦場（後書き）

いつになつたら……小説が上手く書けるようになるんだろ？……

そう思つてゐる駄目作者です。

さて、いつも通りぐだぐだの（？）あとがきです。
誰も読んでないかも知れませんが……。

時々書く作者の失敗談。……これも「コーナー化したほうがいいのかな……？」

読んでくれる人が居るかは分かりませんが……。

とにかく、今回は今話題のクリスマスについての失敗談です。

はい、まず登場人物（？）

- ・作者（全体的に駄目）
- ・Aさん（クラスメイトの女子、スペック高い……本当に。）
- ・Bさん（Aさんの友達……特筆すべきことはない）

もう、なんか展開が読めてくるような感じなのですが……（汗）
ついこの前、これから忙しくなるからクリスマスパーティーを早めにやろうということになり、駄目な作者は「クリスマスパーティー！？へへっプレゼントをサプライズで意中のAさんおとすぜ！」
「……」
「……とませた小学生がやるような作戦（？）を勝手に考へ、実行したのです。

用意したのは、ブレスレット（6000円）（こじりー）重過ぎないプレゼント選びが重要だと思い、「此思いのひとつにプレゼントしたいのですが・・・」と勇敢に（無謀に）店員さんに頼み、一押しされた一品です。

これが、当日の最後の戦いの記録です。記録願います・・・願います！

作者「Aさん！これ、クリスマスプレゼントー」

Aさん「え？ 私に？ ありがとー！」

こじまで順調、作者のテンションが上がる

Bさん「作者くん、なにやつてんの？」

ジャマモノガラワレタ 作者のテンションが下がった

Aさん「みてよBちゃんー」のブレスレットー

Bさん「え？ これって・・・」

作者「（え・・・なんか雲行きが・・・）」

Bさん「駅前の（ピーチ）ていつも店で、カップル用とかいって売
られてるやつだよね？」

作者「えええっ！ 何で知つてんの！（えええー何で知つてんのー）

Bさん「二つ入りのはずだよね？ もう一個は？」

作者「（やばい、このままじゃ Aさんのこと好きだとばれてしまう
ー！）」

Bさん「アンタもしかしてAのーと好きなの？」

作者「・・・」

Aさん「・・・」

沈黙が破られることはなかつた。

こうして、以来Aさんはメールも来なくなり、会話もしていな

い。

分かりやすくまとめるまでもなく、事実に基づいた正確な記録です。

（勝手に結論）

作者は文才だけじゃなく恋愛の才能もなかつた。（女性がらみになると失敗多し）

小説の恋愛要素がぐだぐだな理由つて、まさか・・・・・・

（読者さんへ）

あともう少しでクリスマス。
プレゼント選びは慎重に！

クリスマス番外編を書くかもしだせんが期待はあまりしないでください。

15話 別れ（前書き）

早めに仕上げることができた15話です。

出来はいつも通り田も当地でられない状況なのですが・・・。
明日、クリスマス企画を投稿する予定です。

「デュバルさん、ソンネンさんの様子は……？」

・ 残念ながら、この年も終りのたな
・ 1ヶ月も経てのたな

されないと聞かされた。

「つと付きつきりだつたんだぞ？」

ソンネンさんが病院で治療を受けたのとあわせ、千冬姉はすつとソンネンさんの心配をしていった。

グラウンドに隠れてきたロボットの事もあって、目元に大きなクマモモの、狂犬病菌を含む唾液が、口から漏れ出た。

ソンネンさんのが田を見まさないかって……た。

「夏君、そろそろ時間だ。・・・・・ ソンネン少佐がいない今、千冬さんを守るのは君だけだ。・・・・・ ソンネン少佐が目を覚ますまで、頼むぞ。」

「はい、デュバルさん。また来ます。」

そう言って病室から出た。ドアの両端に立っている兵士にあこがれをして、ハレベーターのあるほうへと向かう。

「いやにちがは、バー二ヤ。・・・そのファイルは？」

のファイルが目に入った。

THESE

グラウンドに墜落したロボットのパイロットは工場で治療、保護されている。

国籍不明のパイロットは、2週間ほど前に目を覚ました。

それから事情聴取が毎日のように行われているのだ。

「俺、すぐにこれを届けなきゃならないから……じゃあな、一夏。」

「バニーの後姿を見てから、エレベーターに乗りこんだ。

病院から出て、学園に戻ってきた俺は、少し見たくなかったものを見てしまった。

『いつくん、引っ越し抜いて!』

そう書いてある看板とともに埋まっている(?) ウサ!!!。

もしかしながら束さんだ。正直、こんな時には会いたくない人物の一人だ。

よし、無視しよう。

そう思い、寮に向かって歩き始めると、空から声がした。

「ストップ、ストップ! なんで引っ越し抜いてくれないの!…?」

降つて来たでかいニンジン。ニンジン、いらないよ。

ニンジンから出てきた痛い格好の天才、篠ノ之 束。

「束さん、今忙しいんで、後にしてくれませんか?」

「え、せっかくあのオッサンを助ける方法をいつくんに教えに来たのに…。仕方ないから帰っちゃおうかな。」

ソンネンさんを助ける方法? そんなことを語つてまた何か変なことをするつもりなんじゃないのか?

いや、待てよ。束さんは天才、ならばソンネンさんを助ける方法ぐらい簡単に分かるのかもしない。

「束さん、それ詳しく教えてください。」

「やつと話に乗ってくれたね、いつくん。いいよ～。この天才束さんにかかれば、凄く簡単にできることなんだから。でもね、いくくん。やるために、いつくんとちーちゃんの覚悟が必要なんだよ～。」

「覚悟ならあります。ソンネンさんを助けるためにはー。」

「じゃあ、これから話すことをよく聞いてね～。」

そのあと、話を聞いた俺は戸惑つた。しかし、悩んだ末に出した答えは・・・・・・

「わかつたよ、いつくんは本当にやさしいね。じゃあ、もひ今日の夜にぱぱっと作戦を実行するからね～。」

YESだ。

織斑一夏がいなくなつた後、一人の天才が口を歪めていた。

「全く、いつくんは本当にやさしこよ。そこが好きなんだけじね。まあ、この世界にいるべきじゃないイレギュラーを消せて束さんはうれしいよー・・・・・じゃなきや、あの出来損ないのでかい戦車のせいで計画が台無しになつちやつもんね。」

そう言い、天才は二ンジン型のロケットでエラ学園を後にした。

その夜

「ヒルドルブの修理、ようやく終わりましたね。でも、あの損傷では廃棄処分にすればよかつたのでは・・・？」

「ソンネン少佐が戻つてくるまでに直しておかないと、会わせる顔がないだろ・・・。少佐の相棒なんだから、捨てることなんてできない。」

「まあ、もう遅いですし帰りましょ。今日の飯はミハエルさんの分、俺が奢りますから。」

「そうだな、今日はもう帰るか。・・・ちゃんと奢れよ、今日はフルコースだ！」

「それは勘弁！」

会話をしながらヒルドルブから離れていく整備兵たち。その隙を天才は逃さなかった。

ヒルドルブのコクピットに入り込み、機械を取り付けていく天才。

「ふう、こんなものかな。・・・助けてあげるんだから、お代は頂いていくよ。」

モニターの脇に貼つてあつた写真をはがしてから、天才はその場を後にした。

「・・・少佐・・・。・・・・・少佐!。・・・・起きてください

い！テメシヨール・ソシネン少佐！」

最初はぼんやりと聞こえる言葉、元の世界で艦内で使われていた通信だ。懐かしい。

夢かと思つたが、だんだんその声がはつきりと聞こえてきた。

「うう！……なんだ？」

呼ばれた事に反応し、返事をする。それから俺はベッドの上に寝転がった状態で、辺りを見回してみる。

間違いない、これはムサイ級軽巡洋艦の居住スペースだ。

んだろう・・・と自分に言い聞かす。

「明日の評価試験に向けて、ヒルドルブの調整を行つていたのです

「平野試験……？ 今日は何日だ？」

「はあ……。しかつしてくだれこよ、今日は5畳8畳ですか。」

5月8日・・・。ヒルドルブの評価試験を行つ一日前だ。

ノイエニシテニシテ

夢にはじては繙かず見るんじやあないかどもしかじたひ
お千鶴と鶴のいとあの方の時間のせうが夢ぞひよのか?

「おい、お前。織斑千冬を知っているか？」

念のため聞いてみる、もしこれが現実なら織斑千冬は存在しない架

「哉斑千冬……ですか？地球の二ツポン人の名前ですね。有名な人空の人物た

物なのですか？」

やはり知らない。まさかここは本当に・・・?

おお、俺の知り合いでないか。
お前が知っている語がないんだ。

「はあ・・・。とつあえず、急ぎコムサイの格納庫に来てください。

L

懐かしいジオンの軍服を着て通路に出る。

卷之三

この無重力の感じ・・・まるで本当に元居た世界のような・・・。
考えを巡らせながら、格納庫へと着いた。

すると、ヒルドルブの胴体がある辺りに人が集まっていた。

「おい、何があつたんだ？機器の異常か？」

「来ましたか・・・ソンネン少佐。これは何ですか？」

整備兵たちがどいて指をさす。その先には、元居た世界ならありえないものがあつた。

「それは・・・！」

「ご存知なのですか？」

「ああ、見間違えようがない。あれは・・・」

「シールドエネルギー発生装置・・・」

別の世界に飛ばされてから付けた追加装備だ。ここが元居た世界なら存在するはずがない。

「シールドエネルギー・・・なんですかそれは？」

なんだそれは？そう言いたげな顔をする整備兵たち

「まあ、一種のバリアみたいなもんだ。敵の攻撃を何発か無力化できる。・・・あまり気にせんてくれ。整備の仕方は教えるが・・・」

。

概要を教えたとたん、整備兵たちの顔つきが変わった。

「まさか、新兵器ですか！？是非詳細を教えてもらいたいのですが！よろしいですか？」

「ああ・・・。」これはな・・・

詳しい説明をする俺。もしものときのために、原理と整備方法は心得ている。

それを、目を輝かせて聞く整備兵たち。

不採用の兵器の整備かと思つて気を抜いていた整備兵たちも、新技術と聞いて飛びついてくる。

これは本当に現実なのだろうか・・・？

その後、俺がヒルドルブの最終チェックをしたところシールドエネルギー以外にも、特殊装甲や特殊チャフなど、元居た世界にあるは

『 すがない装備が次々と見つかる。

そのたびに整備兵たちは俺に話を聞いてきた。

そして、コクピットに入ったとき確信した。これは・・・現実だと。モニターの脇に貼っていた写真がなくなっているが、代わりに別の紙が貼つてあつた。

『 助けてやつたんだから、感謝しろ。お代にちーちゃんの写真もうから。』

・・・・篠ノ之 束・・・・あいつの仕業か・・・。真っ先に思い浮かんだのがISの開発者である天才の名前だ。

まさか、こんなことまでできたとは・・・。

千冬のベストショットを持つていかれたのは残念だが・・・。

「俺の記憶が本当なら・・・。あつた！」

シートの横に隠してあつた写真を取る。

写真の中で、水着姿の俺と千冬が笑っている。

あの時は迷惑だつたなと思っていたが・・・。

「なんで、悲しくなるんだろうな・・・。元居た世界に帰れたのに・・・。

・・・それなのに、なんでこんなに千冬に会いたくなるんだ・・・？」

悲しみと寂しさがこみ上げてくる。もつ何年ぶりだろうか・・・？

涙が頬を伝つてている。

『 なぜ泣いている？ソンネン少佐。』

初めて千冬に会つたときと同じようなトーンの声が聞こえた。

『 初めて見たが・・・。私のオリジナルはこんな情けない男に恋をしていたのか・・・。』

なんだ？千冬の声にしてはやけに失礼な気がするぞ。

『 私はやはりオリジナルの弟である一夏がいいな。うむ。』

幻聴かと思っていたが、違うようだ。モニターのほうから聞こえる。

『 やはり私は一夏のような可愛らしい・・・む？氣づいたか？』

モニターに映る顔、千冬にそっくりなのだが・・・？

『 じろじろ見るなよ。オリジナルではなく、まがい物である私に惚れたか？』

「誰だお前は？」

発言がやたらと失礼な千冬に似た何かに声をかける。

『誰だお前とは失礼な。』

お前のほうが失礼だ。

『まあいい、教えてやる。私は篠ノ之 束大博士の作品である自我を持った高性能AI【シンシンちーちゃん完全ver】だ。』

「・・・・・・・・・・」

そんな作品で何をしようというのか、あの天才是・・・自我のあるAIというのはすごいが、洗脳作用のある歌とか歌うなよ？前にミハエルが見ていた、バーチャルアイドルが巨大戦艦と無人戦闘機をハッキングするというアニメのワンシーンを思い出した。

『貴様だけ元の世界に帰すのは可哀想だと思った束博士がじきじきにフルパッケージ版をインストールしておいたんだぞ。感謝しろ。』
「アンインストールはひとつやつてやるんだ？」

『・・・・・・・・・・』

「IJのウサミミのアイコンを押せばいいのか？」

『待て、それは押すな！頼む！』

そんなに必死になつて・・・。だが、もう遅い！俺をからかいすぎた罪は重い。

ポチッ

アイコンを押すとモニターが光つた。あまりのまぶしさに目を背ける。

「やかましいのが消えたか・・・。ふう・・・。」

『どうしてくれんんだ貴様！こんな格好・・・。責任を取れ！』

まだいたのかと見ると、そこには・・・

「なつ・・・。お前、その格好・・・。」

やたら口ボチックなウサミミにアリスファッショントした似非千冬が映つている。

これはまた・・・。

『どうしてくれんんだ！カスタムアイテムを使つたら、もう戻せな

いんだぞ！・・・聞いているのか貴様！』

「整備兵呼んでくる・・・。じゃあな・・・。』

『ま、待て。この格好でまさか・・・やめろ！』

あわてる似非千冬をよそにコクピットから出る俺。

「おい、整備兵たち。面白いものを・・・見たくねえか？」

まだ新技術があつたのかと食いついてくる整備兵たち。

俺は整備兵たちに外部出力用のケーブルを用意させた。

なにをするのかと聞いてきた整備兵たちだが、つぎに大型モニターに出力された映像を見て歓喜の声を上げる。

似非千冬も美人の部類に入る。女性と縁がない整備兵たちは、恥ずかしがる似非千冬と会話をしたり罵倒されたりして喜んでいる。

ムサイの中で戦術用萌えA.Iとして話題になり、後にこれを解析した者によって【史上初！高性能萌えA.Iシリーズ】とさまざまなタップが製品化されたとかなんとか・・・。

「千冬・・・。』

整備兵たちがわいわいとやるなか、俺は写真の中で笑う千冬を見て一人、千冬たちのいる世界の事を考えていた。

そして、5月9日。定められた運命が今、確実に変わらつとしていた。

15話 別れ（後書き）

あとの一話に大きく影響する15話です。

最後辺りはもうネタとしか思えない出来ですが、クリスマス企画の次に投稿する16話がシリアルズになるので…。

16話では遠吠えは落日に染まるのエフストーリーとなります。作者の技量での名作（作者の中では一番）をどれだけ表現できるかが一番心配なところですが…。

クリスマス企画ではバーーイが大活躍！…するとかしないとか。

さて、今回のおどがきですが…。

珍しく失敗談ではありません（汗）

作者は今話題（？）の家庭版ガンダムエクストリームバトをプレイしているのですが…、なんとヒルドルブ使用率のようなもののランキングで10010入りを果たすことが出来たのです！

それがどうした。早く小説書けよ！といった感じですが…。

これからもこの小説をよろしくお願いします。

もしもエクストリームバトで出会ったときはたぶんヒルドルブで一人MSイグルーをしていますが、小説かけよ！とかモビルスーシツ乗れ！とか声をかけてみてください。その時は多分あわてて小説の更

新を始めます（汗）

クリスマス企画 バーニーのクリスマス（前書き）

クリスマス企画です。

出来のほうはやはり微妙というかなんといつか……。
本当に申し訳ないです……。

2話投稿するので、あとがきは2話の最後に書きます。
しかし、2話の出来は……。

クリスマス企画 バーニーのクリスマス

「え、俺がサンタクロース？」

「ええ、この学校には織斑君しか男子がないので、バーニーさん
にしか・・・・や、やっぱりダメですよねっ！」

目の前の眼鏡童顔きよぬ・・・教師、山田真耶先生から突然頼まれ
たのは、EIS学園のクリスマスパーティでサンタ役をやつて欲しい
ということ。

本来ならソンネン少佐に織斑先生が頼む予定だつたらしいが、その
ソンネン少佐が行方不明になつてからもう何ヶ月も経つている。
そのため、学園の生徒と年齢も近く、頼みやすい俺にその役目が回
つてきたというわけだ。

「いいですよ。今日の夕方からやるんですね？」

「本当ですか！？衣装とかはもう用意してあるんで・・・・そ、そ
れじゃあお願いしましゅっ！」

最後、囁んだな・・・・。

その日の昼食をEIS学園の食堂で食べていかいかないかと言われた俺は、
山田先生の後について食堂へと向かう。
今まで学園に何度か来ていたが、食堂に来るのは初めてだ。
「EISがEIS学園の食堂ですよ。食券は向こうで買ってくださいね。
」
「は、はあ・・・。」

食券を買う列に並ぶ俺。すると、前に並んでいた女子生徒たちがこちらをじろじろと見てくる。

まあ、当たり前か。この学園で男性がいること自体が珍しいのだから。

そう思つてゐると、一人の女子生徒が声をかけてきた。

「バー二イさん、お久しぶりです。ベンさんは元気ですか？」

「あ、柚ちゃん。ベンの奴は問題ないさ。案外罰もなくてさ、今も基地で事務やつてんじゃないかな？」

この子は桐岡柚。ソンネン少佐に片思いしていたらしい女子生徒だ。前にE.S学園のグラウンドに墜落した連邦軍のモビルスーツのパイロットと文通をしているとの事。

その連邦のパイロットは、今は基地で事務をやつている。

そのパイロットには連邦のモビルスーツの解析を手伝つてもらつてゐるから、特に罰もなく事務を任せられているのだが、本来ならどうなつていたかは分からぬ。

「ところでバー二イさんはなんで学園に？」

「え？」

まずいなあ・・・サンタ役やることは生徒には秘密だし。適当に誤魔化すか。

「えーと、そうだー箇、箇に会いに来たんだ。」

「へええー。・・・それ、嘘でしょ。」

バレてるーとしさに名前が浮かんだのがあの黒髪を結つた少女だったのだが、やはり無理だったか・・・。

でも、ここであきらめたらサンタを任せてくれた山田先生に会わせる顔がない。

「本当さー箇のためにクリスマスプレゼントを渡しに来たのさー。クリスマスプレゼント配るのは俺だし、間違つてないはず・・・。

「え、本当に・・・」「キヤアアアアアあーーーツー！」

「・・・バー二イ、お気をつけて・・・。」

いきなり食堂にくる女子たちが叫びはじめた。柚はいつの間にかに

どこかに行ってしまっている。

「な、なんだ！？」

状況が分からず、混乱していると女子たちがなにか話しているのが聞こえた。

「算つて篠ノ之さんの事よね？」

「もしかして付き合ひでるとか？いや、でも篠ノ之さんは織斑君の事が…。」

「「「「キヤアアアアアアアーツ！」」

——それよ、それ！絶対それ！」

「おおかの五日五日つた應體に……はああ……」

どうしようか迷いながら、食券と引き換えにラーメンを受け取る俺。

そのまま近くのいすに座リとしたが、

「おお、おつがいだ。」

一夏たちのグループといつしょに食べることになった。そして、問題がひとつ・・・

ハニイ。その

卷之三

誤解を受けた上にフラれてしまつた。

悲しくなつてくれる。

好きでもないって言つても相手は美少女だし、そういう人にはラ
るヒロインよ・・・ホント。

「まあ、バーニィ。残念だつたけど、次があるさ！」

夏に在り。いよいよ始める講義は、

ところで、みんなは今日のパーティーのクリスマスプレゼントで

て何を頼んだんだ？」

「バーニィ・・・。フラれた後にそんな無理しなくても・・・。」

「無理はしていないんだけどな・・・。」

「わたくしは香水を頼みましたわ。」

「セシリアは香水か・・・。なんかすゞい高級そつだけど・・・。」

「私は新しい道着を頼んだ。」

「道着か・・・。確か笄は剣道をやつていたんだつけ・・・。」

「僕は新しいヘッドホンを頼んだよ。前に使つてた奴が壊れちゃつたから・・・。」

シャルはヘッドホンか・・・。この世界には携帯音楽プレーヤーなんてもんがあるから割とみんな欲しがるもの・・・なのかな?」

「俺と鈴は遊園地のチケットを頼んだぜ。今度一緒にテートに行くんだよな?鈴。」

「うん。もう、待ちきれないよ!」

「いいなあ一夏は・・・。テートか・・・。」

「ラウラは何を頼んだんだ?ぬいぐるみか?」

俺が少し冗談も交えてラウラに聞いてみる。E.S学園内では階級は呼ぶな!と命令されたので階級はつけていない。

しかし・・・ラウラの様子がおかしい。さつきから何かを深く考えているような・・・。

「私は・・・が欲しい。」

「ん?なんだつて?」

よく聞こえなかつたのでもう一度聞いてみる。

いつもは声がはつきりとしているはずなんだけどな・・・。」

そして、もう一度・・・今度は聞き逃さないよつこじつかりと聞いた。

「私は、家族が欲しい。」

その夕方、クリスマスパーティーが開かれ、俺は今サンタの衣装を着て準備している。

「よし、袋に入つたぞ・・・。山田先生、そつちの袋取つてください。」

「は、はい。・・・バーニイさん、ボーデヴィッヒさんはその・・・事情があつて家族がいないんです。・・・で、でもバーニイさんは悪くないんですよ。」

俺は悪くない・・・か。ラウラは織斑先生のことを家族同然に思つてゐるつて聞いたけど・・・。

やつぱり、本当の家族への憧れというはあるのかもしれない。

「もう、時間ですね。行つてきます。」

大きな白い袋を持つて生徒たちの居るパーティー会場へと向かつた。

「やあ、今日はみんなにプレゼントを持つてきだぞ。」

「そう生徒たちに渡つ俺。そのあとに順番で生徒たちがプレゼントをもらひに来る。」

俺が今眼鏡に白い付け髪という変装をしているからか、セシリアたちは俺に気づくことはなかった。

そして、ラウラの番だ。やはり落ち込んだような顔をしている。

「サンタクロース……すまない、私が頼んだものは用意ができるはずがないのだ……だから……」

そう言つたラウラ。しかし、俺は先ほど考へておいたことを口に出す。

「君はいい子だからプレゼントは用意してあるよ。」

「えつ……」

顔を上げてきよとんとするラウラ。

「メリークリスマス、ラウラ。……俺が、いや……俺たちがラウラの家族さ。」

付け髪と眼鏡を外し、ラウラに近づいた。辺りが静かになつたあと、拍手の音がたくさん聞こえた。

「バ、バーニー……お前は、ぐすつ……本当に……」

「ああ、これからは家族さ。一夏やみんなもそつだよな!」

「ありがとう、バーニー。……その……」

ラウラがなにか言ひたげな顔をしている。……なんだ?

「どうしたラウラ? あ、やつやつこれがラウラのプレゼント。かわいいだろ?」

ラウラに手渡したのはリボンがついたクマのぬいぐるみ。俺がパーティの前に買って来たやつだ。

「本当にいいのか? あと……その、バーニー……お前のことをお兄ちゃんと呼んでいいか?」

「もちろんさ! これからもよろしくな。……そのクマのぬいぐるみ、大事にしろよ?」

「ああ、一生大事にするべし! お兄ちゃん!」

みんな満足したみたいだし、バイト代はもうつたし……いい日だな！

山田先生にミハエルさんがプレゼント持つて乱入してきたのには驚いたけど……。

まあ山田先生も喜んでたし、いいかな。……あの一人も、もうそろそろくつつくんじゃないのか？

「バイト代はなにかな……つと。お？」

バイト代としてもらったプレゼントの箱を開けると、中には篠や一夏からのメッセージカードと時計が入っていた。

「こりゃいいもん貰つたなあ。この時計いいやつじやないか！」

早速つけてみると、手首にジャストフィットした。

メッセージカードを広げてみると、

『メリークリスマス。バーニー！』

と大きく書かれていた。それと、さつきパーティで撮った集合写真が貼つてある。

うれしくて少し涙が出てきた。

「ありがとな、みんな……。メリークリスマス。」

「おいおい、イブだつてのに仕事かよーふざけんじゃねえよー。」「隊長、落ち着いて！」
「イブはかわい子ちゃんとしてデーターするつて決めてたのこなー。」「まあまあ、ね。落ち着きましょーうー。」「よーし、俺はこれからあのデブの上官に抗議しに行く。全員付いて来い！」

「……はい……」「

ここはドイツ軍の本部。クリスマスイブなのに仕事があるといふことに腹を立てた男が格納庫を去った後、ひとつ影が格納庫へと入ってきた。会議の始まりである。

『アッグガイ、主達が出て行つたさ。』
『そりが、ありがとうジュアッグ……全く、主にも困つたものだ。いつも仕事を怠けているからこんなことになつてゐるのこ・・。』
『俺の主はちゃんとしてるぜ? いつもドリルは男の口マンツーで歌いながら整備してくれるしよー!』

『・・・まあ、静かにじょうよ。兄さんが話せなくて困つているぞ。』

話をやめる機械達。そう、この機械達は世界を超えてきた時に自我を持ち始めたのだ。
そこで、こうしていつも人が居なくなつたときに会議をしているのだ。

そこで、18メートルはあるモビルスーツにまぎれて、一人(?)小さな体を持つ人型の影があつた。

いや、人というには頭が大きいかも知れない。

『今日は皆に報告をしに来た。今日は皆の知つてのとおりクリスマスイブだ。』

モノアイを点滅させて会図する巨人達。それを確認し、小さな影は話を続ける。

『そこで、私は今日の夜世界の良い子達にプレゼントを配りに行くことにした!』

『なんと・・・・』

『プレゼントだと?見ず知らずの子供に・・・?』

ざわつき始める巨人達、そこに小さな影は一喝をする。

『静かにせんか!・・・今日は子どもたちにとつて夢の日なのだ!私は、2年前にこの世界に来て、意思を持ちこの大きさになつた以上、世の中の役に立たなければならない。・・・お前達弟とは違い、もう戦場に出ることはできない・・・。しかし、こんな大きさになつてもできることがあるんじやないか?・・・。そう考えた結果だ。』

『『『『兄さん・・・・。』』』』

『私はこれから世界中に行つてプレゼント配りをしてくる。お前達も人のお役にたつのだぞ!さらば!』

小さな影が消え、それとともに巨人達はモノアイの光を消し、会話をやめた。

「一夏の奴、きっとリア充してんだろうなあ・・・。俺もリア充してえよ・・・。今日だって店の手伝いするだけだつたしよ・・・。頭に巻いたバンダナが特徴的な男が一人、部屋でだるそつにテレビゲームをしながらそつぶやいている。

彼には妹がいるのだが、その妹は成績優秀・容姿端麗ということもあり、人気があるため今日も友達と出かけている。

彼とて不真面目に人生を送ろうとしているのではない。

しかし、彼を取り巻く環境は男のやる気をなくす理由には充分すぎた。

手伝いをしてもゲキをとばされ、何をしてもうつこしても一番後回しだった。

そういうた扱いを受けたために、彼はここまで墜ちてしまったのだ。もちろん、周りの人間は彼に強い人間になつて欲しくて厳しくしているのだが、彼がそれに気づくのは10年ほど後になる。

「なにか俺にもこう、出会いって奴はないのかねえ・・・。」

私設・楽器を弾けるようになりたい同好会に所属し、ベースをして

いるものの全くモテる気配がしない。

どうして自分の親友はあんなにモてるのだろうか?やはり楽器が少しうきるぐらいじゃダメなのだろうか。

そう思う男。

「なにかこうフラグみたいなモンがあれば・・・「わ、わーっ!

助けてくれ!」これはチャンス!」

急いで支度を済ませ、戸かられる男。

「弾、よせ!相手は刃物を持っているんだぞ!」

そのとき、彼の祖父からの声は男には全く聞こえていなかつた。

「へへへっ、クリスマスがいけねえんだ。あの女がクリスマスに俺をつるから！」

「や、やめろ・・・はなせ！・・・美紀・・・」

「裕介君つ！」

「うるせえ！それ以上会話したらこいつがどうなるか分かつてんだろうな？」

女性にフられた腹いせにカツプルを襲つた黒ずくめの男。その手には刃物が光っている。

「だれか、警察を呼んで！だれか！」

周りで見ている人たち、自分が狙われるのが怖くて電話をかけようとしている。

そんな時、一人の男の声が聞こえた。

「まで、その人を放せ！俺がお前と勝負してやる！」

バンダナを頭に巻いた男だ。年は16、7辺りだろうか？

その男は刃物を持つ犯人に勝負を挑んだのだ。

周りの人たちはそれを見て驚く。

犯人も驚いた。刃物を持っている自分に対してこの気迫。只者ではないと。

（どうしよう、俺・・・言つてみたけど勝てる氣しねえんだけど・
・。）

バンダナを巻く男の心理は、ただの小心者であった。

刃物を持つ男に勝負を挑むなど、正氣の沙汰ではないのだから。

「お前、俺と勝負しろ！俺が勝てばお前を警察に突き出す。いいな。

「わ、わかった。お前！死んでも文句言つなよ！」

刃物を持つ犯人からは、足を震わせて恐怖におびえる男の姿が、怒りで体を震わしているように見えたのだ。

「分かっている（分かってねえよ！俺、格闘技もゲームでしかやつたことねえし！）

格闘技もやつたことのない男は、漫画の真似をして格闘技の構えを取る。

そして・・・

「うわあああああーッ！」

「うわああつあああつ！？」

刃物を持ち、突撃してくる男。

その迫力に負けてへたり込んでしまうバンダナの男。

その顔に刃物が迫ろうとしたそのとき、何かが二人の間に割り込んだ。

その何かに刃物が当たった瞬間、刃が砕け散った。

あっけにとられるバンダナの男が見たのは、茶色をした、人と同じぐらいの大きさのロボットだった。

「う、うわ・・助けて・・・。」

おびえる犯人。その犯人にゅっくりと近づくロボット。

そして、犯人が走つて逃げようとしたそのとき、ロボットの腕が伸び、犯人を捕らえて気絶させた。

そのままどこから出したのか頑丈なロープで犯人をぐるぐる巻きにしてから、あとで警察に渡すように、またどこから出したのか紙に書いた文字を見せてきた。

「あんたは、一体…………これは？」

ロボットが小包を渡してきた。

『良い子にはクリスマスプレゼントだ。君の勇気、見させてもらつたよ。これは大切なものを守るために力だ……大切にしてくれ。……さらばだ！』

「消えた！？」

目の前のロボットが一瞬で消えた。その後、駆けつけた警官に犯人を渡した後、感謝状をもらつた。

周りに居た人たちは、ロボットのことについて話したらしいが……・警察はまともにとりあおうとせず、真実はその場に居た人だけが知ることになった。

「ただいまー」「馬鹿野郎！なんて無茶しやがるんだ……心配したことだぞ。」

「おにいつーお母さんに聞いたときは本当に心配したんだからー」事情聴取で遅くなつた俺を待つていたのは怒声だった。

しかし、いつもの怒声ではなく、俺を心配してくれて怒つてくれていることに気づき、自然と頬が緩んだ。

「おにいの分のケーキ、ちゃんと取つておいたんだからね。」差し出されるケーキ。小皿にとられた一切れのケーキが、たまらなくおいしく感じられた。

「ところでおにい。その小包何？」

「これか？クリスマスプレゼントだ。さつき貰つた。……開けてみるか。」

入つていたのは……。

「おにい、なにこれ？」

「ロボットのフィギュアか？……なんだコレ、光つ……」

「きやあつ！」

入つていた黄緑のフィギュアを触つたとたん、俺は光に包まれた。そして光が收ると……。

「おにい、大丈夫？……って、それ……I.S.？」

「え？ 鏡、鏡つと……つて、なんじやこりやあつ！」

鏡の前に立つと、そこには先ほどのフィギュアがそのまま大きくなつた感じの……人より少し大きいぐらいの全身装甲に覆われたロボットが立つていた。

「大変、おじいちゃんつ！ おにいがつ！」

「弾！ お前なにをやつてんだ！……お前、それ話題のI.S.じゃねえか……。」

こうして、俺はI.S.学園に編入されることになりました。

俺のI.S.の名前はゾック。前後対称のデザインが特徴的なI.S.だ。テレビでは第2の男性I.S.搭乗者と報道されて、騒がれ始めた。

「へへつこれで俺もリア充間違いなしつと……。」

浮かれているこの男を待つのは、天国か……それとも地獄か……。

そして場所を移して、ドイツ軍基地

『今日はいい少年に会えた。彼なら我らが末っ子を扱いこなしてくれるだろ?』

そう言つ小さな影・・・名をアッガイといつ。

『ゾックの主が現れるとは・・・クリスマスは伊達じやありませんね・・・兄さん。』

『末っ子の旅立ちを皆で祝おうじゃないか!』

『やはりクリスマスの掛け声はアレですよねー!』

『メリークリスマス!』『』『』

クリスマス企画2話目 正義の味方（後書き）

クリスマス企画、いかがでしたか？

出来については言い訳はしません。

未熟な作者の技量不足に起因しています。

そして、クリスマス企画といいつつ、本編にとても関係している話です。

五反田弾にゾックとか・・・・そこいらへんは気にせずに・・。

次話の投稿は年明けになると思います。

皆さん、メリークリスマス！

そして良いお年を！

16話 負け犬は希望を見るか？（前書き）

あけましておめでとうございます。
作者です。

今年もよろしくお願ひいたします。

今年の初投稿となるこの16話は、あのMSI&HOO第2話遠吠
えは落口に染まつたのSFストーリーです。
内容は原作と同じところが多くありますが、連邦軍からの視点はな
く、ソンネン少佐からの視点が多くなつてあり、といふ感じのSF
要素が盛り込まれています。

次話は、またIISの世界側の話になります。
物語も終盤にさしかかってきました。
そろそろ作者の技量が上がつてくれるとな・・・

16話 負け犬は希望を見るか？

「（ある物は何でも使う・・・・なりふり構わずだ・・・・。）」
「（603も・・・・僕たちも・・・・同じなのか・・・・？）」

ヒルドルブを見ながら何かを考えているのだろうか？

技術屋が一人、ヒルドルブを見ながら突っ立っているのが見えた。
そんな技術屋に、俺は声をかける。

「おう・・・、お前もヒルドルブが好きか？」

いきなり声をかけられ、戸惑う技術屋。

「い・・・いえ・・・。」

「・・・、そうか・・・。俺がこのヒルドルブの運用を任せている。
へつ、なりふり構わずな・・・。デメジエール・ソンネン少佐だ。」

敬礼をする技術屋。

「オリヴァー・マイ、技術中尉です。」

この技術屋と会うのは本来なら今日が初めてだ。

だが、俺はこいつを知っていた。

「ああ・・・。世話になる。」

それは・・・。以前、全く同じ日付、状況でもう会っているからだ。
簡単に言えば、タイムスリップのような・・・。つまり、俺は時を
逆行してしまったようなのだ。

「それよりも・・・。こいつはどうだ？最高速度110km、主
砲口径30サンチ・・・。モビルタンク。いずれこいつは量産され
る。地球を制圧するためには、絶対に必要だからな。」

以前全く同じ事を言つた気がする。・・・しかし、今回はヒルドルブに語りかけるのではなく、技術屋の田を見てそう言った。

「今回の任務は、テストとは名ばかりの・・！」

そう、以前の俺はその事実を認めたくなかった・・・。現実から田を背けていたのかもしれない。

「ああ・・・。分かっている。・・・・・だがな・・・・任された以上、全力でやるしかないだらう?」

「・・・・・」

「地球の侵攻作戦は、思つようじ順調じゃない。物資だけを消費するこの状況で、一機でも多く戦力が欲しいんだらう。」

「それは・・・・！」

驚いた顔をする技術屋。予想外の反応だったのだろう。

『デメジエール・ソンネン少佐、オリヴァー・マイ技術中尉。至急ブリッジへ』

「ブリーフィングか・・・・行ぐぞ、技術屋・・・。」

その後、作戦内容の説明が終わってから、コムサイで地球へと降下することになった。

ヒルドルブの「クピットで計器を操作する俺に、似非千冬が話しかけてきた。

『なぜそんなに急いでいるんだ?まだ評価試験までに時間はあるが?』

「いや、もしものことも考えて準備をせんとな・・・。今回評価試験を行う集積所付近には敵軍の部隊がいる可能性があるしな・・・。」

『

もしもじゃない、今回の場合は必ずだ。

この後、ザク6機と61式2両の相手をすることになるのは、回避できない運命なのだ。

ならば、できることは一つ。運命を変えるために努力をするだけだ。ふと、制御関係のプログラムが砂漠用ではないことを思い出した。そのプログラムが改善できればこれから戦いが楽になるのだが、俺はそういうことは専門外であるため、どうしようもない。

制御プログラムの画面を開いていると、似非千冬がまた話しかけてきた。

『そのプログラム、修正してやろうか?』

「なに?」

『私は高性能だからな。そのぐら~20秒でできるだ。』

「そうか・・・。だがお前は・・・。」

『お前は、私のオリジナルが慕う男だ。・・・』のぐら~の手伝いはしてやる。』

「お前・・・。」

それ以上は言葉を続けず、降下までの時間が過ぎていった。

コムサイはやはり以前と同じように襲撃を受けた。

コムサイから降下し、俺は集積所の方角から出ている煙を確認してから、ヒルドルブのショベルームを使ってトレーンチ（塹壕）を掘つた。

今回は万全の体勢を整えていたとはいえ、やはり分は敵部隊にある。数の差というものは勝敗を分ける決定的な要素になる。

いくらいからかの狙撃で数を減らしても、1対1にでもならない限りこちらが不利なのだ。

そもそも、戦車とモビルスーツでは運用方法や用途が違う。ビックトレーナーなどの陸上戦艦を破壊することを目的とした戦車と、ある程度の白兵戦もこなせるモビルスーツとでは、1対1という条件でも戦車が不利なのだ。

もちろん、そこからさまざまな要素が絡んでくるのは言うまでもないが・・・。

俺は照準付きのモニターを下ろし、索敵をする。

「集積場をやったのは連邦のコソ泥だ・・・。あらうことか、我が軍のザクを使ってやがる・・・。鹵獲したザクを6機もだ・・・。」

『なんて卑劣な・・・おそらく第128集積場も・・・。』

『少佐！ 敵との接触は避けてください！』

「無理だ！ すぐに見つかっちゃう！ 先手を打たなきゃ袋叩きに遭うぞ・・・。」

数の差があるときは、まず射程を活かして相手の数を減らすのが普通だ。

相手の体勢や向きを見て、狙撃の目標を絞つていぐ。

10kmもの距離を狙撃するのだ。冷静に判断されでは狙撃に気づかれ、回避された拳銃に接近されお陀仏・・・といふこともあら。

「止まってるやつからやる・・・。背中向きの奴を第一、撃破した0.5を調べてる奴を第2目標・・・。APFSDSを装填。次弾も同じ！」

弾が装填され、目標に向かって一直線に弾が飛んでいく。

敵の一機が気づいたようだったが、すでに遅かった。

一機は四散し、もう1機は左腕が吹き飛んだ。

その後、他の敵機が急いで稜線の影へと隠れていった。

「初弾命中。撃破！ 次弾それやがった！ 大破ならず。温まつた砲身に制御が追いついていない。」

おかしい・・・。似非千冬が先ほど改善してくれたはずなのが・・・

・。

『今のデータを解析すれば、射撃プログラムの修正をすることができます。』

そう通信してくる技術屋。やはり技術屋は戦闘を分かつちやいない・か。

「・・・で？今日射撃する分はどうすんだよ？」

『・・・少佐の経験で修正して下さい。』

技術屋が人の経験に任せるとこうのもおかしな話だと思つた。もちろん口に出しはしないが・・・。

「勘であわせろってか？」

『・・・とりあえずは・・・。』

「へつ・・・。俺の勘でね・・・。」

技術的な補助がない分厳しい戦いになるのだが、俺は長年培つてきた経験と勘で敵機を倒せることに喜びを感じていた。

「よし、そろそろ敵部隊からの反撃があるはずだ。攻撃が来たら、セカンドトレーナーへ移動する。」

そして、稜線の影からザクのフットポッドからの射撃が来たのを確認した俺は、移動を開始した。

「ふん、来たな・・・。戦争を教えてやる。曲射榴弾、込め！」

トレーナーから離れ、相手のほうを向きながら牽制射を加えていく。ミサイルの着弾後に発砲することで、発砲煙を「こまかす」ことができるのだ。

「セカンドトレーナーに移動中だ！」

通信でそう呼びかける。直後、ミサイルが自機の脇に着弾したようで、衝撃が俺を襲つた。

「シールドエネルギー発生装置も不調か・・・。そろそろセカンドトレーナーに着く。」

トレーナーの陰に隠れ、射撃準備をする。しかし、コムサイからの連絡が来ない。

「おい、コムサイー応答しない・・・、ちつ、通信機がイカれたか・

・・。とにかく、記録は続ける。」

これまでの敵の動きを見る限り、敵のパイロットはかなり優秀なようだ。

戦車独特の戦法にうまく対策していく。もとは戦車乗りだったのだろうつか？

とにかく、敵に場所と戦法を知られている以上、まともにやりあうのは危険だ。

ここにどるべきことは、相手の裏をかくこと。つまり、心理戦である。

人間は予想外の行動をされると、簡単にパニックに陥つたりする生き物だ。

そこをうまく利用することで、戦場での生存率が上がる・・・というのが俺の考えだ。

「次は、焼夷榴弾でビビらせる！」

次に使うのは、ただのナパーム弾。耐熱処理がなされているザクには効果がないのだが・・・。

狙うのはバズーカを持っている奴。バズーカは打ち込まれるとマズイので、持っている奴は早めに倒しておいたほうがいいと思つたらだ。

着弾してから相手の動きが止まつた。そこに弾を打ち込み、一機を撃破する。

そう、ザク本体には全く効果がない。しかし、突然モニターに映る炎でパイロットはパニックを起こしてしまったのだ。

相手が腕の立つ相手でも、突然のことには反応できなかつたようだ。だが、他の敵機はそこに気をとられることなくスラスターを使って空中から接近してきた。

「空中戦か・・・。やはり熟練した部隊か！」

以前も驚いたが、この連邦兵たちはモビルスーツによる空中戦まで展開していく。

熟練したパイロットでなければできない技だ。

ヒルドルブはタンク形態では自走砲そのものため、そういう機動に弱い。

砲塔自体は上まで稼動するのだが、どうしても距離が詰められてしまう。

ヒルドルブは最高速度110kmを誇るが、やはり無限軌道キヤタビリでは宇宙での高機動戦闘に使うスラスターなどには速度では勝つことはできないのだ。

上からザク・マシンガンの弾の雨が降つてくる。しかし、ヒルドルブの重装甲はそれをはじき返す。

「へっ、この装甲、頼もしいね。」

愛機の頑丈さを褒める。シールドエネルギーがなくても、これぐらいの攻撃なら受け止められる頑丈さをもつているといふのは、ヒルドルブのいいところである。

そして、敵機から離れながら、走行中に超信地旋回（左右の無限軌道をそれぞれ逆方向に回転させることで、曲がるのではなくその場で回転することができる。ショベルカーなどの重機や戦車など、無限軌道を持つ車両でしかできない技）をする。

そして、敵機の方向に砲塔が向いたときに射撃をする。

ヒルドルブは自走砲のように砲塔が固定されているため、逃げながら射撃するのが難しい。

しかし、このテクニックをつかうことで逃げながら射撃を行うことができるのである。

「ちつ、なかなか隙を見せないか……ん？……あれは？」

敵も絶え間なく動き、砲弾に当たらないようにしている。

そのため、このままでは撃ちきって残弾がゼロになる危険性がある。そんな時、前方が急な斜面になつていていた。

そこで、ひとつの作戦を思いつく。

「よし、ついてこいよ……。」

斜面に最高速度で突っ込む。そうすると、軽くジャンプしながら斜面の下に着地することができた。

しかし、その隙を敵は逃さず、マシンガンで無限軌道を狙ってきた。左のブロックの一番後ろにある無限軌道が損傷したことがモニターに警告される。

俺はこのときを待っていた。

マシンガンを捨て、トドメをさすためにシユツルム・ファウストと呼ばれる使い捨てロケットランチャーを構えて接近してくる敵機。逆にトドメをされると知らずに・・・。

「スマート散布！」

スマートを散布し、敵の視界を奪いながら切り札を用意する。危険だと気づいたのか、敵の隊長機らしき機体がマシンガンを乱射しながら突っ込んできた。

「へへっ、今度は油断しないぞ？ こいつでどうよ！」

マイピュレーターを操作し、自衛用のザク・マシンガンを敵隊長機のコクピットに叩き込む。

蜂の巣になつた隊長機はその場に倒れる。さすがにこれでは生きてはいないう。

「おしまいなんだよ！ お前も！」

目の前の出来事に呆然としていたもう一機のほうを向き、主砲で木つ端微塵にした。

横に砲塔を向けたために反動で機体が傾いたが、すぐに体勢を立て直して残りの敵のほうへと向かう。

「マシンガンが弾切れ寸前だ！ 自力で調達する！」

向かってきたザクをマシンガンで蜂の巣にする。そして、倒したザクの横に行ってマシンガンを拾う。

そこに、61式2両が砲撃をしてきた。

61式の155mmの2連装砲は火力があり、その巨体もあわせて61式は陸の王者にふさわしい車両なのだが、ヒルドルブと比べれば赤子も同然。

「雑魚め！ 残りはどこだ！」

マシンガンで1両の61式を撃破する。そして、もう1両が稜線の

影に隠れたのを確認すると、主砲を撃つて遮蔽物ごと吹き飛ばした。

「最後のお客か・・・！」

向かつてくる最後のザク。すぐに迎撃しようとしたが、機体が動かない。

「倒したザクのパーツを巻き込んだ。HE装填、次TYPE3信管ゼロ距離！」

主砲を地面に向かつて撃ち、機体を大きく傾かせる。

「でええい！」

そのまま片輪走行をして、ザクに体当たりを食らわせる。

そして、TYPE3をゼロ距離で撃ち、ザクは沈黙した。

「はあ・・・はあ・・・惜しかったな・・・」

そう、惜しかった。やはり、考えてみると今回の敵はかつての戦車乗りたちだったという結論になつた。

俺は時代についていけなかつた戦車乗り・・・今回のモビルスツという時代の一部についていつた戦車乗りたちも、敵軍に偽装なんという汚い役割を任せられていた。

「そう、負け犬だ。俺もこいつらも・・・」

『負け犬なんかじゃない・・・。』

似非千冬だ。戦闘中は静かにしていたから、すっかり忘れていた。

「どうしてだ？俺は時代に取り残された負け犬だぞ？」

『お前は・・・未来への希望を持つてる。オリジナルや一夏という大切な人もいる。』

「・・・。』

『だから、自分のことを負け犬などというな。・・・お前は、幸せものなんだよ・・・。』

『似非千冬・・・。』

そうか・・・。千冬や一夏・・・。ミハエルやクラリッサ、そしてデュバル少佐やワイズマン伍長。

こんなにも支えてくれた人たちがいる。

だから・・・。幸せ者・・・か。

『・・・春・・・・・。』

「ん? 何か言つたか?」

『千春・・・・・私の名だ。似非などと呼ばれていては気分が悪い。』

『いつ・・・・・いい奴だな。千冬のほうが好きだが。』

『千春。・・・・これでいいか?』

『／＼／＼・・・・なんか照れるぞ・・・。やはり似非千冬でいい。』

『

お?これは・・・。

「千春。どうした?顔・・・いや、A-Iだから画面(?)が赤いぞ?」

『ニヤニヤしながらじめてみる俺、これは楽しい。』

『・・・・・!やつぱりお前は悪い奴だ!負け犬だ!』

俺は、幸せ者だな。・・・・だが、いつお前のいる世界に帰れるんだろうな・・?』

・・・・千冬・・・・・。

試作モビルタンク、ヒルドルブ・・・技術試験報告書。

我が603試験隊は、去る5月9日、ヒルドルブの地上試験を実施せり。

されど、敵「マンドとの遭遇により、対モビルスーシ戦闘に発展せり。

この戦闘において、試験パイロット、デメジエール・ソンネン少佐

は・・・複数のMS-06と交戦、その「ビーム」を撃破し、試験任務を全うする。

戦闘は、試作兵器が小破するも、それ以上の戦果を持つて、過去の不採用評価を払拭せしめたと・・・信じる。

「これは・・・このモビル・タンクとやらの戦闘報告書に書いてあることは本当なのか？」

「はつ。すべて事実であります。ガルマ様。」

ガルマと呼ばれる青年は、前髪をいじりながら、言葉を続ける。

「2日後、キャリフォルニアの視察に向かう予定があつたはずだな？」

「は、はつ。まさか・・・。」

「ガウでそのモビル・タンクとやらを回収するぞ。私の部隊に引き入れよう。準備を頼む。」

「はつ。」

兵士が部屋から出て行き、一人になつた青年は、報告書に目をやる。ザク6機を大型戦車で撃破。

「戦車がモビルスーツを撃破か・・・。是非私の元で活躍してもらいたいところだな・・。」

青年は目を輝かせていた。

後に連邦軍のモビルスーツと交戦し、その若い命を散らす運命の青年。

その運命が少しずつ変わつていて、誰も気がつかなかつた。

『はーちゃん。あの計画、どうだつた~?』

『束博士・・・射撃プログラムの改変、シールドエネルギー発生装置の機能停止などを実行しましたが、勘で対処されました。』

『あのオツサンめ・・・せつかく元の世界に帰してやつたのに・・・。はやくやられちゃえばこいのにね~。』

『回収の時間まで、こちらの時間あと3ヶ用ですか・・・。』

『そりだよ~。少し寂しくなるけど、こいつはこいつくんたちがいるから退屈はないよ。』

『そうですか・・・。それでは、時間ですね。』

『本當だ~。じゃあね~、はーちゃん。』

『(・・・・・私は・・・・・、どちらに味方すべきなのだろうか?分からない、知らない・・・。あの男のことを考えるとドキドキする。私はただのAIだというのに・・・。これが、束博士から授けてもらつた・・・感情なのだろうか・・・?・?・?いや、私はただのAIではなかつたか・・・。織斑千冬といつオーリジナルの遺伝子を使つた・・・。)』

たおやかな運命が、確実に変わつとしていた。

16話 負け犬は希望を見るか？（後書き）

期待してくださった方、駄文ですいませんでした。

作者の全力をつくしたはずだったのですが、こんなことに。。。

さて、次回はあの五反田弾君がI.S学園へ？

バーニィとデュバル少佐は果たして新年をどう迎えているのか！
一夏ハーレム（？）がなくなつた今、ヒロインたちはどうなるのか？

お楽しみに！

なんて予告ができるらしいなと思っています。

おい篠ちゃんが幸せになれる展開にしろよとかセシリ亞出せセシリ
アーとかシャルどこいったとかラウラとバーニィどうなんのとか・
・・感想♪意見あればお願ひします。

17話 親友（前書き）

今回の17話はISの世界側の話です。
クリスマス企画からの続きになります。

「おお～、これがE.S学園か。受付は……」しつちか。

俺は五反田弾。

クリスマスのある出来事から、世界で2人目のE.Sを使える男になってしまったため、今こうしてE.S学園へと来ている。男でE.Sを使えるとなると、世界中の組織から狙われてもおかしくない。

そのため、ほとんど強制的にE.S学園へと入学させられた。

「すいません、俺が今日からここに通う五反田弾なんすけど……」

受付で案内を受ける俺。

どうやら俺は1年1組に所属することになったようだ。

「ありがとうございます。……1年1組は……どうだ？」

早速1年1組へと向かおうとする俺。周りが女子生徒ばかりということで、期待が膨らんでいた。

そこに先ほどの受付の人が声をかけてきた。

「すいません、五反田君待つてください！教室に行く前に、着替えてアリーナに向かってくださいね。」

アリーナ？マップを見て場所を確認する。

「わかりました。……はあ……なにすんだろ？」

何をするのか分からぬまま、俺はアリーナへと向かつた。

アリーナの待機室で待つこと数分。

よく見たことのあるスース姿の女性が待機室へと入ってきた。

「千冬さん、久しぶりっす。」

「織斑先生と呼べ、馬鹿者！」

「ひええー、こええよ。もともと怖かつたけどさ。。。

「なにか失礼なことを考えていなかつたか？五反田。」

「い、いえ。何も。。」

なんだこの人。人の心が読めるってのか？

変なことは考えないようにして心に誓つた。

「五反田、今から転入試験を行う。もつとも、ISのデータ収集が

目的だがな。」

「転入試験？」

「そうだ、これからお前にはISを装着して、アリーナで動かしてもらひ。いいな。」

まあ、大したこともやらないんだろうと思ひながらアリーナのピットへと向かつた。

「すげえなこりや。。。

ピットの中は、まるで昔のSFやロボットアニメに出てくるような設備。

IS学園でなければ整えられないような道具や機械に目を取られて、スピー・カーから「早くしろー！」という声が聞こえてきたので、急いで準備を始めた。

「千冬さん、やつぱり恋人がいなくなつてからピリピリしてんなあ。。。

そう小声で呟く。何ヶ月か前に、織斑千冬の恋人（？）だった男が失踪したという話を聞いていた。

その男が操縦し、世間を騒がせたドイツ軍の新型戦車もいつしょに消えたというのだから、話題にならないはずがなかつたのだ。

「一夏によく話を聞いてたな。その人のおかげで鈴と上手くいった

とか・・・・・。」

この学園に通う親友から、よく話を聞かされたものだ。

とても頼りになる人がいるとか、すごいいい人なんだとか。

「俺も一度話してみたかったなあ・・・・・。一夏がそこまで言う人つてのも興味があるし・・・。」

そう呟きながら、準備を完了させる。

「よし、IS装着・・・・・つと。」

ISを起動し、体がロボットのような装甲に覆われる。

『五反田、準備が遅いぞ。ハッチを開けるから早くフィールドへ向かえ。相手が待ちくたびれているぞ。』

相手？ そう疑問を感じながらも、カタパルトへ足を運ぶ。

「よし、五反田弾。ゾック、行くぜ！」

昔見たロボットアニメのセリフを真似しながら、フィールドへと飛び立たなかつた。

カタパルトで射出されたまではいいものの、ISに口クな推進器も付いておらず重量もあるためにすぐに地面に落ちた。

「お、おい。これ飛べないのかよ！？嘘だろ！？」

テレビや雑誌で見たISと全然違うとは思つていたが、まさかここまでとは思わなかつた。

ISのウリである高機動戦闘ができないというのだ、このISは。困惑していたら、目の前に装備詳細が映し出された。

「え？ と、飛べない代わりにホバリングによる移動ができるのか、へえ・・・・・ってそれ、どのISでもできるじゃないか！ ちくしょう！」

自分の操るISの機動力のなさにがっかりしながら、フィールドの中心へと移動すると、そこにはよく知る人物が待つていた。そう、自分の親友である・・・・。

「よお、一夏じゃねえか。久しぶりだな。」

その親友へと話しかけると、親友は後ずさつてISの刀を構えてきた。

「お、俺にロボットの親友はいないぞ？まさか未確認のエイカ！」

親友に忘れられていたことと、襲撃者に間違えられたことのダブルパンチで思わず涙が出そうになつた。

「俺だ、俺。分かるだろ！？」「

「いや、俺はその手には引っかかるないぞ！テレビでやつてたオオレ詐欺だろ。」

ダブルパンチからのアッパー。親友に詐欺呼ばわりされて心が折れた。

それからも誤解を解こうとするも全部失敗。そして1分ほどした時。

『五反田！織斑！何をやつている。早く模擬戦を開始しろ！』

スピーカーから怒鳴られた。

「弾、お前弾か？」

「気づくのおせえよ……普通声とかで気づくだろ……。」

「いや、俺はアリーナに呼び出されただけで、ロボットに乗った弾が来るとかは知らなかつたし……。」

「いやいや、ロボットじやなくてエイシだし。テレビでもやつてただろ？」「え？あ、そつか。」「・・・・・・・・。」

『早くしろ！グラウンド10周させるぞ！』

鬼だ、鬼だよあの人。そう思いながら、戦闘体勢をとる。

「久しぶりの再開で模擬戦とはね……。じつちはまだ動かし方も口クに分からんんだ。手加減してくれよ一夏。」

「ああ分かつた。じゃあ、始めようぜ！行くぞ弾！」

一夏と戦うなんて、対戦ゲーム以来じやないか……わくわくするぜ。

見せてみろ、お前の実力を。

五反田弾は不敵に笑つた。

「つてカツコ良くきめてみても、何だよこの戦いは！俺不利すぎんだろ！」

不敵に笑つた直後、五反田弾は逃げ回つていた。

「なんだよ弾、お前も飛べばいいだろ！そりやあつ！」

「うわわっ！危ねえ！・・・・・」このI-S、飛べないんだぞ！

刀を振るつてくる親友にそう叫ぶ。

「I-Sが飛べないわけないだろ！ほら、逃げてるだけじゃダメだぜ！」

今だけこの親友と親友の縁を切ろうかと思つた。

「五反田の奴、逃げてるだけだな。全く・・・・・」

管制室で、織斑千冬は模擬戦の様子を見ていた。

「データは取りましたが・・・・・。規格が違うのか、五反田君のI-Sは名前しか分かりませんでした。」

「そうか。もともとあのようなI-S、束が作つたとは思えないんだがな・・・・・。」

まるで出来損ないのロボットのような不格好なスタイル。空中戦もできない性能。そして全身装甲。

自分の知り合いである天才がそんな物を開発するとは思えなかつた。「それにも、あのI-S第1世代なんでしょうかね？全身装甲ですし、機動性も低いですし。」データをとつてている同僚も、疑問を口に出している。

「そうかもしれないな。それか、どこかの国の試験機か。・・・・・あんなI-S見たことがないがな。」

本当に、模擬戦をしている白式どゾックを見ていると、その外見の

差は遠くからでも分かるほどだ。

大きさは1回りほどゾックが大きいし、何よりも前後対称のそのデザインを見間違えるはずがない。

「本当に変わった形ですよね・・・。前に臨海学校で見たモビルスー
ツに似ている気がしますが・・・。」

「確かに、そうだな。」

確かに・・・。以前、臨海学校のときに見た水陸両用のモビルスー
ツに外見が似ている気がする。

あの変わったデザインといい、尖った性能といいそつくりだ。

「ドイツ軍に問い合わせるか。」

とりあえず、モビルスーツを保有するドイツ軍に確認をとることに
した。

「武装、武装はなんかないのかよ！・・・あつた。よし、発射。」
武装欄を見たら4連装ビーム砲というものがあつたので、それを発
射する。

すると、胴体の穴から太いビームが4本発射され、白式の脇を掠め
た。

「すげえ威力だ！直撃させれば！」

「なつ！なんだよその武器、反則だろ！」

掠めただけで白式のシールドエネルギーは大きく減らされている。
直撃すれば一撃だったかもしれない。
もともと燃費の悪い白式には痛手だ。

「空飛んでるお前に言われたかないね！ほれ、ほれ！」

調子に乗つて白式にビームを乱射する。

一夏は回避するのに精一杯のよつで、近づいてこない。

「くつそおつ！何か手は……あつー！そつかー！悪いな弾。」の勝負俺の勝ちだあーつ！」

真上を取るよつに上昇する一夏、それを迎撃しようとするが……。

「なつ、射角がねえ！？」

そう、胴体に内蔵されているという性質上、射角の外に回つこまれると対処できないのだ。

ビームは何もないところを通り過ぎていく。

「もうつたああつー！」

振り下ろされる刀。しかし……。

「メガ粒子砲！間に合え！」

頭のてつぺんから一筋のビームが発射され、一夏へと向かった。

「なつ！そんなところにもビーム砲が！」

「くくつどうよ。・・・・・決着つけるぞ一夏。」

「そつか、じやあ俺も全力で行く！零落白夜発動！」

上から突つ込んでくる白式に頭部からビームを乱射する。

しかし、撃ちすぎで出力の低くなつた頭部からのビームは刀ですべて切り裂かれてしまつ。

そして田の前には瞬時加速をかけてきた白式の姿があり、直後に勝敗が決した。

「・・・で、IS初心者の弾に負けたのね、一夏は。」「はい・・・」

「話だと一夏の得意な格闘戦で負けたらしいじゃない。」

そう、あの時とったに出たゾックの腕に殴られて一夏は負けたのだ。それがなれば一夏の勝ちだつただろう。

「はい・・・事実です・・・。」

そしてあの後、教室で自己紹介をした後に校内の施設案内も兼ねて、IS学園の食堂で昼ご飯を食べることになったのだが・・・。

なんだろつか？この重苦しい雰囲気は。

今一夏に説教しているのは、一夏と付き合っている幼馴染の鈴。クラスは違つたのだが、食堂でバッタリ会つた。

「あのさ、別にそこまで責めなくてもいいんじゃないのか？」

そう仲裁しようとしたのだが・・・。

「弾は黙つて！やつぱり一夏は訓練不足ね。今日放課後、一人で訓練！」

「ちようどいい、私もその訓練とやらに付き合おう。紅椿にまだ慣れきつていないしな。」

今発言したのは黒髪美人の篠ノ之 篠さん。同じクラスで、一夏はファースト幼馴染と言つていた。

鈴が一夏と付き合つまで、一夏に好意を寄せていたが今はあきらめているとの事。

「篠さん！まだ諦めていなかつたのですか？心配ですからわたくしもご一緒させていただきますわ！」

こちらはセシリア・オルコットさん。イギリスの代表候補生で、金

髪美人。

鈴が一夏と付き合つまで、一夏に好意を寄せていたが今はあきらめているとの事。

「僕もいっしょに訓練しようかな。冬休み中になまつちやつたし。」

やさしい雰囲気のこの人はシャルロット・デュノアさん。ボクつ娘ですよボクつ娘！現実に存在してるとは……。

ちなみに鈴が一夏と……つておい。

一夏ハーレム作りすぎじゃね？全く、それに鈍感だったもんだからさらにタチがわるい。

それに、この3人絶対諦めてないでしょ！隙あらば一夏ゲットだぜ！する気だよ。

「全く……一夏……お前つて奴は。」

そう呆れていると、一人だけハーレム内紛争に加わらずにテーブルで手紙を書いている少女がいた。

確か名前は……

「ボーデヴィッヒさん。なにやつてるの？」

うん、無難な質問の仕方だな。書いている手紙は……年賀状？「五反田か。私が書いているのは年賀状と呼ばれる文書だ。日本では知り合いに送ると聞いた。」

「へえ……あ、これはボーデヴィッヒさん宛てに来た年賀状？」ボーデヴィッヒさんが書いている年賀状の横に、ボーデヴィッヒさん宛に来た年賀状があつた。

「そうだ。それは、バーニーという私のお兄ちゃんから来た大事な年賀状だ。だから、私も全力で年賀状を書いているのだ。」

なるほど。でも、よく見てみたら年賀状つていう割にはやたら文字がびっしりのような……。

「ボーデヴィッヒさん、すごくたくさん書くんだね。」

「これか？クラリッサが、年賀状とは一年の抱負を500文字以内で書くものだと言つていた。」

誰ですか？クラリッサさんって。しかもクラリッサさんジャパン
ズカルチャーを違った解釈してない？

「あ、あのさボーデヴィッヒさん。普通はあけましておめでとう
て書いたり今年もよろしくねとか、短い文章書いて、あとは絵をつ
けてみたりするだけでいいんだよ。」

「む。そうなのか？ならばこれは没だな。五反田、正しい書き方を
教えてくれないか？」

普段なら面倒だから断るところだけど、田の前に元のものは少し育つ
てないけど紛れもない美少女。

ここで優しさを見せれば……。

「いいよ、じゃあここはこうして……。」

7分後

「出来た。出来たぞ！五反田、感謝するぞ！」

「どういたしまして。あとはポストに投函してくれるだけだね。」

「分かった。ポストまで行つて来る。」

「ボーデヴィッヒさん、そんな急がなくとも……。」
やつたか。走るの速いなあ……。

走つてポストに向かう姿が子供みたいで、自然と微笑んでしまう光
景だった。

「一夏あ！アンタ、私の彼氏でしょ！なんで他の人もいっしょに訓
練するのよ！」

「いや、別にただの訓練なんだしさ……。」

「そうだ、一夏の言つとおりだ。やましい事をじつなどとは少し
しか思つていない！」

「そうですわ！ 篓さんの言つとおりですわ！」

「二人とも、本心がでてるよ。」

やれやれ、向こうはまだ紛争が終わっていないようだ。普通なら自

然じやなくとも田をそらしたくなる光景だ。

しかし、一夏め……うらやましい。もう一人の親友、数馬に連絡しどこへ。

「さて、俺はどうすつかな……。あ、ボーデヴィッシュさん……さつきの没になつた年賀状置きっぱなしじゃねえか……。ちょっと見ても……いいよな？」

・・・・・・・・・・。

「なんだ……俺が教えなくたつて、いい年賀状だつたんじゃないか。……ちょっと悪いことしちまつたな。」

内容は年賀状には見えなかつた。しかし、とても無邪氣な文で、見ていると優しい気持ちになれる。

そんな手紙だつた。

IS学園に入つて一日目、いろいろなことがあつたけど……これからが楽しみだ。

17話 親友（後書き）

今回の17話、ついに五反田弾が出てきました。
近いうちに原作で弾と関わりがあるの人も出てくる予定です。

ちなみにゾックはザクよりも推力は遙かに上ですが、今回は出力が
高く、鈍重な機体として表現しました。
まあ、戦い方を知らない素人が使つたらこうなる・・・といった感
じで。

さて、次回はまた舞台は宇宙世紀へ。

ある人物との出会い、そして連邦軍の新型兵器たち。
後に伝説となるモビルスーツ相手にソンネン少佐はどう戦うのか！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6496v/>

地上の王者、ISの世界へ

2012年1月12日20時54分発行